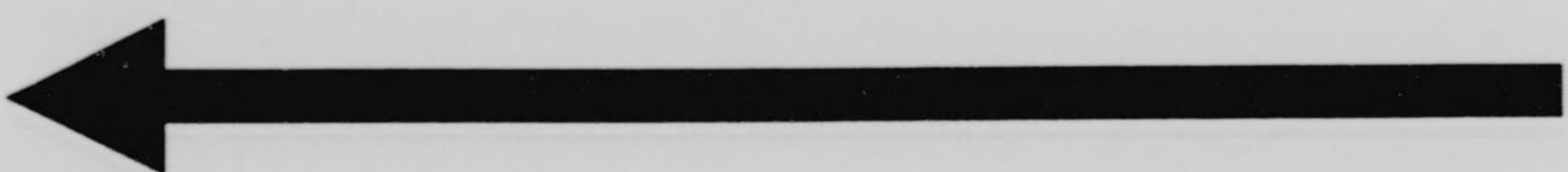


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

371
69

始



371-69



戦後の事業

東方經濟調査會編纂

大正
7.4.23
内交

題 言

世界の變局を背景として我經濟界は未曾有の發展を遂げ、國家として空前の富を蓄積し得たると同時に、個人としても一攫巨萬の成功を博した者が尠くない。是れ固より慶すべき現象には相違ないが、直ちに又大いに警戒すべき事實と傾向を此の間に認めなければならぬ。所謂成金熱に浮かされて實業に非ざる虚業的方針の下に勞せずして富を得んとするものあらば、啻に財界の秩序を紊るのみならず、一般國民思想を毒して憂ふべき結果を齎らすこと必定である。而も此の傾向は既に現はれて居り、實業道德は漸く頽れんとして居る。

二
之に對しては一方經濟界の真相を知悉せしめ、所謂成功者を稱せらるゝ先輩實業家の經驗し來れる跡をも探ね、その今日ある迄の苦心經營振を察知せしめ、後進實業家若くは實業志望者をして自ら大いに發奮努力の精神を喚發する處あらしめなければならぬ。同時に又一方には思想的に實業道德の鼓吹を試み、道義の上に立脚して計畫を立つるよう人心を指導して行かねばならぬ。本書の如きは則ち主として前者の任に當るものなるべく、余の所謂實業論語の處世法は主として後者の任に該當するものである。

大正七年四月一日

男爵 澁澤榮一

例言

◎本書の内容は、時局の影響を蒙れる我國經濟界各方面の現況を事實に基いて具體的に叙説し、且つ戦後經濟事情を豫測するの意味に於て各般の基礎材料を輯録せるもの也。隨て富の上より見たる日本の實力を知らんとする者は、何人も参考とするに足るべく、又自ら資本を投じて戦後の計畫を試みんとする者は、本書に依りて何物かを發見し得べし。

◎書中の材料は本會編纂部員の自ら調査せるものと、政府當局、主要銀行、會社並に専門學者、技術者等の調査に基き、公平無私に事實ありの儘を配列したるものにして、中に代表的經濟評論數種を二三新聞紙より轉用したるものもあり。

◎統計資料調査期限は大體に於て大正六年末現在とし、七年三月下旬本稿最後の締切迄に間に合へるものは出来るだけ追加することとせり。

◎新規計畫に屬する事業會社の調査に於ても大體大正六年末を目安とし、務めて最近の趨勢を示すの方針を取れり。新興事業若くは既設事業擴張の内容に付ては、専ら其の會社自身の調査資料に據れるも、中に誇張甚だしきを認めたる場合は側面觀察を以て多少の斟酌を加へたり。

◎事業選擇の標準は、必ずしも計畫の大小に拘はらず、戦時及戦後の經濟界に於て特に注意すべき性質を有するものを主としたり。但し最近刻々に變動しつつある時局經濟の中に於て、或る種のもは本書記述の内容と本書發刊後の事實とに幾分變化あるべきを免かれず。

◎戦後經營に關しては成るべく議論を避け、具體的事實に立脚して讀者自ら安全なる方針を取り得るより、參考基礎資料を與ふるに努めたり。

◎調査種目多端に亘り、内容亦複雑を極むるものなれば、其の完璧を期するは容易の業に非ざれども戦局漸く終末に到らんとするの時、拙速主義を重びて緊急の需めに應

ず。讀者諸氏、深く杜撰の罪を責め給ふこと勿れ。

大正七年四月十日

編者識

序言

本書は大戦の反映として現はれた我國經濟界の變象を總勘定し、併せて戦後對策を暗示したものであるが、未だ精讀を経ないから其の内容に付て一々批評を下すことは出来ない。其處で近來我經濟界に於て漸く重大視される様に爲つた労働問題の一端に卑見を附し、以て序に代へることにした。

一國の富を創造し且之を増加する力は學者社會の知識的労働より労働階級の手技的労働に至る有りと有ゆる労働であるといつて宜い。而も我國の生産は主として製絲紡績等所謂纖維工業に成るものであつて見れば、これ等製作に適する纖弱な女子が社會國家に貢獻する力の如何に偉大なるかは統計の示す如く、生絲の輸出價額が實に三億五千餘萬圓に達し、之に他の屑絲類及絹織物を加へるときは正に四億二千萬圓に上り輸出品總價額の約三割に當る盛況に徴してもその一斑を知るに足る。去れば爲政者は

いふに及ばず企業者に於て講究すべき緊急問題は一般労働とその中特に女工の待遇であると言はざるを得ぬ。即ち一般労働問題に就ては一面爲政者に向つては労働保険養老年金等國家の權力を以て實現せねばならぬ設備を要求し、他面企業者に向つては成るべく多方面の事業を合同經營してその實力を強大にし、戦後の商戦に際して外敵に對抗し得るだけの覺悟と準備をなすと同時に資本と労働の調和を講せんことを勸告す。特に女工問題に就ては女子生理上の支障と家庭上の任務を參酌して成るべく労働時間を低減し夜業を全廢してその心身の健全を圖り家庭の廢頽を防ぐこと最も切要である。然るに他方に於て今や諸物價殊に日用食品の價が騰貴に騰貴を重ね、彼等生活の困難益々逼迫するに連れて女工の數亦自ら増進するに至るは數の免かれざるところである。茲に於て必然起るべき問題は男女賃銀の差等如何であるが、同功程に對して同一賃銀を給すべきや否の如きは殆んど論争の餘地なしといふも不可なかるべきも、時間賃銀に至つては甲論乙駁今尙は一定の標準を見るに至らざる現狀である。果

して斯の如しとせば千歳一遇の此の好機に會し、これ等諸問題を精査して速に時宜に適する設備をして着々實行の途に就かしむるは焦眉の急務であるといつても敢て過言ではなからうと思ふ。

大正七年三月三十日

山 脇 玄

東方經濟調查會編纂

戰後の事業 目次

第一編 財界新現象……………(一)

一、富の膨脹……………(一)

- 貿易界新記録
- 米國の東洋貿易觀
- 正貨激増
- 銀行資力増大
- 郵便貯金激増
- 生命保險の大勢
- 火災保險趨勢
- 戰時及戰後の物價
- 日銀營業成績
- 工業原料輸入狀況
- 諸會社戰時利得
- 田畑賣買價格
- 簡易保險額府縣別

二、産業振興……………(六二)

目次

一

- 時局と産業の政策
- 化學工業振興策
- 戦後國際的生存競争の基礎
- 計畫資本の膨脹
- 商工業會社増加率
- 工業原料問題
- 資本金同説
- 投資家の氣迷
- 粗製濫造問題
- 工場法の影響
- 労働争奪
- 工業地衛生問題
- 工業教育一斑

第二編 新事業類別……………(一〇九)

一、製鐵界及鐵工業……………(一〇九)

- 製鐵界趨勢
- 日支製鐵提携
- 和鐵の發明
- 戦後製鐵業の運命
- 製鐵業獎勵法要旨
- 東京鋼材
- 沼田古鐵
- 東京製鐵

二、金屬鑛業……………(一四八)

- 最近鑛業概況
- 精鍊業の新現象
- 鑛山熱と鑛業機械
- 成金王

- 久原鑛業
- 亞鉛電解鑛業
- 古河銅山近况
- 大阪亞鉛鑛業の實力
- 住友家製銅業
- 藤田組鑛業
- 寶永銅山

三、石炭及石油……………(一七〇)

- 北支那の石炭及鐵
- 常磐炭
- 有望なる石油
- 日石の新事業
- 寶田石油と海軍

四、船舶及汽車製造……………(一八五)

- 汽車製造難
- 造船能力

五、纖維工業界……………(一九二)

- 本邦最近蠶業趨勢
- 生糸及絹織物貿易事情
- 蠶種業の新傾向

○多事なる紡績界 ○ラミー工業

六、 醫 藥 製 造……………(二二八)

○製薬の可能性 ○三共製薬の研究振 ○星製薬の飛躍 ○内國製薬の新企業 ○中外製薬の特色 ○大正製薬の婦人薬 ○和製六〇六號 ○仁丹輸出三百萬圓

七、 工 業 藥 品……………(二三〇)

○伊藤ワセリン ○關東酸曹の成績 ○日本化学工業 ○富士化学工業 ○日本火薬製造 ○中山化学研究所

八、 染料及塗料工業……………(二三六)

○染料工業の苦心 ○日本染料の將來 ○塗料界の霸王 ○耐火ペイ

ント

九、 電 氣 及 瓦 斯……………(二四二)

○電氣動力の激増 ○電氣應用の種類 ○電球の發達 ○九州電氣界 ○瓦斯事業の運命

十、 製 肥 工 業……………(二五五)

○智利硝石の命 ○空氣の加工 ○化學豆油 ○大日本人造肥料の地位

十一、 食 料 界……………(二六四)

○食料自給根本策 ○生活原料地開發 ○滿洲製粉界 ○粉乳新企業 ○不老不死の人參

十二、 糖 業 及 鹽 業……………(二七六)

○糖業概況 ○糖界苦闘十餘年 ○砂糖經營新傾向 ○砂糖官營問題
 ○菓子天下 ○キャラメル ○鹽生産と工業鹽 ○大日本鹽業
 十三、酒類其他飲料……………(二九八)

○清酒の勢力 ○ビールの飛躍 ○帝國鑛泉の成功
 十四、窯業一班……………(三〇五)

○品川白煉瓦 ○坦庵式耐火煉瓦 ○旭硝子の基礎 ○時局と日本坩堝
 十五、護謄事業……………(三一三)

○ゴムと國防 ○ゴム會社の大勢 ○南洋富源開發 ○三田土ゴム
 十六、製紙及紙製品……………(三二四)

○製紙業の前途 ○紙製品工業

十七、印刷界……………(三二九)

○印刷業經營の困難 ○印刷術と日本文明史 ○印刷機の賣行
 十八、自動車及飛行機製作……………(三四〇)

○自動車製作界 ○飛行機製作技術
 十九、皮革及擬革……………(三四七)

○蒙古開發の新企業 ○綿子調帶の進歩
 二十、文房具……………(三五三)

○鉛筆の海外發展 ○萬年筆需要激增 ○インキ、手帳、毛筆、墨
 廿一、畜産及水産……………(二六三)

○畜産振興策 ○水産界新施設 ○鯉と鰻の養殖
 廿二、發明界……………(三八一)

○發明界趨勢 ○邦文タイプライター
 廿三、拓殖事業……………(三九〇)

○北海道大富源開發事業 ○朝鮮開發有望
 廿四、雜種產業……………(三九九)

○タール工業有望 ○時計の海外發展 ○玩具及びセルロイド工業
 ○鐵筋コンクリート ○美術工業としての漆器 ○煙草の新現象
 ○鈴木商店の世界的地位

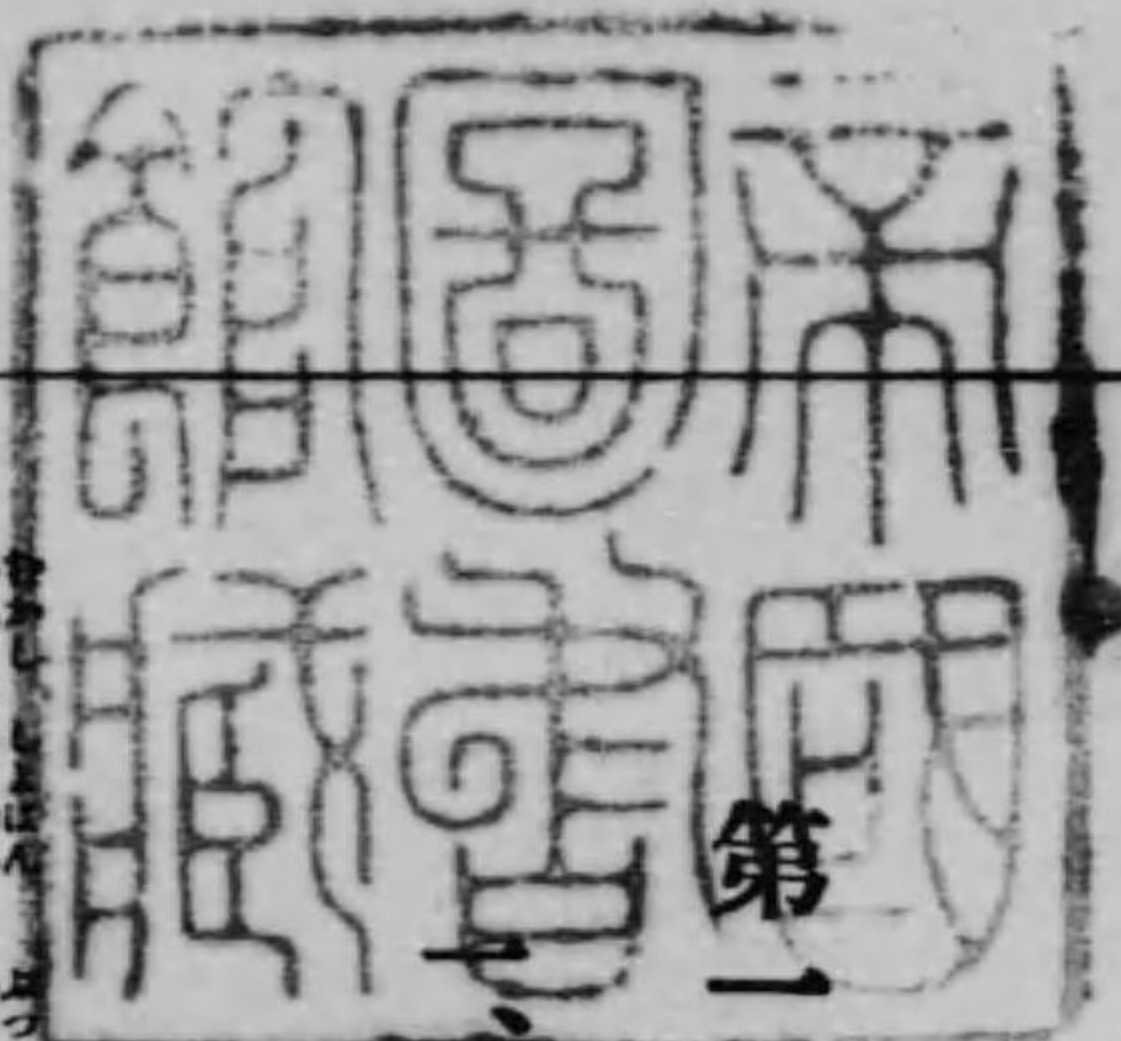
第三編 參考資料……………(四一五)

○化學工業家一覽 ○工場法及同施行規則 ○度量衡統一問題 ○戰
 費二千餘億圓

目次終

戦後の事業

東方經濟調査會編纂



第一編 財界新現象

富の膨脹

貿易界新記録

往は諸般の物資が自給し得たる時に於て、所謂鎖國主義なるものがあつた。鎖國主義の意義は種々なる方面に認められたが、概ねそれは『通商』の鎖國で、經濟的封鎖若くは孤立の意味であつたのである。去りながら當時は國民生活の程度が低かつただけ、

それだけ物資の需要も僅少であつたから、此の鎖國の方針を以て一種の國是と爲すことも出来た。賣らず買はずで尙生活を支ふるに左して困難を感ずることもなかつたのである。

今日は夫れが叶はぬ。通商封鎖で自立自營など云ふことを誇るべき場合ではない。我に残つた絹を彼に賣り、彼に残つた鐵を我に買ひ込むことに依り双方の生活は支へて行かねばならぬ。自給々々と云ふけれども、各國共完全に自給で満足し得る國は一つもない。少くも自給的狀態を繼續することは苦痛に堪へぬ處である。又少くも自給主義は互に大なる損失を覺悟しなければならぬものである。

にも拘はらず文運は逆轉して此の有り得べからざる鎖國の方針を強ひて進めんとして列國が苦慮しつゝあり、賣らず買はずで押し通すべく煩悶しつゝある。鎖國主義の亡靈が二十世紀の世界に迷ひ出したのか、それとも國際的ボイコットの新傾向とも謂ふべきか。尤もそれには種々なる原因もある。

戦前世界の船舶は約四千万噸あり、内大洋航海に使用されてゐたものは約四千万噸であつたが、撃沈の厄に遭へるもの前後通じて約一千万噸で、補充建造の能力が到底之に伴はぬから船舶拂底の嘆は免がれない。英國の如きは平時の五割増で造船能力を上げつゝあるが、損失率には到底對抗し得ざるべく、米國造船業亦相當に活躍し居るも其の建造設備は未だ英國等の比でないから、豫期さるゝ如き補充も行はれまい。日本の貧弱なる船舶を悉く驅り出して危険區域の航路に當らしめやうとするの希望を懐き居るも這は事實可能性を缺いてゐるから仕方がない。

殊に彼の潜航艇の兇暴沙汰が始まつて以來即ち大正六年二月以來の海運は極度の威嚇を被つてゐるから、國際貿易上へ及ぼす處の影響は容易ならぬものがある。假令米國が潜航艇防禦策を講じつゝありとは云ひながら、それが何れだけの實効を擧げ得るものであるかは尙疑問に屬してゐる。海運の不安は延いて保険率の暴騰を招ぎ、又同時に貿易貨物の格價にも甚だしき影響を與ふるものである。

次には輸出入禁止若しくは制限の一件である。交戦國は軍需品の充實を急務とするが故に特殊の品目に對して輸出禁止を必要とする場合もあり。又敵國側へ廻送する、懸念のあるものを防止する必要上禁輸を行ふ場合もある。或は戦時經濟政策の上より見て必要と認むるものは無遠慮に禁止又は制限を斷行する場合もあり。旁々貿易上に及ぼす打撃は非常なものとなる。

例せば英國は多數の品目に付て輸出禁止又は制限を實行した。その結果我國に影響を來れるものは鐵、羊毛、トツプ等であるが、工業原料としての數量が多いためだけ打撃の程度が甚だしい。戦前英國から巨額の鐵製品を仰いでゐたがその輸出制限により造船材料、葉鐵、ワイヤロープ等其他機械類の供給に困難を招くこと甚だしく、僅かに特許品を得らるゝ位で満足しなければならなくなつた。羊毛、トツプの如きは既に全部英國に仰いでゐたものであるが、禁輸の結果は我が毛織業を恐怖せしむると甚だしく僅かに條件附の輸入と南米方面からの補充で間に合はせなければならぬとなり、

追ては自給の途を開いて斯かる不測の厄を免かれんと、今更に滿蒙地方の調査など始め、設ひ此の方面より相當供給し得べき見込あるものとするも品質に於て輸入品と對抗し得るか否かは到底疑はしいのである。

其他グリセリンの制限等も相當の打撃であり、我より輸出し來れる玩具、プラスチック、陶磁器、絹及絹製品、眞田、アンチモニー製品、綿レース、竹細工、漆器、綿莫大小等の禁止若しくは制限の影響も甚だしい。

露國に於ける奢侈品禁輸并に小包受付停止等も我が當業に取つて相當苦痛を味はねばならぬ處、又佛國、伊國等に於ても夫々多數品目に對する禁入出を斷行してゐるから是れも多少の影響を免がれない。

更に米國に至つては我貿易業に取り、又工業界に取つて、その數量の多いだけ影響する處亦夥しきものあり、就中鐵の禁輸、絹の悲觀説等は我が財界を動搖せしめたこと幾回なるを知らず、鐵は遂に絶望に近きものと爲つて仕舞つた。鐵材自給計畫は

即ち官民共鳴で種々なる方法により具體現しつつあるが、自給の完成は果して近き將來に見らるべきか否か、又其の急遽計畫せる事業の戦後安全に維持するべきか否か等に付ては未だ何人も斷案を下し得ざる處で、之を樂觀すれば獨立自營策の勝利近きにありと云ふべく、之を悲觀すれば來るべきダンピングの暴風を迎ふる果敢なき運命の一時的事業とも謂ふべきか。而して此の安んぜざる傾向は皆英や米の經濟的鎖國主義から影響して來る新現象に外ならぬものである。

供しながら以上は主として悲觀的方面よりのみ見たる貿易の情勢であるが恰もその反對に我貿易界に及ぼせる好影響の方面を見るならば敢て必ずしも前途を危ぶむを要せぬのである。否、寧ろ最近の形勢は殆ど天祐的に我國にのみ饒かなる恩恵が加はつて居る。即ち時局以來已むを得ざる自給策の爲め工業の急激なる發達を見るに至れると同時に、各種生産能力が夥しく増大し、その豊富なる生産品は内國の需要を充たした上綽々餘裕を生じ來れるが格別の努力をも要せず無限の販路を有する事と爲つ

た。新販路は我から進んで開拓したもののよりも寧ろ物資の缺乏せる諸外國から要求される傾向さへある。物資缺乏を訴ふるものは聯合國側に於ける軍需品を始めとし、從來歐米より供給を受けつゝあつた南洋、印度方面乃至支那、埃及等に於ける生活必需品である。殊に東洋諸國及南洋、南米方面に商權を張つて居た獨逸の勢力範圍が偶然にして我が掌中のものと爲り、從來獨逸より巨額の輸入を爲しつゝあつた其等の地方へ我國から豊富に輸出する様に爲つた。聯合側諸國から從來同方面へ供給して居た數量も相當にあるが、何れも本國の工業機關を軍事上の用途に供せられ、若くは勞働力缺乏の結果生産能率を低下したので、是亦對外貿易に一大缺陷を生ずることと爲り、戦前盛んに輸出しつゝあつたものも殆ど皆杜絶して了つた。その缺陷も偶然にして我が商工業者の乗ずる處と爲り、販路は勞せずして占有し得らるゝことと爲つたのである。

今之を統計の上に眺むれば略々大勢を察知することが出来るであらう。即ち戦局に

入つて最初の年即ち大正三年度の如きは一時の打撃で少しく輸出入額を減退せしめられたが、爾來千歳一遇の機會を有利に捉ふべく朝野の努力甚だ旺んなるものありし結果大正五年度には戰前なる大正二年に比して輸出約五億圓、輸入約二千七百圓の増進を示すに至つた。而して輸出入に於ける差額は大正二年の約九千七百萬圓入超が五年度には一躍して三億七千萬圓の輸出超過を見る如になつたのである。更に六年度は如何と云ふに、十二月下旬の貿易出超は八千五百萬圓にして一月以降累計五億六千七百七十一萬圓、貿易總額累計は二十七億七千七百六十三萬圓に達し之を大正五年に比すれば出超一億九千六百九十二萬七千圓總額七億九千七百七十四萬圓の増加にして正に本邦貿易史上の新記録である。

| | 十二月下旬 | 前年同期 | 一月以降累計 |
|------|--------|--------|-----------|
| 輸出品價 | 六二、一三三 | 四八、八九七 | 一、六〇二、四七二 |
| 輸入品價 | 四四、〇八三 | 二五、五七五 | 一、〇三四、七六二 |
| 輸出超過 | 一八、〇五〇 | 二三、三二二 | 五六七七一〇 |

輸出入金銀價概算

| | | | |
|-------|-----|-------|---------|
| 輸出金銀價 | 六八七 | 六、〇九四 | 一五三、七三六 |
| 輸入金銀價 | 六八七 | 二四〇 | 三九二、二一六 |
| 輸入超過 | 六八七 | 五、八五四 | 二三八、四八〇 |

對朝鮮移出額概算

| | | | |
|-------|-------|-------|--------|
| 移出品價 | 二、九九八 | 二、一二六 | 八一、三〇八 |
| 移入品價 | 一、九五一 | 二、〇一〇 | 五九、〇九五 |
| 移出超過 | 一、〇四七 | 一一六 | 二二、二一三 |
| 移出金銀價 | — | 一〇〇 | 二二〇 |
| 移入金銀價 | 三九八 | 二〇三 | 八、四七〇 |
| 移入超過 | 三九八 | 一〇三 | 八、二四〇 |

備考 前表は横濱外十九港の分なり但し累計額には全國を含む

| | 大正六年十二月三十日迄 | 前年 | 同期 | 比 | 較 | 増 |
|-----|-------------|-----------|---------|---|---|---|
| 輸移出 | 一、六八三、七八〇 | 一、一八三、〇五〇 | 五〇〇、七三〇 | | | |
| 輸移入 | 一、〇九三、八五七 | 七九六、八四〇 | 二九七、〇一七 | | | |

| | | |
|------------------------------|---------|---------|
| 出 超 | 五八九、九二三 | 三八六、二一〇 |
| 出金銀價 | 一五三、九六六 | 二八、四五七 |
| 入金銀價 | 四〇〇、六八六 | 一一六、〇六七 |
| 入 超 | 二四六、七二〇 | 八七、六一〇 |
| 更に遡つて之を既往五箇年間の貿易額と對比すれば左の如し。 | | |

| 年次 | 輸 出 | 輸 入 | 入 出 超 |
|----|-----------|---------|----------|
| 二年 | 六三二、四六〇 | 七二九、四三一 | 入 九六、九七一 |
| 三年 | 五九一、一〇一 | 五九五、七三五 | 入 四、六三四 |
| 四年 | 七〇六、〇〇二 | 五三二、〇四五 | 出一七三、九五七 |
| 五年 | 一、一二六、二一〇 | 七五五、四二七 | 出三七〇、七八三 |
| 六年 | 一、六〇二、四七二 | 〇三四、七六二 | 出五六七、七一〇 |

即ち大正六年の貿易は輸出入共に過去四箇年の夫れを凌ぎ空前の記録と見られた大正五年に比するも其増加著るしきものがある。次に明治初年以降の輸出超過年度を擧ぐれば左の如し。

| 年次 | 出 超 額 | 年次 | 出 超 額 |
|-------|--------|------|---------|
| 明治 元年 | 四、八六〇 | 廿四年 | 一六六、〇〇 |
| 九年 | 三、七四六 | 廿五年 | 一九、七七六 |
| 十五年 | 八、二七五 | 廿六年 | 一、四五五 |
| 十六年 | 七、八二三 | 廿八年 | 六、八五一 |
| 十七年 | 四、一九八 | 卅九年 | 四、九七〇 |
| 十九年 | 一六、七〇七 | 四十二年 | 一八、九一三 |
| 二十年 | 八、一〇二 | 大正四年 | 一七三、九五七 |
| 廿一年 | 二五〇 | 五年 | 三七〇、七八三 |
| 廿二年 | 三、九五六 | 六年 | 五六七、七一〇 |

即ち明治初年以降這次戦亂の影響を受くる事尙少かりし大正四年迄の輸出總計三億八百二十三萬圓に比し單に一箇年間の輸出を以ても尙二億五千九百四十八萬圓を超過せるが如き戦時貿易の増大を語るものである。

而して大正六年度に於けるレコード破りの貿易高並に輸出激増の内容如何と云へば

聯合側への軍需品供給を始めとし、各種鐵産物及船舶の輸出激増、東洋諸國及南洋、印度方面への綿織物、莫大小類、各種綿製品、藥品、諸機械、玩具、護謨製品、時計、文房具其他各種雜貨等の目覺まじき發展を遂げた結果である。

米國の東洋貿易觀

戰時中勃興した日本の工業は國民生活資料其他の自給を主たる目的とするものではないが、同時に内地需要以上の生産能力を有する工業に於ては販路の開拓を爲し、積極的に商權を海外へ伸張して行かねばならぬ。この意味に於て各工業會社は夫々調査員を派遣して支那、香港、印度、濠洲、比律賓及埃及方面迄も視察せしめつゝあるが、新販路は何れも豫想以上に發見せられて居る。

商權伸張の餘地綽々として、恰も無人の境を突破するが如き觀ありと云ふは寔に慶賀すべき限りであるけれども、此形勢は戰後に持續し得て安全なるものであるか何

うかと云へば誰にも確信を以て豫斷することが出来ない。此問題に就ては反證的に外國の經濟家が見た戰後の東洋貿易觀を摘録して参考に供しよう。

米國桑港商業會議所外國貿易部に於ける一九一七年十月報告の一節に曰く『日本は戰後に於ける世界商業の大半を支配せんと希望を有して居る。日本は最初から戰爭に参加して居るも今日迄に僅か九隻の商船(三萬餘噸)を失つたに過ぎず米國は參戰後數箇月にして既に二十隻(約六萬噸)を失つた日本は務めて船腹を保存し又米國の供給する材料で盛に新船を建造してゐる。

又米國が日本の船主に仕拂ひたる船賃は實に巨額のものである。米國には時局以來多くの工場が建設されて居るけれども、此際新市場を開拓し舊市場を培養するに非ずんば新生産品の販路に窮するであらう。米國はマニラを中心として三千哩の半徑を以て圓形を畫けば世界人口の八割を占むる各國を悉く包容し得るであらう。

千九百十四年中日本より支那、佛領印度支那、印度、蘭領印度、暹羅諸國に對する

輸出品は是等諸國輸入品全體の八分一厘即ち九千七百六十三萬餘弗を占むるに拘はらず、米國の輸出品は是等諸國輸入全體の三分九厘即ち四千九百九十萬餘弗に過ぎぬ。又同年中日本の海外輸出總額は二億九千五百萬餘弗にして、米國は二十一億千三百萬餘弗であるから米國の以上諸國に對する輸出品は總輸出高の二分三厘に當り日本の未は三割三分一厘に當る。

バルボアの太平洋發見をして無意味に終らしめんとすれば夫れ迄のこと、然らざれば之を利用して我生産品に對し此際東洋方面に廣大なる市場を發見することが必要であらう。若し之れを等閑にするに於ては平和克復後商戰時代に入つて我國は産業上の恐慌を招ぎ多數の勞働者は其職を得ざるに至るであらう」云々

正貨激増

我が對外貿易は未曾有の記録を作つたが之と同時に正貨は著しき増進を示し大正

六年十二月二十六日現在によれば其額十一億二千萬圓に達し是を前年末の七億二千四百萬圓に比すれば實に約四億六百萬圓餘の激増を示した。因に六年一月以降に於ける毎月末正貨現在高は左の如し

| | | | |
|-----|---------------|-----------|---------------|
| 一月 | 七二三、〇〇〇、〇〇〇 | 二月 | 七〇一、〇〇〇、〇〇〇 |
| 三月 | 七一二、〇〇〇、〇〇〇 | 四月 | 八〇二、〇〇〇、〇〇〇 |
| 五月 | 八五六、〇〇〇、〇〇〇 | 六月 | 八九三、〇〇〇、〇〇〇 |
| 七月 | 九四二、〇〇〇、〇〇〇 | 八月 | 九七五、〇〇〇、〇〇〇 |
| 九月 | 一、〇〇八、〇〇〇、〇〇〇 | 十月 | 一、〇四六、〇〇〇、〇〇〇 |
| 十一月 | 一、〇七五、〇〇〇、〇〇〇 | 十二月(二十一日) | 一、二二〇、〇〇〇、〇〇〇 |

更に十二月廿六日に於ける正貨を前年末に於ける正貨現在と對比するに左の如し

| | | | | | | | |
|------|-------------|---|--------------|-------------|---|---|---|
| 所有者別 | 前 | 年 | 末 | 六年十二月廿六日 | 比 | 較 | 増 |
| 政府 | 二六二、〇〇〇、〇〇〇 | | 三九六、〇〇〇、〇〇〇 | 一三四、〇〇〇、〇〇〇 | | | |
| 日銀 | 四五二、〇〇〇、〇〇〇 | | 七二四、〇〇〇、〇〇〇 | 二七二、〇〇〇、〇〇〇 | | | |
| 計 | 七一四、〇〇〇、〇〇〇 | | 一一二〇、〇〇〇、〇〇〇 | 四〇六、〇〇〇、〇〇〇 | | | |

所在地別

内地 二二七、〇〇〇、〇〇〇 四六二、〇〇〇、〇〇〇 二三五、〇〇〇、〇〇〇
 海外 四八七、〇〇〇、〇〇〇 六五八、〇〇〇、〇〇〇 一七一、〇〇〇、〇〇〇
 計 七一四、〇〇〇、〇〇〇 一、二〇〇、〇〇〇、〇〇〇 四〇六、〇〇〇、〇〇〇

銀行資力増大

預金三十億、大正六年末日に於ける東京、大阪、神戸、京都、横濱、名古屋、廣島、關門、金澤、函館、小樽十一組合及代理交換銀行諸勘定残高を五年末日残高に比較するに何れも一般財界の大膨脹に伴ひ激増を來し拂込資本金は五千五百二萬一千圓を増加して三億二千九百三十九萬九千圓積立金は千八十五萬四千圓を増加して一億二千九百四十三萬三千圓となるが就中預金は一躍十億六千四百四十五萬六千圓を激増して實に二十九億六千五百一十一萬五千圓なる新記録を附し貸出金亦六億七千二百八十四萬二千圓を増加して二十六萬三千二百二萬二千圓となり其他所有々價證券在高一億七百四

十八萬五千圓を増加して五億二千六百二十九萬一千圓となり手許金一億二千七百八十三萬七千圓を増加して三億二千二百二十二萬圓となつた。即ち左の如し。

(單位千圓)

| | 大正六年末 | 大正五年末 | 比較増 |
|------|-----------|-----------|-----------|
| 拂込資本 | 三二九、三九九 | 二七四、三七八 | 五五、〇二一 |
| 積立金 | 一一九、四三三 | 一一八、五七九 | 一〇、八七五 |
| 預金 | 二、九七〇、五一五 | 一、九〇六、〇五九 | 一、〇六四、四五六 |
| 貸出 | 二、六三二、〇二二 | 一、九五九、一八〇 | 六七二、八四二 |
| 有價證券 | 五二六、二九一 | 四一八、八〇六 | 一〇七、四八五 |
| 手許金 | 三二一、二二〇 | 一九三、三八三 | 一二七、八三七 |

東京預金五億増 次に東京のみに於ける交換加入銀行六年末諸勘定残高を五年末に比較せば拂込資本金は千六百九十九萬八千圓を増加して一億七千九百十四萬五千圓となり積立金は九百十八萬三千圓を増加して七千六百七十六萬七千圓となり預金は五億二千五百八十二萬九千圓を激増して十四億五千七百二十三萬六千圓となりて全國總預金

額の約半額を占め貸出高は二億八千六百四十五萬六千圓を増加して十二億六千三百三十六萬一千圓となり所有各價證券は三千四百四十四萬四千圓を増加して二億八千五百十三萬圓となり手許金は四千二百三十二萬七千圓を増加して一億三千九百三十八萬五千圓となつた。即ち左の如し。(單位千圓)

| | 六年末 | 五年末 | 比較増 |
|------|-----------|---------|---------|
| 拂込資本 | 一七九、一四五 | 一六二、一四七 | 一六、九九八 |
| 積立金 | 七六、七六七 | 六七、五八四 | 九、一八三 |
| 預金 | 一、四五七、二三六 | 九三一、四〇七 | 五二五、八二九 |
| 貸出 | 一、二六一、三六一 | 九七四、九〇五 | 二八六、四五六 |
| 有價證券 | 二八五、一三〇 | 二五四、六八六 | 三〇、四四四 |
| 手許金 | 一三九、三八五 | 九七、〇五八 | 四二、三二七 |

郵便貯金激増

大戦の影響が産業勃興を爲り、間接には國民の貯蓄力を激増せしむることゝ爲つた

が、今之を増加の趨勢に就て眺むるに、本邦郵便貯金は明治八年の創業後十一ヶ年を経て同十九年漸く一千万圓に達し爾後累進して同二十二年には二千万圓となりたるも其後遅々として進まず同二十九年に至り二千八百萬圓以上となり將に三千万圓に達せんとするや日清戦役後經濟界の悲運は郵便貯金に影響し漸次遞減して同三十一年には二千二百萬圓に下り翌三十二年以來經濟界の狀勢恢復すると共に郵便貯金も亦増進を見るに至り同三十五年再び二千八百萬圓に達し二十九年當時の狀態に復した。然るに同三十六年には忽ち三千万圓となり更に三十七年日露開戦當時より頓に増進の度を高め同三十八年には一躍五千万圓となり翌三十九年には再躍七千万圓に達し而も同年以降經濟界異常の不振に際會するも依然として増進の歩調を變せず同四十年には九千万圓四十一年六月には一億圓となり殊に同年煥發せられたる戊申詔書は一般國民に勤儉治産の思想を激勵し當局者の熱心なる貯金奨励と相俟つて尙一層の増加を爲し遂に大正元年九月二億圓に同六年一月三億圓に達したるが爾後の増加は甚だ急激にして

僅か十ヶ月間に一億圓を激増して同十一月末には四億圓を突破し十二月廿五日現在に於て預入人員一千六百八十五萬九千九百八十四人預金額四億一千八百八十一萬九千九百一圓となり預金者は我國民百人中三十人の割合にて平均一人に付き二十五圓國民一人に付き約八圓の預金額を有するに至つた。因に大正元年以降各年末現在高を示せば左の如し

| 年 別 | 金 額 | 人 員 |
|------|-------------|------------|
| 大正元年 | 一九七、二九三、七五九 | 一一、三五七、一〇四 |
| 同 二年 | 一九五、六七三、九九三 | 一一、七八〇、五五一 |
| 同 三年 | 一九五、八九六、六三八 | 一二、九〇九、九二七 |
| 同 四年 | 二二一、八四二、五五七 | 一三、七六三、九四八 |
| 同 五年 | 二九五、〇七三、五八三 | 一四、八五八、五三四 |
| 同 六年 | 四一一、八一九、九〇一 | 一六、八五九、九八四 |

生命保険大勢

全國四十生命保險會社に於る大正六年末現在契約高は死亡及生存保險契約共十三億六千三百七十八萬三千二百五十五圓にして大正五年度末に比し一億九千六百八十六萬九千九百八十二圓の純増加を示した。同年末現在契約高を前年末と比較すれば左の如し。(富士生命は本稿締切迄に不明なりし爲め前年度にて計算す)

| 富の膨脹 | 六年末現在 | | 五年末現在 | | |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|
| | 金額 | 人員 | 金額 | 人員 | |
| 共濟生命 | 六二、一四一 | 五、四三三 | 一七、四六〇 | 一四、二二八 | |
| 有隣生命 | 三〇、七二四 | 一七、二五八 | 一一、〇八一 | 一一、〇三二 | |
| 神國生命 | 二二、九九一 | 一一、八二八 | 一、九二〇 | 二、一五六 | |
| 明治生命 | 二七、五五五 | 一一、三五六 | 二六、七〇四 | 三二、三三七 | |
| 仁壽生命 | 四五、八八〇 | 四、三三四 | 五、四〇六 | 三、五四五 | |
| 東海生命 | 三四、三五二 | 三、三七七 | 六、九四〇 | 六、八三三 | |
| 東洋生命 | 四五、二〇六 | 三五、六八五 | 一一、一六七 | 一一、一六〇 | |
| 常盤生命 | 一一、七九九 | 九、六七一 | 二八、一二二 | 二〇、二八二 | |
| 太平生命 | 二四、〇五二 | 二、八八〇 | 一一、〇八三 | 一〇、七四八 | |
| | | | 東華生命 | 三、一四五 | 二、〇五六 |
| | | | 太陽生命 | 一七、四六〇 | 一四、二二八 |
| | | | 日之出生命 | 一一、〇八一 | 一一、〇三二 |
| | | | 博濟生命 | 一、九二〇 | 二、一五六 |
| | | | 橫濱生命 | 二六、七〇四 | 三二、三三七 |
| | | | 大安生命 | 五、四〇六 | 三、五四五 |
| | | | 共同生命 | 六、九四〇 | 六、八三三 |
| | | | 旭日生命 | 一一、一六七 | 一一、一六〇 |
| | | | 八千代生命 | 二八、一二二 | 二〇、二八二 |
| | | | 日本共立生命 | 一一、〇八三 | 一〇、七四八 |
| | | | 東華生命 | 三、一四五 | 二、〇五六 |

(單位千圓)

| | | |
|-------|---------|---------|
| 千代田生命 | 八五、九四一 | 七〇、五九五 |
| 萬歲生命 | 二七、三四〇 | 一六、五五一 |
| 日本生命 | 一六九、八六〇 | 一五三、一六八 |
| 日華生命 | 一一、三〇二 | 五、七三九 |
| 日清生命 | 三三、八七三 | 二九、三六六 |
| 蓬萊生命 | 一〇、七三三 | 八、六九〇 |
| 大正生命 | 三三、七三六 | 一七、〇七四 |
| 高砂生命 | 六、〇四四 | 三、八八二 |
| 第一生命 | 四三、八四六 | 三六、七九四 |
| 大同生命 | 六、一九九 | 五、七五五 |
| 中央生命 | 八、一八五 | 五、〇三八 |
| 福壽生命 | 一一、六八五 | 一〇、三五八 |

火災保險趨勢

| | | |
|------|---------------|---------|
| 國光生命 | 三、六八二 | 二九、七二二 |
| 帝國生命 | 一一九、〇八三 | 一〇九、一一六 |
| 愛國生命 | 五四、二七三 | 三七、〇五五 |
| 共保生命 | 四三、八五四 | 三九、三二七 |
| 富士生命 | | 一〇、一七五 |
| 福徳生命 | 一一、一六二 | 九、三〇七 |
| 日本教育 | 六、二四二 | 五、四九四 |
| 日本徴兵 | 一三、四四九 | 一〇、〇〇四 |
| 徴兵保險 | 四五、二六五 | 三六、九七〇 |
| 合計 | 六年末 一、三六三、七八三 | |
| | 五年末 一、一六六、九一三 | |

最近發表せる我國火災保險の時局前後變遷狀況左の如し。

| | | | |
|-------|---------------|--------|-----------|
| 大正二年度 | 一、六八八、七四一、〇〇〇 | 年度未契約高 | 前年同期に比し増額 |
| 大正三年度 | 二、一一〇、七三六、〇〇〇 | | |
| 大正四年度 | 二、三七四、五四五、〇〇〇 | | |
| 大正五年度 | 二、八七四、九〇八、〇〇〇 | | |

以上契約の遞増に伴ひ收入支出に於て左の如き増加を示して居る。

| | | | |
|----|------------|-----------------------|-----------|
| 收入 | 保 險 料 | 利 息 | 其 他 |
| 二年 | 八、四五九、〇〇〇 | 一、三四六、〇〇〇 | 二、二二〇、〇〇〇 |
| 三年 | 八、五三九、〇〇〇 | 一、四〇二、〇〇〇 | 二、二八三、〇〇〇 |
| 四年 | 九、一〇三、〇〇〇 | 一、五四六、〇〇〇 | 二、九一二、〇〇〇 |
| 五年 | 一〇、六七四、〇〇〇 | 一、四九二、〇〇〇 | 三、五四四、〇〇〇 |
| 支出 | 保 險 金 | 保 險 金 外 契 約 依 存 支 拂 金 | 營 業 費 其 他 |
| 二年 | 五、四四八、〇〇〇 | 七二、〇〇〇 | 三、一三〇、〇〇〇 |
| | | | 二、六七〇、〇〇〇 |

三年 四、〇八六、〇〇〇 八四、〇〇〇 三、〇二五、〇〇〇 三、一三一、〇〇〇
 四年 四、三七四、〇〇〇 一四二、〇〇〇 二、九七九、〇〇〇 三、一六四、〇〇〇
 五年 四、九〇五、〇〇〇 二七四、〇〇〇 三、二五四、〇〇〇 三、八一九、〇〇〇
 従つて準備金並に純利益に於て左の如き増加率を示して居る。

| 年 | 準備金 | 純益金 |
|----|------------|-----------|
| 二年 | 九、二七七、〇〇〇 | 九〇六、〇〇〇 |
| 三年 | 九、八六二、〇〇〇 | 二、一〇一、〇〇〇 |
| 四年 | 一〇、七九七、〇〇〇 | 二、九〇〇、〇〇〇 |
| 五年 | 一二、〇八六、〇〇〇 | 三、八一九、〇〇〇 |

而して營業者數は專業十五社兼營五社外に六年開業せるもの二社合計二十二社で各社の配當率を掲ぐれば左の如し。

| 火災 | 大正四年度 | 同五年度 |
|------|-------|------|
| 東京火災 | 八分 | 一分 |
| 明治火災 | 二分 | 三分 |

| | | |
|------|------|------|
| 日本火災 | 一分 | 二分 |
| 小樽貨物 | 一分 | 一分 |
| 横濱火災 | 一分三分 | 一分三分 |
| 日本動産 | 六分 | 一分 |
| 共同火災 | 一分 | 一分 |
| 福壽 | 一分 | 五分 |
| 日清火災 | 一分 | 一分 |
| 豊國 | 一分 | 八分 |
| 千代田 | 一分 | 六分 |
| 東明火災 | 一分二分 | 一分六分 |

備考 帝國、東邦、浪速、日章、第一の五社は無配當

戦時及戦後の物價 (大正七年一月調)

開戦當時即ち大正三年七月頃の物價を標準として今日に至る迄の變遷並に七年度物

價の見込及戦後物價の騰落豫想等に關し最も信頼するに足るべき數字を基礎として調査するに大體左の如きものとなる。

日本銀行調査局調査に係る統計に據り之れを換算して大正三年七月に於ける諸物價總平均を一〇〇と置く時は同年八月一一、九に騰貴したるも九月以降一時漸落して十二月迄には九、九八と爲り四年一月には更に騰貴して一〇二、〇に進み漸騰して同年十二月には一三八、七と爲り五年一月尙進んで一四一、八に騰貴し同三月一五二、六を突破して四月以降變調を呈し七月迄に一三二、九と低下したるも八月より更に進んで十二月には一五七、一と爲り六年一月は僅かに崩れて一五三、二と爲つたが再び累進して同八月には二〇六、三と云ふ空前の大暴騰と爲つた。

大正六年八月の物價は經濟史上特筆大書すべき珍現象で白米が一圓に三升と爲り平時三十錢の鐵鍋一個が一圓五十錢と爲り七錢の塵取が三十五錢となつた破天荒の相場は實に此の月のことであつた。九月以降は稱々なる意味で經濟界の調子が狂ひ物價も

反動的に云ふ程でもないが稍低下の傾向を示し八月の二〇六、三は九月に二〇〇、八と爲り十月保合で十一月更に少しく下がり十二月も大差なしと云ふ有様であつた。而して昨今の物價を最初の標準たる大正三年七月即ち開戦當時に比すれば實に十割の暴騰即ち約二倍に當つて居るから此の諸物價の下に生活する國民の收入も同じく二倍と爲らなければ叶はぬ筈であるが、戦時利得者たる事業家と之に隨伴する労働者を除き一般官吏、教員、事務員等定規の月給取に於ては多くも三割乃至五割、少きは一割か二割の増收しかないのであるから富の膨脹も此の意味に於いては却て生活を毒して居る。然らば此の期間に於ける交戦中心國たる英國あたりには何の位物價が騰貴して居るか云ふに同じく大正三年七月を一〇〇と見る時は六年八月即ち日本の暴騰頂點に達した時が二二〇、五即ち約十二割の騰貴に當つて居る。米國は同様の計算により約九割五分の騰貴と爲つて居ることが知られる。斯様にして英國の如き國運を賭して必死の苦闘を續けて居る國でも十二割の騰貴、米國の如き英國程ではなくも

相當に力戦して居る國で尙九割五分の騰貴に過ぎぬ場合比較的戦局と遠ざかつて國情に餘裕ある日本の物價が十割の暴騰を來して居ると云ふは騰貴率の餘りに高い様にも感ずる倍此騰貴率は今後尙累進すべき傾向を有つてゐるか夫れども漸落の機運に向つて居るかど云ふことに付いては識者間にも色々の説ある處で固より的確に立證し得べき根據は誰も持たぬが、過去大戰の前後に於ける物價變遷史並に諸般經濟事情より推測して當らずと雖も遠からざる程度を豫想して見たい。一體經濟事情の豫測ほど困難なものはない。政治界の問題の如きは其社會の巨頭數名の消息から推しても氣流の赴く處を略豫知し得るものであるが、經濟界のみは世界的大波と内地の小波と入り亂れて錯綜紛糾極まりなきものであるから圖星と云ふ處をつき止めることは全く不可能事に屬する。

其處で物價の騰落は本年中如何に成行くべきか更に講和開始當時から談判進行中及平和克復後に亘つて如何に開展し行くべきかと云ふに之を研究する順序として先づ過

去戰役前後の物價變遷状態を顧みるの必要がある。抑も物價の暴騰は何れの國何れの時代に於ても戰爭の反動として一時現はるゝ處であるが今回の如き破天荒の暴騰振があり得べきか何うか。日清戰役に現はれたる騰貴率を見るに明治二十七年七月の一二六は順次累進して二十八年四月迄に一三五と爲つて居るから前後九箇月間に於て戰役終熄當時の高率を開戰當時に對比すれば約八分に當つて居る。即ち今次大戰の影響による十割暴騰に對する時は全く霄壤の感がある。更に日露戰役に於ける變動は何うかと云ふに開戰當時なる三十七年一月より平和條約締結の前月なる三十八年八月に至ると十九箇月間に於て之を見れば最初の一〇五、八八は多少の曲折を経過しつゝ最後の翌年八月には一一九、三八と爲つて居るから其騰貴率は一割二分八厘許りに當る。即ち今次の暴騰率に對しては矢張り問題にならないのである。然らば何が故に今度の影響が斯様に著しかつたかと云ふに其の原因とする處を學者間の諸説に隨ひ綜合して見るに(一)生活品の輸入減少若くは杜絶(二)内地生産生活品の輸出増加(三)正貨の膨脹

(四)新興事業に伴ふ物資需要激増(五)巨商の買占又は賣借み等が重なるもの、様である。(一)即ち生活上必需品としての藥品、染料、鐵、羊毛、棉花等の輸入激減が品拂底と爲り物價暴騰と爲つて居る(二)諸種軍需品の輸出激増により内地需要額を壓縮せしめ暴騰せしむるの因を爲し又船舶の輸出によつて船腹拂底と爲り運賃高騰と爲り物價暴騰と爲つた(三)即ち正貨在高は開戰當時僅かに三億圓を上下して居たものが大正四年即ち戰時に入つて第二年目の末期には五億圓と爲り五年末には七億圓を突破し更に六年度に入つては益々激増して忽ちに十億圓臺に上つた。同時に日本銀行兌換券發行高も驚くべき増加と爲り金融界の信用も頓に高まり是等凡ての事情は直接間接物價の騰貴を促して居る(四)即ち企業界の活躍に伴れて新設會社に必要な物資著しく増加し一般生活の需要に影響する處尠からざるものがある。例へば石炭、木材、金屬類の如き阿れも新興事業に多量の需要を見るに至れる結果市價著しく高騰し鹽の如きも工業鹽需要激増の影響で食鹽が不足と爲り追て値上の説あるが如き皆夫れで

ある(五)巨商、寧ろ奸商連が品拂底の機會に於て物資の買占を行ひ若くは賣借みをなして人爲的に市價を釣り上げ一舉巨利を博する者ある時一般消費者は爲めに法外の高價なる品を買はねばならぬこと、爲る。所謂物價調節令、奸商征伐の快舉ありし爲め餘程調和はされたやうであるが此の種の奸策は經濟事情の混亂機に乗じて始終裏面に行はるゝ傾向あるものなれば徹底的に取締ることは殆ど不可能であり其の悪影響を免かれんことも困難である。其他成金者流の豪奢を極むる結果及投機熱の旺盛なる結果一般社會の風潮を毒し直接間接物價の暴騰を助長せしむる等原因として見るべきもの固より尠からざる處であるが以上は就中主要のものであらう。而して是等の原因となり得べき諸現象は今日も依然として存在し又今後も暫らく持續するものと見て物價の推移は如何なるものであらうかを研究して見たい。

原因説は種々あるがそれは兎も角もとして物價の暴騰は事實であり又その状態が現に持續して居る以上今後の物價問題に付いては一層細心に注意を拂つて研究せねばな

るまい。今試みに今後の物價は尙更に騰貴するであらうとの説と反對に漸落の傾向を有すべしと云ふの説と相對比して見るならば前者に於ては(一)物資供給の不足を一理由として居る。即ち軍需品は引續き需要増加の傾向あり又成金者や労働者の消費高が一層増加し新企業簇出と共に物資需要が此の方面にも激増せんとする場合、戦争が依然繼續して居る爲め交戦諸國に於ける生産能力も依然として縮少し英米等に於て物資の不足は尙免かれざるべく且又船舶拂底のため貿易の支障も依然たるものあるべく随つて我國に必要な物資の輸入は到底意の如く行かず、工業原料の輸入も同時に困難なるが故に此の意味に於て内國の供給力も大體不足ならざるを得ない(二)英米諸國に於て漸行したる増税は戦争の繼續する限り尙増率されるかも知れないが我國でもそろ／＼之を實行し始めた。生活上の必需品に迄それが及んで來ると假令増率は僅少でも之を口實として營業者の方では増税程度以上に物價を釣り上げんとするの傾向があるから税金は間接に消費者から拂ふやうな現象を呈するかも知れないと、是等が騰貴

説の主要な點であるが反對に騰貴の趨勢を挫折せしむるの説を爲す者の論點は(一)一般需要者側の節約が第一である。戦時利得なき普通の消費者は自家經濟調節の必要に促されて出來る限り消費額を節するの傾向あり、又成金者や労働者に對しては政府が種々なる方法により其の濫費を防止し貯蓄の風を奨励するの必要がある。勿論之を勵行するに違ひないと思はれる現に英米等に於ては労働者のために少額公債を發行したり又工業主側に於て節約貯蓄の奨励並に制度を設けたりして専ら濫費防遏策を講じつゝある由(二)政府の發動により物價調節の徹底を計ることである。我政府は先きに調節令を發して極めて消極的に之を試みられたが尙反響は相當に認められた。更に必要の時機に適當の方法により一層痛切なる大々的調節令を發布して物價を緩和するの必要があると是等が主なる論據であつて物價漸落を當然の成行として觀測して居るのであるが兩説孰れが肯綮に當つて居るか輕々しく斷定は出來ない。之には參考として過去の二大戦役前後に於ける物價變動史を一瞥する必要もある。日清戦役に於ては開

戦時より講和締結の年は一割以上騰貴し講和の翌年より順次累進して第五年目には約五割の騰貴に當つてゐる。日露戦後は講和後二年目が暴騰の絶頂で約二割五分の騰貴率、三年目より僅かに低下して居る是等は固より今次の問題に強ひて結合し得べきものではないが兎も角も戦後大體騰貴の趨勢を示せることは前二戦役のみならず世界の大戦皆殆んど同様の結果を生んで居るから政府の經濟政策が一轉せざる限り又企業界に激變なき限り大體に於て物價は尙漸騰の見込と謂ふべき乎。但し講和開始當時並に談判進行中は人氣作用で一時漸落若くは暴落があるであらう。締結後歐米から襲來すべしと取沙汰される所謂ダンピングの反響は誰にも豫測し得ぬところである。

日銀營業成績

日本銀行大正六年度營業狀況を概記すれば左の如きものがある。

營業取引激増 大正六年中の營業取引總高は七百三十三億千四百餘萬圓に上りたる

が之を過去數年に比較すれば左の如く激増せり。

| 大正 | 收納高 | 支拂高 | 合計 |
|----|----------|----------|----------|
| 二年 | 一九二六二三〇一 | 一九二六六六五三 | 三八五二八九〇七 |
| 三年 | 一五五九〇二二五 | 一五五九一四九二 | 三一八五四九二 |
| 四年 | 一七三三二二七四 | 一七三四一八三八 | 三四六七四一一二 |
| 五年 | 二四三一四四一二 | 二四三〇三八〇五 | 四八六一八三一八 |
| 六年 | 三六六七九二〇七 | 三六六三四九四七 | 七三三二四一五四 |

即ち同年の總取引高は前年に比し約二百四十七億圓を増加せり。

手形割引増加 同年中臨時國庫證券並に手形の割引をなせる總額は六億五千二百卅七萬千一圓にして之を前年に比すれば三億三千七百十八萬九千六十四圓を増加せり又同年の手形割引を前年に比すれば左の如し。

| 店名 | 大正六年 | 前年比較増△減▲ |
|------|-----------|------------|
| 本店 | 三一二八二七八一五 | △一八三七八〇七五〇 |
| 大阪支店 | 一五七九一七四二二 | △六七四一六八一 |

| | | | |
|-------|-----------|---|------------|
| 門司支店 | 一四七六五〇〇 | △ | 六九四五〇〇 |
| 名古屋支店 | 七二三九三九九七 | △ | 三三七六一五二五 |
| 小樽支店 | 七七〇九〇七五 | △ | 七一九七九二五 |
| 京都支店 | 七九六五〇〇〇 | △ | 二七一五〇〇〇 |
| 福島支店 | 六五〇九三〇〇 | △ | 五八四九三〇〇 |
| 廣島支店 | 三二三六〇〇〇 | △ | 二六一一〇〇〇 |
| 函館支店 | 四四二八七二六 | △ | 二八九八七二六 |
| 金澤支店 | 一〇九一九六〇〇 | △ | 八四三九九六四 |
| 新潟支店 | 五五四〇二七三 | △ | 四二四〇二七三 |
| 松本支店 | 七七四四三〇〇 | △ | 六二八〇三〇〇 |
| 熊本支店 | 六六〇〇〇〇〇 | △ | 六六〇〇〇〇〇 |
| 秋田支店 | 一〇〇〇〇〇〇 | △ | 一〇〇〇〇〇〇 |
| 合計 | 五九九四二八〇〇一 | △ | 三三二六六四七〇六四 |

本店支店を併せ手形割引高は著しく増加せり。
 貸付金の状況 又同年日銀の貸付高を前年に比すれば左の如し。(單位圓)

種類

| | | | |
|---------|-----------|---|-----------|
| 定期貸付金 | 一八六六〇〇〇〇 | △ | 一四二一〇〇〇〇 |
| 同返還金 | 一八四一〇〇〇〇 | △ | 一六四六〇〇〇〇 |
| 同年末現在高 | 四七〇〇〇〇〇 | △ | 二五〇〇〇〇〇 |
| 外國替爲貸付高 | 七五六五九六〇二四 | △ | 四二六六四七〇六四 |
| 同返金高 | 六七八〇二〇一三六 | △ | 五〇三三三三八九三 |
| 同年末現在高 | 一九九一一八五八六 | △ | 七八五七五八八七 |

斯の如き貸付高の増加は一般金融取引の膨脹を語る。

各種預金状況 同年日銀の各種預金を前年に比すれば左の如し。(單位千圓)

| | | |
|-------|----------|-----------|
| 種別 | 大正六年 | 前年比較増△減▲ |
| 當座預金 | 一九七二五三〇一 | △ 七三五九〇五三 |
| 拂戻預金 | 一九七三一一四一 | △ 七三七八九九二 |
| 年末現在高 | 一九三六一 | ▲ 三五一七 |
| 政府預金 | 二五九八六六六 | △ 六二六九六九 |
| 拂戻高 | 二三七五八二一 | △ 五五一八七九 |

| | | |
|--------|--------|--------|
| 年未現在高 | 五三九二五六 | 二二二八四四 |
| 鐵道預金 | 二六七一一二 | 六〇〇四六 |
| 拂戻高 | 二七七一八五 | 七七七七二 |
| 年未現在高 | 二三九二 | 一〇〇七二 |
| 同債元利金 | 二〇〇五一〇 | 七三九九四 |
| 拂戻高 | 一九九四七八 | 一一〇〇八七 |
| 年未現在高 | 二四四五四 | 一〇三二 |
| 國債募集金 | 二三四四一四 | 一六二五六〇 |
| 拂戻高 | 二三四四一二 | 一六二五五八 |
| 年未現在高 | — | — |
| 貨幣拂戻預金 | 一一九九八五 | 七八一二五 |
| 拂戻高 | 一二五八八二 | 七四五五三 |
| 年未現在高 | 六〇七六 | 四一〇三 |
| 預金證書 | 二〇九四一 | 二六六九 |
| 拂戻高 | 二〇五九六 | 二七七四 |

年未現在高

三三九六

△

三四四

即ち各種預金は何れも激増せり。

地金受拂高

同年日銀が地金を受入又は拂出したる高は左の如し。(單位圓)

種類

大正六年

前年比較増△減▲

受入高

四三一八〇八八九三

△一八一三九七六九一

拂出高

二二二九三二二一〇

△一三四四五三四二三

右年未現在高を各種類別とし前年に比較すれば左の如し。

種類

大正六年

前年比較増△減▲

英國金貨

一八八四六〇〇〇八

▲一四〇二五八一

米國金貨

二三八二六九四五〇

△一七三〇二七八一〇

佛國金貨

三四二八一

△一六

獨國金貨

二一六六九

△一五九

露國金貨

一四四一四七

△三九七九七一八一

金塊

八三七〇二八六九

△三九七九七一八一

金銀混合塊 四一七五〇七
 舊貨幣 一六五三九九〇
 銀塊 一二四九

合計 五一二七〇五一七四

米國金貨及金塊に於て激増せり。

國債在高増減 同年日銀の國債受入高及拂出高如左。

大正六年

(單位圓)

前年比較増△減▲

受入高 三、七四七、一六三

▲ 九、三〇一、三八二

拂出高 五、九三六、三〇九

▲ 一四、三三九、九五五

年末現在高 三四、五三四、二六五

▲ 二、一八九、一四六

更に年末現在高を種類別に表示すれば左の如し。

舊公債

三、五二六

特別五分利公債

三、八〇九、三〇五

甲號五分利公債

六四一、〇八〇

五分利公債
 第一回四分利公債
 第二回四分利公債
 ろ號鐵道債券
 は號鐵道債券
 五分利國庫證券
 臨時國庫證券
 朝鮮事業費國庫債券

一、〇六四、〇四七
 一一、二八六、一九〇
 八、八三五、七二八
 五、七〇四、八九八
 四五〇、五三〇
 四七、七〇〇
 二、六八三、三九五
 一七、八六五
 三四、五三四、二六五

純益及配當率 同年下半年日銀の純益金及前季繰越金合計は四百七十八萬圓にして之を前數年同季に比較すれば左の如し。

| 年次 | 益金 | 配當率 |
|------|-----------|------|
| 大正元年 | 五、八六七、二六一 | 一・二〇 |
| 同 二年 | 五、〇三七、六四六 | 一・二〇 |
| 同 三年 | 四、九九四、七三七 | 一・二〇 |

| | | |
|--|------------|-------|
| 同 四年 | 四、六四九、〇〇一 | 一・二〇 |
| 同 五年 | 四、六八三、〇一三 | 一・二〇 |
| 同 六年 | 四、七八〇、〇〇〇 | 一・二〇 |
| 同年同行益金は前年に比し増加を示せるも未だ大正三年前の如くならず。 | | |
| 積立金の累増 大正五年下半季積立金は二千百三十九萬圓なりしが昨年上下兩季に於て積立金百萬圓を増加せるに依り同年末積立金は三千二百三十九萬圓に上り之を拂込資本金三千七百五十萬圓に對比すれば八割六分四厘弱に當れり資本金對積立金割合の前數年比較左の如し。 | | |
| 年次 | 積立金現在高 | 對資本割合 |
| 大正元年 | 二七、六九〇、〇〇〇 | 七・三八 |
| 同 二年 | 二八、三九〇、〇〇〇 | 七・五八 |
| 同 三年 | 二九、三九〇、〇〇〇 | 七・八四 |
| 同 四年 | 三〇、三九〇、〇〇〇 | 八・一〇 |
| 同 五年 | 三一、三九〇、〇〇〇 | 八・三七 |

大正六年

三三、三九〇、〇〇〇

八・六四

工業原料輸入状況

歐洲の戦亂は我貿易に幾多の變調を齎したが中に就いて原料品及び半製品の輸入は大正五年より著しき増加を示し六年に至り更に一層の膨脹を來した。是れ全製品の輸入減退し之が代用品を國內に求むるの必要に迫られたること。東洋各地を初め南米、濠洲等への我製品輸出激増したること等に因る。試みに我重要輸入品中より原料品並に半製品十七種を選びて累年比較を示せば左の如し。

| | | | |
|-----|---------|---------|---------|
| 品目 | 大正六年 | 大正五年 | 大正四年 |
| 鑛石 | 一七、六五四 | 一六、一六二 | 三、八七六 |
| 皮類 | 三、八四一 | 八、九三〇 | 六、三九七 |
| 生ゴム | 九、一三〇 | 七、二四六 | 三、四三一 |
| 棉花 | 三三〇、九七六 | 二七六、〇八八 | 二一七、三一六 |

富の膨脹

四三

| | | | |
|--------|----------|---------|---------|
| 苧 | 一八、四三三 | 九、一二三 | 八、四二三 |
| 羊毛 | 五二、一一二 | 三三、五〇六 | 三〇、五八四 |
| 革類 | 二、一六二 | 二、七八八 | 一、九〇七 |
| 染料 | 四、五三五 | 三、四三七 | 二、八八二 |
| パール | 二、八〇〇 | 九、〇一七 | 五、九七四 |
| 鐵塊 | 二五、二三七 | 一六、七二〇 | 七、九四九 |
| 鐵板 | 一六六、六七三 | 六六、五七二 | 二四、四三二 |
| 鐵管 | 八、八〇五 | 三、四三四 | 一、三八〇 |
| 鉛塊 | 五、八七一 | 七、四六二 | 二、九一〇 |
| 錫塊 | 三、七八〇 | 一、七九六 | 一、八二八 |
| ニッケル | 一、〇三一 | 二、〇〇八 | 一、六〇一 |
| 安知母 | 五、一四五 | 七、〇三二 | 六、六五四 |
| 眞鍮及青銅塊 | 一〇、一四四 | 一四、三五三 | 一、〇七〇 |
| 通計 | 六七一、三三八 | 四八五、六八〇 | 三二八、四二三 |
| 總輸入 | 一、〇三五、八一 | 七五六、四二七 | 五三一、四四九 |
| 百分率 | 六四・五 | 六四・二 | 六一・六 |

更に數量の比較を示せば左の如し。

| | | | |
|-----|---------|---------|---------|
| 鐵石 | 一二、九八四 | 四、九七三 | 二、九二七 |
| 生皮 | 六、二九五 | 八三六、三三三 | 七二九、二〇四 |
| 棉花 | 七〇四、七六〇 | 四四、三三八 | 三七、五四八 |
| 苧麻 | 六四、七四二 | 三五、一三六 | 四三、二八七 |
| 羊毛 | 三九、六二八 | 一、七八一 | 一、四一三 |
| 革類 | 九三四 | 五四一 | 一、四五五 |
| 染料 | 六四〇 | 九六、九六九 | 九〇、一九三 |
| パール | 二四、〇八〇 | 四〇八、五四六 | 二九二、一二四 |
| 鐵塊 | 三九五、一七〇 | 六五六、一八七 | 三四六、一九九 |
| 鐵板 | 九六七、八四一 | 二八、〇九二 | 一五、一一三 |
| 鐵管 | 四五、二七七 | 二四、六七二 | 二四、二〇九 |
| 鉛塊 | 二六、二七四 | 一、八三九 | 一、九八九 |
| 錫塊 | 三、三七七 | | |

| | | | |
|------|--------|--------|--------|
| ニツケル | 九〇六 | 一、八〇八 | 一、五九三 |
| 安知母尼 | 二九、二〇九 | 一八、六八二 | 二二、九四八 |
| 眞鍮 | 四四、二〇六 | 七一、〇四二 | 六、一七三 |

今増減の大勢を見るに皮類は關東州、海峽植民地、濠洲よりの輸入減に依り約三百萬圓を減じ棉花は米國五十萬斤印度六十萬斤を減じたるが寧ろ五年度が例年より特に多額の輸入ありしものと見るを至當とすべく苧麻は引續き支那より多額の輸入ある外比律賓よりせるもの特に多かりし爲め前年の二倍に上り、革類の減退は例年六十萬斤に上る英國品が三十萬斤に下がり米國の六七十萬斤亦二十九萬斤に減じたのが主因であらう。染料は戦前に比すれば少きもバルブは英國、諾威より輸入せるもの共に激減し加奈陀より稍や多量の輸入ありしも償ふに足らず鐵塊は英國品減退し之に反し鐵條板は英國より輸入減少せるも米國より九億萬斤の供給あり六年度輸入の殆んど全部を占む鐵管の増加亦殆んど全部米國の供給に係り鉛塊は五年度に多かりし米支兩國より

の輸入激減しニツケルは英國品、前年の半以下に下り安知母尼は支那よりの供給五割以上を増加した。

又戦争の影響で輸入額の順位にも甚だしき變化を示して居る。即ち左の如し。

輸入順位比較

| | | |
|----------|----------|----------|
| 大正六年 | 大正五年 | 大正四年 |
| 棉花 三三〇、七 | 棉花 二七六、〇 | 棉花 二二七、三 |
| 鐵板 一六六、六 | 鐵板 六六、五 | 鐵板 三〇、五 |
| 羊毛 五二、一 | 羊毛 三三、三 | 羊毛 二四、四 |
| 鐵塊 二五、二 | 鐵塊 一六、七 | 鐵塊 八、四 |
| 苧麻 一八、四 | 苧麻 一六、一 | 苧麻 七、九 |
| 眞鍮 一七、六 | 眞鍮 一四、三 | 眞鍮 六、六 |
| 眞鉛 一〇、一 | 眞鉛 九、一 | 眞鉛 六、三 |
| ゴム 九、一 | 皮類 九、〇 | 皮類 五、九 |
| 鐵管 八、八 | 皮類 八、九 | 鐵石 三、八 |

| | | | | | |
|------|-----|------|-----|------|-----|
| 鉛塊 | 五、八 | 鉛塊 | 七、四 | ゴム | 三、四 |
| 皮類 | 五、八 | ゴム | 七、二 | 鉛塊 | 二、九 |
| 安知 | 五、一 | 安知 | 七、〇 | 染料 | 二、八 |
| 染料 | 四、五 | 染料 | 三、四 | 草類 | 一、九 |
| 錫塊 | 三、七 | 錫管 | 三、四 | 錫塊 | 一、八 |
| バルブ | 二、八 | 草類 | 二、七 | ニッケル | 一、六 |
| 革類 | 二、一 | ニッケル | 二、〇 | 鐵管 | 一、五 |
| ニッケル | 一、〇 | 錫塊 | 一、〇 | 真鍮 | 一、〇 |

諸會社戰時利得

日本工業俱樂部は大正七年二月十五日委員會を開き戰時利得税に就き調査したる結果を發表したが右調査中各事業別の資本金、所得金、利得金額及び税額に關するものを擧ぐれば左の如し。(單位千圓)

大正六年の實績に基き算出したる戰時利得税額

| 種別 | 社數 | 資本金 | 所得金 | 利得金額 | 税額 |
|------|----|---------|----------|---------|--------|
| 紡績 | 一七 | 一七一、一三三 | 七二八、二四 | 三九七、六二 | 七九五、二 |
| 毛織 | 六 | 三三五、四九 | 九七七、七 | 四三一、七 | 八六三 |
| 製紙 | 九 | 三三七、二八 | 一一八、六五 | 七四九、六 | 一四九九 |
| 化學工業 | 一五 | 六一七、六七 | 一八七、五八 | 八六三、五 | 一七二七 |
| 石油 | 二 | 三九七、六六 | 一〇七、一一 | 二〇九、二 | 四一八 |
| 汽船 | 三 | 一九八、四七三 | 九〇、九五三 | 六五九、八九 | 一三一九七 |
| 造船 | 三 | 四八九、九九 | 三二六、二九 | 二六五、九五 | 五三一、九 |
| 商船 | 三 | 九五七、五七 | 三七三、四六 | 一八五、四六 | 三七〇、九 |
| 砂糖 | 七 | 九三四、四三 | 二八八、八〇 | 一六九、二三 | 三三八、四 |
| 合計 | 六五 | 七四六、六一八 | 三、一三七、四七 | 一九〇、三六〇 | 三八〇、七二 |

更に大正六年度を基礎として算出したる各會社戰時利得税負擔の實際額を示せば左の如し(單位千圓)

六十五會社戰時利得税額

| 會社名 | 資本金 | 所得金 | 利得金額 | 税額 |
|-----|-----|-----|------|----|
| 富の影 | | | | 四九 |

○紡績

| | | | | |
|-------|-------|-------|------|------|
| 鐘淵紡績 | 二九五一一 | 一一七〇三 | 六二五六 | 一二五一 |
| 福島紡績 | 五六六三 | 二一五七 | 一四七 | 二九 |
| 尼崎紡績 | 一八〇〇一 | 一〇七一八 | 五六二五 | 一一二五 |
| 攝津紡績 | 一四〇七九 | 五〇九九 | 一二一三 | 二四二 |
| 合同紡績 | 一二四〇四 | 九四〇一 | 六八一二 | 一三六二 |
| 倉敷紡績 | 三五八七 | 一〇八九 | 一〇二 | 二〇 |
| 天滿織物 | 三七七一 | 七七五 | 七七 | 一五 |
| 岸和田紡物 | 四五〇九 | 一八五四 | 七三九 | 一四七 |
| 内外綿花 | 六二八〇 | 一四〇五 | 四九八 | 九九 |
| 大阪織物 | 二一三九 | 六四一 | 一四三 | 二八 |
| キヤリコ | 二九二八 | 五五一 | 一九九 | 三九 |
| 日清紡績 | 四四〇六 | 一一一七 | 五八九 | 一一七 |
| 富士瓦斯 | 二〇〇四九 | 六四七〇 | 三三〇一 | 六六〇 |
| 大分紡績 | 二〇七八 | 四四七 | 一九七 | 三九 |
| 東洋紡績 | 三三三〇七 | 一一四三〇 | 七五七三 | 一五一四 |

| | | | | |
|------|-------|-------|-------|------|
| 江商株式 | 二九〇八 | 三七一〇 | 三三六一 | 六七二 |
| 日本綿花 | 七五〇六 | 四三五〇 | 二九二一 | 五八四 |
| 小計 | 一七一三三 | 七二八二四 | 三九七六二 | 七九五二 |

○毛織

| | | | | |
|------|-------|------|------|-----|
| 東京毛織 | 九二五〇 | 二〇四二 | 八八三 | 一七九 |
| 日本毛織 | 七七八二 | 三一〇〇 | 一九七六 | 三九五 |
| 毛斯綸紡 | 六六三八 | 一三三二 | 三三四 | 六六 |
| 東洋モス | 二九一六 | 八九一 | 二五七 | 五一 |
| 上毛モス | 二九八一 | 六六一 | 一五八 | 三一 |
| 東京モス | 三九七九 | 一七四八 | 七〇七 | 一四一 |
| 小計 | 三三五四九 | 九七七七 | 四三一七 | 八六三 |
| ○製紙 | | | | |
| 王子製紙 | 一三一五九 | 四八九九 | 三一九九 | 六三九 |
| 富士製紙 | 一一九三一 | 四〇〇〇 | 二五六九 | 五二三 |
| 九州製紙 | 一七一八 | 六一〇 | 四〇四 | 八〇 |

| | | | | |
|-------|-------|-------|------|------|
| 中央製紙 | 八九三 | 四七一 | 二八六 | 五七 |
| 木曾興業 | 四六四 | 一九九 | 一四四 | 二八 |
| 小倉製紙 | 一二七五 | 三八六 | 二一一 | 四二 |
| 四日市紙 | 二一九一 | 六四一 | 三五三 | 七〇 |
| 東京板紙 | 一三四四 | 四三一 | 二七〇 | 五四 |
| 中島製紙 | 七四八 | 二二二 | 五六 | 一一 |
| 小計 | 三三七二八 | 一一八六五 | 七四九六 | 一四九九 |
| ○化學工業 | | | | |
| 人造肥料 | 九七六八 | 一七六四 | 三〇八 | 六一 |
| 大日麥酒 | 三九〇九 | 二八四〇 | 九三六 | 一八七 |
| 日本化學 | 三九〇九 | 九七九 | 一九四 | 三八 |
| 日本醋酸 | 一四四七 | 一〇二二 | 七六七 | 一五三 |
| 電氣化學 | 三六九九 | 一〇七三 | 六二九 | 一二五 |
| 三共株式 | 二四二三 | 一五〇五 | 一一一四 | 二四二 |
| 淺野洋灰 | 七八三二 | 二四六八 | 八八六 | 一七七 |

| | | | | |
|------|-------|-------|-------|------|
| 小野田 | 三四七三 | 八〇四 | 三八七 | 七七 |
| 日本洋灰 | 一四一〇 | 五二四 | 三五五 | 七一 |
| 愛知洋灰 | 一二〇七 | 三二七 | 一八二 | 三六 |
| 磐城洋灰 | 一〇五四 | 六一二 | 四三六 | 八七 |
| 東洋灰 | 七〇四 | 三二八 | 一四四 | 二八 |
| 關東曹灰 | 四五〇四 | 一四一九 | 五六八 | 一一三 |
| 日本窒素 | 七一三二 | 二〇八〇 | 一〇三六 | 二〇七 |
| 日ペイソ | 二二八五 | 一〇〇七 | 五八六 | 一一七 |
| 小計 | 六一七六七 | 一八七五八 | 八六三五 | 一七二七 |
| ○石油 | | | | |
| 寶田石油 | 一九三一〇 | 五二六八 | 一六六七 | 三三三 |
| 日本石油 | 二〇四五五 | 五四四二 | 四二五 | 八五 |
| 小計 | 三九七六六 | 一〇七七一 | 二〇九二 | 四一八 |
| 東洋汽船 | 二三二七九 | 一四三一四 | 一一五二〇 | 二三〇四 |

| | | | | |
|-------|--------|-------|-------|-------|
| 日本郵船 | 九六三三〇 | 四七五九九 | 三二五九五 | 六五一九 |
| 大阪商船 | 四八八六二 | 二九〇三九 | 二一八七四 | 四三七四 |
| 小計 | 一六八四七三 | 九〇九五三 | 六五九八九 | 一三一九七 |
| ○造船 | | | | |
| 川崎造船船 | 四二四七五 | 二七二七一 | 二二一七四 | 四四三四 |
| 淺野造船船 | 三七五〇 | 三一〇九 | 二六五九 | 五三一 |
| 石川造船船 | 二七七三 | 二二四八 | 一七六一 | 三五二 |
| 小計 | 四八九九九 | 三二六二九 | 二六五九五 | 五三一九 |
| ○商事 | | | | |
| 安田商事 | 二二八八 | 二〇四四 | 一七七〇 | 三五四 |
| 三井物産 | 八八〇一六 | 三四〇五一 | 一六一八〇 | 三二三六 |
| 大倉組 | 五四五二 | 一二五〇 | 五九六 | 一一九 |
| 小計 | 九五七五七 | 三七三四六 | 一八五四六 | 三七〇九 |
| ○砂糖 | | | | |
| 臺灣製糖 | 二七六〇九 | 六八五六 | 三五四二 | 七〇八 |
| 鹽水製糖 | 一〇三五二 | 四二二九 | 二九八六 | 五九七 |

| | | | | |
|------|--------|--------|--------|-------|
| 明治製糖 | 一二七〇八 | 四四一五 | 二八九〇 | 五七八 |
| 東洋製糖 | 一二七四七 | 五一二六 | 三五九七 | 七一九 |
| 日本製糖 | 一八七八一 | 四一八四 | 一一八六 | 二二二七 |
| 新高製糖 | 五二七八 | 二二二二 | 一五八八 | 三一七 |
| 帝國製糖 | 五九六四 | 一八四六 | 一一三〇 | 二二六 |
| 小計 | 九三四四三 | 二八八八〇 | 一六九二三 | 三三八四 |
| 總計 | 二七四六一八 | 三二三七四七 | 一九〇三六〇 | 三八〇七二 |

(備考)

- 一、本表の形式は政府調査表に據れり
- 二、資本金の計算方法は、大藏省側の内示により、拂込資本各種積立金及び繰越金を合算したるものとし、營業税法の規定に據れり
- 三、本調査は大正六年十二月以前に終了したる事業年度一ヶ年間の各會社実績を基礎となせり然れども、其中左の除外例に屬するもの二三あり(一)大正六年下半期分未決算なるが爲に上半期のみを調査したるものは、該半期分を二倍して計上したり(二)大正六年下半期分未決算なるが爲に大正五年下半期分と大正六年上半期分とを計上したるものあり(三)事業年度を變改し一事業年度が一ヶ年に満たざるものは、月割を以て算當し一ヶ年分を計上したり
- 四、戦時所得金は主として所得税の標準となるべき決定額を記入したるも、政府未決定の分は考課状中の再差引の殘額(諸償却を差引たる殘額)を以て算當す

田畑賣買價格

日本勸業銀行の調査に係る大正六年十二月田畑價格(一段當り)及過去三年比較は左の如し。

| 地方別 | 田 | | 畑 | |
|-----|-----|-------|-----|-------|
| | 普通 | 大正五年同 | 普通 | 大正五年同 |
| 北海道 | 六一 | 五二 | 三一 | 二五 |
| 青森 | 一九六 | 一三八 | 七七 | 七三 |
| 秋田 | 二二六 | 一九一 | 九七 | 七九 |
| 巖手 | 一七四 | 一五一 | 九一 | 七一 |
| 宮城 | 一八七 | 一一二 | 二八 | 七七 |
| 山形 | 二七八 | 二二六 | 一六一 | 九五 |
| 福島 | 二二五 | 一五六 | 一三七 | 一〇三 |
| 新潟 | 二一七 | 二一〇 | 九三 | 九二 |
| 平均 | 二二三 | 一六五 | 一一五 | 八五 |
| | | | | 同四年同 |
| | | | | 同四年同 |

| 地方別 | 田 | | 畑 | |
|-----|-----|-------|-----|-------|
| | 普通 | 大正五年同 | 普通 | 大正五年同 |
| 群馬 | 二六二 | 二一四 | 二〇九 | 一五〇 |
| 栃木 | 二八六 | 二四七 | 一五七 | 一一二 |
| 茨城 | 二二六 | 一七九 | 一三三 | 一〇五 |
| 千葉 | 二四一 | 二一四 | 一一七 | 一〇八 |
| 埼玉 | 二四二 | 一九二 | 一九一 | 一四九 |
| 東京 | 三五四 | 二七八 | 三六〇 | 三七〇 |
| 神奈川 | 二八五 | 二五〇 | 一七七 | 一四九 |
| 平野 | 二六二 | 二一九 | 一七六 | 一五二 |
| 長野 | 三六七 | 三一八 | 二四七 | 二一七 |
| 山梨 | 二九五 | 三〇一 | 二四七 | 二一七 |
| 静岡 | 三五二 | 二六三 | 一七六 | 一七九 |
| 愛知 | 三九五 | 二八四 | 二四五 | 二〇三 |
| 三重 | 三一 | 二六二 | 四二一 | 三〇一 |
| 岐阜 | 四〇六 | 三三六 | 二〇一 | 一六二 |
| 富山 | 三三二 | 三三六 | 三四九 | 二三五 |
| 石川 | 二九六 | 三一〇 | 一三四 | 一二一 |
| 平均 | 二六二 | 二一四 | 二〇九 | 一五〇 |
| | | | | 同四年同 |
| | | | | 同四年同 |

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 香 | 德 | 平 | 鳥 | 島 | 山 | 廣 | 岡 | 兵 | 和 | 大 | 京 | 奈 | 平 | 滋 | 福 |
| 川 | 島 | 均 | 取 | 根 | 口 | 島 | 山 | 庫 | 山 | 阪 | 都 | 良 | 均 | 賀 | 井 |
| 三 七 九 | 三 七 一 | 四 一 六 | 三 五 五 | 三 四 九 | 四 六 六 | 四 〇 八 | 四 一 三 | 四 一 一 | 四 六 四 | 四 五 九 | 三 五 二 | 四 四 〇 | 三 七 〇 | 三 三 三 | 三 九 九 |
| 三 一 八 | 二 八 八 | 三 四 二 | 三 〇 六 | 二 六 七 | 三 二 九 | 三 八 〇 | 三 〇 七 | 三 五 四 | 三 八 四 | 四 五 四 | 三 三 〇 | 三 五 八 | 三 一 八 | 二 九 三 | 三 七 六 |
| 二 九 〇 | 二 四 九 | 三 一 七 | 二 四 九 | 二 七 五 | 三 七 二 | 三 〇 八 | 二 六 五 | 三 一 三 | 三 六 四 | 三 七 〇 | 三 二 八 | 三 七 五 | 二 九 七 | 二 七 二 | 三 七 七 |
| 一 八 二 | 二 三 一 | 一 九 九 | 一 八 三 | 一 八 四 | 一 四 一 | 二 六 一 | 一 二 五 | 一 九 七 | 二 八 七 | 一 九 六 | 一 七 六 | 二 〇 八 | 二 四 七 | 一 〇 八 | 二 一 八 |
| 一 四 〇 | 一 九 七 | 一 六 二 | 一 五 二 | 一 四 三 | 九 五 | 二 〇 一 | 一 四 八 | 一 五 〇 | 二 一 二 | 二 〇 九 | 一 七 二 | 一 六 八 | 二 〇 三 | 一 五 三 | 一 八 九 |
| 一 九 〇 | 一 五 七 | 一 四 七 | 九 三 | 一 七 三 | 一 二 七 | 一 五 七 | 一 一 二 | 一 二 三 | 二 一 四 | 一 四 四 | 一 七 二 | 一 六 五 | 一 八 八 | 一 三 三 | 一 九 四 |

簡易保険額府縣別

| | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 全 | 沖 | 平 | 鹿 | 宮 | 大 | 熊 | 長 | 佐 | 福 | 平 | 高 | 愛 |
| 國 | 繩 | 均 | 兒 | 崎 | 分 | 本 | 崎 | 賀 | 岡 | 均 | 知 | 媛 |
| 平 | 均 | 均 | 島 | 崎 | 分 | 本 | 崎 | 賀 | 岡 | 均 | 知 | 媛 |
| 均 | 均 | 均 | 均 | 均 | 均 | 均 | 均 | 均 | 均 | 均 | 均 | 均 |
| 三 二 八 | 一 二 三 | 三 三 三 | 三 〇 九 | 二 一 七 | 三 三 〇 | 三 六 一 | 三 三 四 | 三 四 七 | 三 三 二 | 三 九 二 | 五 〇 七 | 三 四 三 |
| 二 七 二 | 一 一 四 | 二 七 〇 | 二 五 一 | 二 〇 〇 | 二 九 四 | 三 一 二 | 二 四 一 | 二 七 七 | 二 八 四 | 三 二 八 | 四 〇 〇 | 三 二 六 |
| 二 五 七 | 一 四 四 | 二 七 七 | 二 六 一 | 二 二 一 | 二 八 〇 | 三 一 一 | 二 七 一 | 二 七 一 | 二 九 四 | 三 〇 三 | 四 一 一 | 二 九 二 |
| 一 八 五 | 一 三 五 | 一 五 八 | 一 五 三 | 一 〇 〇 | 一 四 八 | 二 〇 三 | 一 五 九 | 一 五 六 | 一 六 〇 | 二 一 八 | 二 三 一 | 二 三 一 |
| 一 五 一 | 一 一 五 | 一 二 二 | 一 〇 九 | 八 八 | 一 三 四 | 一 六 二 | 一 一 四 | 一 三 九 | 一 一 一 | 一 八 八 | 二 二 六 | 一 八 七 |
| 一 三 八 | 一 三 六 | 一 二 一 | 一 二 一 | 九 七 | 一 一 八 | 一 三 五 | 一 二 五 | 一 二 六 | 一 二 一 | 一 六 四 | 二 一 七 | 一 七 二 |

大正七年一月爲替貯金局の調査に係る全國簡易生命保險は契約件數二十六萬六千九百五十四件保險料十萬〇七百二十八圓保險金額二千五百十萬四千八百圓にして其府縣別は左の如し。(單位千圓)

| 府縣別 | 件數 | 保險金額 | 府縣別 | 件數 | 保險金額 |
|-----|-------|-------|-----|-------|------|
| 東京 | 一七二一五 | 二二二〇〇 | 神奈川 | 二七五三 | 三九三 |
| 埼玉 | 一一二〇 | 一三一 | 群馬 | 一九九〇 | 二〇三 |
| 千葉 | 一九二六 | 二二〇 | 茨城 | 一五〇八 | 一七六 |
| 栃木 | 二二七四 | 二五〇 | 静岡 | 三六五二 | 三五九 |
| 山梨 | 九三三 | 一〇二 | 新潟 | 一五五五〇 | 一一八七 |
| 長野 | 三七九三 | 一一一八 | 大阪 | 一一一五九 | 一四二九 |
| 京都 | 七三九五 | 八三七 | 兵庫 | 四二〇八 | 四七八 |
| 奈良 | 三〇〇九 | 三〇六 | 滋賀 | 一九五三 | 一八七 |
| 鳥取 | 一一四八 | 九七 | 島根 | 一一七八 | 一一四 |
| 岡山 | 四七五八 | 三七三 | 和歌山 | 一八九八 | 二〇七 |
| 徳島 | 九七八 | 九九 | 香川 | 四八九八 | 三一 |

| | | | | | |
|-----|-------|------|----|--------|-------|
| 高知 | 八一〇 | 七六 | 三重 | 一六〇七六 | 一二五九 |
| 愛知 | 一九一七八 | 一六六七 | 岐阜 | 六三二〇 | 四八八 |
| 福井 | 一〇六八九 | 八四三 | 石川 | 一〇六五七 | 九二五 |
| 富山 | 一一五六五 | 九四九 | 廣島 | 一八三七九 | 一四〇二 |
| 山口 | 五八七七 | 五〇九 | 愛媛 | 三三七三 | 二六五 |
| 宮城 | 二二六〇 | 二四六 | 福島 | 三七九一 | 三九〇 |
| 岩手 | 二二九六 | 二二二 | 青森 | 二四八五 | 二二三 |
| 山形 | 一九三九 | 一七一 | 秋田 | 一八〇二 | 一六二 |
| 熊本 | 四三九六 | 三九四 | 長崎 | 五八九七 | 五九六 |
| 福岡 | 九八〇六 | 九〇四 | 大分 | 一六九八 | 一四八 |
| 佐賀 | 一五五八 | 一五四 | 宮崎 | 一〇五三 | 一〇〇 |
| 鹿兒島 | 三〇〇一 | 二八四 | 沖縄 | 五〇八 | 四九 |
| 北海道 | 一五九四四 | 一七五〇 | 合計 | 二六六九六四 | 二五一〇四 |

二、産業振興

時局と産業政策 (仲小路農商務大臣述)

基礎材料自給 熟ら現時の情態を見るに今日の場合に於ては國家國民の存立上必要な物資は自給自足の途を講せなければならぬ。固より總ての物資悉く之を自給に待つと云ふには非ざるも國防及百般工業の基礎的材料は必ず自給の方策を樹立するを以て急務となす。依て先づ産業調査局の施設に依りて鐵、羊毛を初めとし「タール」工業「アルカリ」工業の獨立自給の途を講せんことを期し鐵に付ては製鐵所の第三期擴張工事の繰上げに加へて本年は更に十萬二千噸の擴張計畫を定め尙ほ民間に於ても成る可く規模の大なる製鐵所の隆興せんことを期するが爲め製鐵獎勵法の制定を必要としたる所なりしが其の施行と共に鐵自給に對する企業の形勢著しく興起し目覺しく産額の増進を來したるは洵に欣ばしき處である。本年は各種の方面に注意を怠らず鐵、石を初め各種工業原料の供給に力を盡し鐵自給に關する根本的基礎の確立を希望して

已ます更に必要なるは羊毛自給の問題にして此點に付ても鋭意内外の調査を盡し現在將來に對して一定の成案を得たるを以て豫算の通過と共に之れに着手し出來得る限り短年月の間に於て官民一致の力に依り自給の根本を樹立し東洋方面に適する綿羊の固定種を確立せんことを期して居る。化學工業に付ては努めて其基本ともなるべき點に力を致さんことを期し窒素研究所の新設により此問題を根本的に解決せんことを。更に進んで曹達工業に對しても適當なる解決を爲さんとして居る。次に染料藥品其他化學工業の著しき發達を見たるは洵に喜ぶ所なるも此發達を將來永久に持續せしむるは一層必要なるを以て此點に付ては特に今より大に力を致す方針である。且つ工業の興隆を期するが爲めに最も必要なるは其機關の充實に在れば理化學研究所の施設を初め國立工業試験所の完成關西地方に於ける大阪工業試験所横濱に於ける絹業試験所の施設其他發明獎勵等専ら工業の速進に力を盡す積りである。

農村振興と食料 國民元氣の基礎思想の堅實體力の強健は國家存立の大本にして主と

して農村に待たなければならぬ。農村の振興に對しては産業組合法の改正農業倉庫法の創立其他各種の施設により一應其組織を全ふするを得たりと雖も本年は更に進んで之れが充實を圖り地方中小以下自作農者の爲に其産業の餘地を與ふることに最も重きを置き今日迄未だ利用せられざる地水面に力を盡して利用の途を講すべく又耕地面積の擴張は將來我食料品の解決に重要な關係を有するを以て綿羊の増殖畜産の奨励と相待ちて此目的の遂行に努め農家副業の奨励低利資金の利用と共に農村の振興を計らんと欲する。

天然資源開發 天然資源の開發は今日の場合最も切要を感ずる。然るに世界に稀なる海岸線を有する我國に於て海洋の天産物は無限なるに拘らず未だ充分の開發を見ざるは洵に遺憾とする所なれば茲に一定の組織方針を定め水産の開發に大に力を致すことゝ爲つた。即ち先づ海洋調査に依りて基本的調査を遂げ最も必要なる遠洋漁業に付いては努めて之を組織的ならしめ内外の連絡漁獲物の利用改善販路の擴張集散の便宜漁

撈器具船舶の改善と共に必要なる漁港の設備を全うし更に進んで沿岸漁村の改善に力を致し政府に於て相當の補助を爲し信用組合を基礎として漁村の改善を計ること農村の改善と等しからしめんことを期して居る。

森林の經營必要 天然資源の開發中殊に重要なるは森林の經營にして國土の保存水源の涵養は勿論今や軍艦船舶及び一般工業界に於ける木材の需用は急激に増加し今後那邊に迄及ぶや殆ど測り知ることが出来ない。乃ち將來に對する堅實なる畫策をなし統一利用の上に於て永久に亘る方法を講じ同時に解決すべき各種の問題は明確に解決すること極めて必要なりと信ずる。曾て久しく結んで解けざりし社寺上地林問題も昨年圓滿なる解決を見たるは洵に欣ぶ所にして予は國家の爲め森林に對する各種の問題は努めて根本的解決を爲さんことを期する。

貿易の發展策 海外貿易發展方策の緊切を感ずること固より言を待たぬ處であるが、唯だ此に最も必要なるは相互貿易關係の聯鎖及び根柢を鞏固ならしむるに在るのであ

る。而も之を行ふには完全なる組織と機關とを必要とする。海外諸方には必要なる足溜りも無ければならぬ。必要なる施設も無ければならぬ。即ち商品陳列館の設置は缺く可からざる必要の事柄である。予は貿易上必要なる地方は努めて之れが設備を全うし其商品の陳列は勿論の事之を以て貿易上必要なる各種の取扱を爲さしめ内外人の爲に必要なる貿易上の機關たらしめんことを期し先づ本年は一は哈爾濱一は印度貿易南洋貿易に最も必要なる地方シンガポールに之れを設置し内外貿易業者の爲に大に利便を與へて我貿易業者の海外に於る足溜りと爲すと共に双方の聯鎖たらしめんことを期して居る。殊に今日切實に必要を感じるは印度及南洋貿易にして此貿易關係こそは我國に最も順應したる情勢にあるものなれば予は此點に對して殊に力を致す積りである。商工機關振作 更に現今の商工業は組織的有機的の働きに俟たざる可らざる時勢なれば各種商工業の機關は出來得る限り之れが改善向上を計り充分其機能を發揮せしめなければならぬ。予は此見地よりして商業會議所が其面目を改め眞に商工業の爲に有益

なる活動を見るは洵に喜ぶ所にして此上更に各種取引所が之れと共に益々其面目を改め能く此時勢と相應じ眞に公定市價を定むる公益機關たる實を擧ぐるに至らんことを切望して已まない。予も此點に對しては今後其改善に努力するであらう。

工業動員問題 國防は時局に鑑み最も大切とする所にして今日の國防は國民總員の力に據らなければならぬ。就中最も重きを置くべきは工業力即ち工場設備能力にして此點に付いては今日の場合官民の區別なく所謂一國の工業能力を増進し益々能率を高からしめねばならぬ。工業動員の準備とは畢竟此謂に外ならない。従つて工場設備を完全ならしめ其能率を増進せしめんとするには之れと伴ふて離る可からざる關係を有するものは職工問題即ち労働問題の考窮である。予は此攻究こそは今日より最も切實を感じるべしと深く信するを以て自ら我國情に適すべき妥當なる方策を講せんが爲め着々其準備を怠らぬのである。(申外商業)

化學工業振興策 (工學博士吉武榮之進氏述)

化學工業の範圍は甚だ廣汎であつて、通常素人が稽へると、製藥或は石鹼香水などを製造するやうな仕事を化學工業といふ位に思つて居るが、今度上野で開かれた化學工業博覽會を觀たものには分る通り、其範圍は中々廣い。人類の生活上に必要な物質は殆ど皆化學的處理を経たものであると云つても宜い位である。化學工業博覽會に於ては其の出品の類別を先づ二部に別つて、其一部は二十八類又二部の方は六類に分類した位で藥品、醫藥等は素より種々の金屬製品、染料、爆發物、顔料、塗料、窯業品、各種の飲食物、紙、護謄、油、化粧品、人造肥料、皮革類、纖維工業品の如きものは皆化學工業の範圍に屬す。是等の化學工業中の或物は從來我國に於ても發達して居つた。例へば釀造であるとか、其他古くから在り來つたものも幾らかあつたのであるが、學理に基いて發達して來た所の近代の化學工業、例へば合成法に依る人造染料

醫藥等の如きものは全く我國には無かつたのである。此等の合成法に依る化學工業の發達は約六十年前に英國のパーキンと云ふ人が人工に依つて染料を造ることを發明しそれから漸々獨逸の學者などが此方面の研究を續けて、遂には人造染料の工業は全く獨逸の占有工業と云ふ位になつて了つた。戰爭前には全世界の使用する染料は殆ど獨逸で之を供給して居つたやうな有様であつた。そんな風に歐米に於ても新しい化學工業は多く獨逸に於いて發達したのである。獨逸には化學を専攻する學者が澤山有り其の研究に依つて、從來の方法を改良し又は新なる製品或は製法を見出して應用したから斯の如く發達したのである。而して今度の歐洲大戰が起つて以來獨逸に於いて大に產出して居つた。此等の化學工業品は其輸出が杜絶して終つた爲めに、今迄供給を受けて居つた。他の歐洲の邦國或は米國又は東洋の諸國等は非常に困難と不便を感じるやうになつた。従つて各國共に自給の途を講ずる爲に或は政府の保護に依つて其工業を發達させ、或は研究の設備を新に造つて其方法を講ずると云ふやうになつたのであ

る。

我國に於ても此機會に各種の化學工業が勃興して來た、併し多くの物は戰爭の間だけ非常に價を高く賣ることが出来る物で、戰爭中丈の考へで製造しつゝあるので戦後に之れを繼續することは難かしい又全然繼續する考へを有たずにやつて居るものも多い。兎に角今日の所では高い原料を使つて拙い技術で造つた品物でも十分利益を得る丈の價を有つて居るのであるから稽古をし乍ら利益を得ると云ふやうな殆ど空前絶後の好機會を得た譯である。であるから此機會に興つた化學工業の多分は戰爭後まで繼續することは餘程難かしい。現に米國で發達した化學工業製品が輸入された爲に我國に興つた物が多大の打撃を受けて居る。例へば染料の如きも其一つであつて日本でも戰爭の影響に依つて各地に染料製造を試むる者が出來て、一時の間に合せ物も出來るやうになつたのであるが、夫等の染料は多く原料を米國に仰いで居つたもので、今度米國に於ても盛んに染料を製造し始めて其製品は既に我國にも輸入されると云ふ

有様であつて日本染料の相場は戦前の價格に比較すると十倍以上にもなつて居るが米國から輸入される物は僅かに二三倍であるといふ風に安い原料を澤山有つて居る米國と競争するといふことは却々困難である斯の如く折角發達しつゝある我國の染料製造業も未だ戰爭半の現在に於て既に大なる打撃を受けて居るやうな有様であつて戦後再び以前のやうに化學工業が振はなくなつて了ふといふことは誠に残念な譯である。故に是非とも之等の化學工業を發達させて日本も一つの化學工業國にならねばならぬ。之に對する方策としては如何なる事が必要であるかと云ふに、今日までの化學工業其他一般の工業は多く外國の方が發達して居つて日本は唯之を真似てやる。即ち模倣してやりつゝあつたのでござうしても、本家に及ばぬのは無理でない。併し今後は逆も模倣では成立して行けない獨創的に先方よりも一歩進んだ方法或は更に新しい方法に依つてやるやうにしなければならぬ。而して之をやるには研究と云ふことが最も必要である。現に理化學研究所の創立を見るに至つたのもさういふ意味からで、其他種々

の研究機關が在つて追々其成績も現はれることと思ふが、自分の考へとして殊に必要と思ふのは實際の製造會社に於て研究機關を十分に發達せしめることである。製造會社に於ては直に利益問題を感じるが爲に十分の興味を以て研究することも出来る。従つて其成績に就ても迅速に且つ適切に擧げることが出来易いのであるから、各工場に於いて十分なる研究機關の設置を希望する次第である。斯う云ふ方法は餘程大きな工場でなければ十分の効果は擧げ難い。

獨逸あたりでは化學工場には研究部と云ふやうなものがあつて、其處には學位を有つて居る人達が數百人も居り常に其研究に従事して居るといふ有様で、此の如き事業は出来る丈け大規模にして完全なる研究機關を備へたものにしたのである。又一方には研究所の設備が出来ても其の研究に従事する適當なる人材が無ければ何にもならぬ。さう云ふ人材を養成する事が最も急務である、従來化學を教授する學校もあり又今後新設せらるゝものが澤山あるであらうが、従來是等の教育機關に對しては十分

なる經費を與へられない爲に人材の養成上種々なる不便を感じて居るし又研究することも經費が不足の爲に十分なる研究が出来ないのであつたが、今後は諸學校の設備を完全にして學者を養成する爲に従來より以上の經費を供給するといふことも必要であらうと思ふ。

それから我國の化學工業に必要な原料は固有の物もあるけれども未だ不足の物が澤山ある。故に其原料を得る途を調査することが必要であるから、是等に關する何等かの適當の機關も是非設備して欲しいものである。日本の地勢から云つても水力の利用は十分に出来るのであるから、さう云ふ天然の力を利用して水力電氣を安く得て、それを基として種々の化學工業を起し以て他國と競争する一つの武器としたら宜からうと思ふ。現に近來諸方に起りつゝある空氣中の窒素を固定する工業などは電氣を利用してやる最も著名なものであつて電氣力の容易に得らるゝ我國に於て益發達せしむべき事業であらうと思ふ。それから染料の原料となるベンゾールは瓦斯會社の副産

物、製鐵所其他に於けるコークス製造の副産物として得らるゝものであつて、現在では未だ其供給が十分でない。若し染料工業が非常に發達すればベンゾールの不足を感ずるに相違ないのであるから、此ベンゾールも矢張水力電氣に依つて得らるゝことが既に判つて居るのであるから是等も工業的に成立するやうに大に研究すべきであらうと思ふ、ベンゾールは例の電氣に依つて造つたカーバイトから得られるアセチリンを縮合して得ることが出来るのである。

指導機關の必要 さて前にも申す如く、十分なる研究機關を設備した大組織の工場を建てるに最も必要であるが、夫等の大組織の工場が建てられるとしても其製品を輸出するに或は又外國から輸入する競争品を防遏するといふやうな對外的の事になれば各工場は互に氣脈を通じて合同して之に當るといふ必要がある。獨逸の化學工業會社などは、何の地方に向ける製品は何の會社と何の會社で製造し他の會社は一切之れを製造しないとか、或は何の製品は何の地方に於ては互に競争をしないとかいふ

やうに申合せをして所謂コンベンションとかカーテルとか云ふ事をやつて居る。のみならず是等の事業に對しては政府も大に力を注いで官民合同して方策を定めて競争國に相對する方針を執つて居る。然るに我國の工業に就いて見ると、或工場に於いて一つの有望なる製品が出來初めると直に之を類似したものを粗製して折角成立しやうとする商品の販路を杜絶せしめて了ふといふやうなことが屢ある。そんな方法でやつて居つては到底進歩した工業はお互に出來ぬ、工業家が其間に聯絡を執ると同時に、これをうまく指導する政府の機關が必要であると思ふ。(東朝)

戰後國際的生存競争の基礎 (理學博士鶴田賢次氏述)

(一) 戰後の競争 此度の戦争程一國の國力と云ふ事を痛切に感せしめる戦ひは曾てない。各國は其全力を傾倒して戦つてゐる。隅から隅迄力と云ふ力は一つも餘さず播集められて自國の存亡を決する戦争と云ふ一大渦巻の中に投げ込まれてゐる有様である

今迄の戦争は未だ何處かに隙があつて部分的な處が有つたが今度の戦争は斯かる域を脱して完全なる總國力の傾倒であり對比である。單に軍隊が強いとか弱いとか戦争が巧いとか劣いとか云ふ問題でなく凡ゆる智慧の絞り合ひである。人間も多くなければならぬ。食物も充分多くなければならぬ。衣服も不自由でない丈け自國で供給しなければならぬ。其他生活に必要な凡ては他の國から求めなくとも自國で供給する丈の力がなければならぬ。それで行なれば戦争が長期に亘り他國と隔絶せねばならぬ様になつた場合には忽ち敗亡の憂目を見なければならぬ。然るに戦争は未だ是丈では出ない。更に優秀な武器を有してゐなければならぬ。近代の戦争は單なる人間の腕力から脱却して機械的になりつゝあつたが今度の戦争に於てはそれが愈々顯著になつて武器の優劣は直に勝敗の分れ目となるに立ち至つた。そして是等の武器は其優秀を其國の自然科学に俟たなければならぬ。茲に於てか其國に於る自然科学の發達如何は戦争勝敗の分れ目と云ふ事になつて來たのである。若し其國にして自然科学の發達が

幼稚にして取るに足らぬものであるならば其國の國力は極めて貧弱であつて戦争に敗亡するは必然の理である。而も自然科学の効用は斯かる優秀なる武器を製造し得るばかりでない。商業の根本たる工業は又實に此自然科学の發達に俟たなければならぬ。自然科学が發達すれば工業は勃興し其結果は商業の旺盛をも來し國力は充實するに至るのである。

十九世紀以降に於て自然科学の發達は實に驚嘆すべきものがある。是は一面人類の偉大なる能力の發現であり人類の自然征服である。此影響は凡ゆる點に波及して生活態様に重大なる變化を來さしめたが就中國家間の競争方法は實に複雑至極のものとなつた。即ち國力の内容が實に複雑至極のものとなつたのである。

先頃米國大統領ウキルソンの議會に與へた教書の中に下の文句がある。獨逸が其材幹産業學問企業等に於て成功を博し平和の時代に於て其勢力を蓄積し工業科學商業等に於て吾人と競争せる際には何等の不滿を洩したる事なし。頭腦と發明力とに於て

我優らば我興り然らざれば即ち我仆る。自然競争の理法に對し何等の異議を挾まざりべし。

私は今度の大戰を最後として戦争と云ふ事實が人類生活から滅亡するか否かは知らないが。假令戦争が滅亡としてするも人類生活から生存競争がなくなる譯ではない。何故ならば戦争は單に生存競争の一態様一方法である。戦争がなくなれば生存競争の一つの方法が除かれる丈の事で更に是に代る方法が出現して依然として激烈な競争が存在する譯である。稱して人道主義と云ふもそれは單に競争の一方方法である戦争を止むると云ふに止まつて全然人類の生存競争を止めると云ふのでないからして其差は五十歩百歩の間に在る。我人道主義者たるウキルソン氏も所謂自然競争の理法による競争を高調してゐる次第であるからして戦後に於ては國際的生存競争は一層所謂自然競争の理法の下に激甚を極むるは火を暗るよりも明かな事である。若し今後に於て戦争と云ふ競争方法が絶滅されると假定するならば其競争は軍事關係を除いた國力に依つて

決せられる次第でウキルソン氏の所謂頭腦と發明力とに於て我優らば我興り然らざれば我仆るゝ事となるのである。換言すれば其國に於ける自然科学の優劣如何は國際的生存競争の基礎となる譯である。何故なれば今後に於て一國々力の中心點をなす商業海運業は其基礎を工業に置かねばならず工業の基礎は自然科学に立脚するが故である。そしてかゝる傾向は今度の大戰に於て明白に證明され増大されて來たのである。

(二) 獨逸の強大なる所以と化學工業 殆ど全世界を敵として戦つてゐる獨逸が何故衰へないか。如何に軍人が頑張つても其活動の原動力が盡きれば直に滅亡する獨逸は然も其天然に於て豊富であるとは云へない。それが今尙ほ衰亡せずして却つて聯合軍を壓倒せんとしてゐる。其力は果して何處から湧き出るのであるか。其力は明かに彼が有する優秀無比な自然科学の知識から出て來るのである。獨逸は此知識を以て自然を征服してゐる。其化學工業の發達してゐる點に於ては世界獨歩であることは周知の事實である。學術は實地に應用されて必ずしも豊富でない天産物を補ひ巧妙至極な製造

法は多大の利益を生み出して學者の狹隘な研究室からは無限の富が湧き出るのである。獨逸に存在する自然物は悉く活用され既に存する物は愈其價値を増し未だ存せぬものは其研究の力を以て無より有を生せしめる。即ち無機物を以て有機物に代へるのである。今度の戦争に於てかくも獨逸が根強い力を有するのは平素あらゆる點に於て學術的研究が行き届き而も夫れが巧に實地に應用されてゐる事に存するのである、然らば斯かる化學工業の成功は何に原因するか云へばエーレンブルガーの云つてゐる様に獨逸人の性質の化學研究に適する事、政府の思ひ切つた保護製造家がよく學者を尊敬し且利用する事に歸するであらう。獨逸の政治家は眞實に何か國家の爲になるかを知つてゐる。千八百廿五年時の化學者リービッヒがギーゼン大學に化學研究室を興して應用化學を始むるや獨逸聯邦政府は是に倣つて各大學に化學研究室に興し多額の費用を投じて悔ゆる所がなかつた。爾後獨逸の政府は愈獎勵に力を盡し遂に獨逸の化學工業をして今日あるに至らしめた。資本家も亦實によく學者を尊敬し利用する

事を知つてゐて其研究をなさしむる爲には遠大な希望を以て心よく費用を支出するのである。獨逸人の性質が綿密で研究夫れ自身に非常な興味を有し是を以て自己の天職となし寢食を忘れて研究に従事してゐるのは實に想像外である。獨逸が今度の大戰に於て無盡の實力を有してゐるのは實に繋かつて學術の研究と其應用の完全に存すると云ふも過言ではない。

獨逸は斯かる状態であるが其他の佛蘭西英吉利亞米利加は如何と云ふに是等の國も決して獨逸に遜色はないのである。佛英の如きは其發明の點に於て獨逸の上にある。唯其應用化學工業の點に於て獨逸に一等を輸するのみである。然るに今度の大戰は種類なる點に於て各交戰國の化學研究を刺戟し且強制して驚くばかりの發達を遂げしめてゐる。武器は勿論其他あらゆる事々物々に就て必死の研究がなされてゐる一寸でも研究を怠れば其結果は直に戦争勝敗の上に現れるからである。かゝる有様であるからして戰後に於ては武力的競争の存否如何に拘らず此勃興して來た化學工業を根柢として

激烈なる國際競争が實現して來るであらう。國際的生存競争に最後の勝利を占むる國家は優れたる自然科學の知識を有し且是を實地に最もよく應用し得る國である事は疑ふ餘地のない事である。

(三)我國の狀態果して如何 翻つて我國の狀態は如何であるか。化學工業は如何なる程度の發達をなしてゐるか。斯かる問ひに對しては今更私に此處に暴露する迄もなく凡ての者が知悉してゐる事である。我國の此狀態を以てして如何にして來るべき戰後の所謂自然競争に應戦せんとするのであるか。私に此事を思ふ時歐米の各國が今や其全力を擧げて偉大な意義を含む大競争の競争場裡に必死となつてゐる時我國が此偉大なる苦痛の圏外にゐて幾何かの富を得つゝ平安の裡に其日を徒費しつゝあるを心から悲しまざるを得ないのである。何故ならば歐米各國は此意義多き必死の場合に遭遇してあらゆる研究努力に熱中しつゝある間に我東帝國は何等眞實の努力をなさないのであるか外には粗惡な工業品を輸出して信用を失墜し僥倖して贏ち得たる幾何かの

はした錢の使途に戸惑つて或は骨董熱に浮かされ或は遊蕩に溺落して身の程を知らぬ始末ではないか。

由來東洋文明の弱點は其非科學的な點に存する。今日生存競争場裡に在つて東洋が西洋の爲に征服されつゝあるは全く是が爲に外ならない。そして此非科學的な人種の特徴は物の本質を樂しむ事を知らずして其目的を安價な物質的享樂か名譽心の満足に置く事である。そして凡ての仕事は單に物質的愉快か名譽心か換言すれば立身出世をする爲の道具に過ぎないのである。即ち政治家は政治を目的とせずして權力の爭奪を目的とし學者は學問を目的とせずして名譽を目的とする。故に博士の學號を得れば事足るのである。飛行家の多くは眞實飛行に興味を有するのではないからして船乗根性にせめても其犠牲をつぐなふのである。仕事は目的でなくして手段である敵本主義である。かゝる生活を送る人種が最も仕事其物を目的として其中に自己の天職を樂しむ者でなければ出來ない。科學的研究に如何にして優れる事が出來やう。然し今は徒

總計 八六、六〇〇 — 八六、六〇〇 六五、九〇〇 三六、八〇〇 六五、八五〇 一、五五、七〇〇 三六、八〇〇 一、五五、七〇〇
 前年同期と 五九四、〇二五 — 五九四、〇二五 三三四、三三八 ▲二四、四一〇 三九八、八八八 九八、二四三 ▲二四、四一〇 九〇三、八三三
 比較増▲減

銀行會社計畫資本最近五箇年比較

| 業別 | 大正六年中 | 大正五年中 | 大正四年中 | 大正三年中 | 大正二年中 |
|--------|---------|---------|--------|--------|--------|
| 銀行業 | 一八八、四四九 | 三九、三三八 | 三〇、九一七 | 五二、〇〇二 | 八四、七三三 |
| 紡績業 | 二二、六五〇 | 六七、四六〇 | 一六、五〇〇 | 一、七〇〇 | 一〇、七〇〇 |
| 電氣業 | 九二、六一七 | 七五、三〇九 | 四一、四六八 | 三〇、九九〇 | 三六、二三〇 |
| 鑛業 | 一八七、九九五 | 六六、三五〇 | 一、九七〇 | 一六、六八五 | 一六、八〇〇 |
| 水産業 | 一〇、六五〇 | 三、一〇〇 | 一、六七五 | 七、五〇〇 | 三、二〇〇 |
| 鐵道及軌道業 | 六五、四〇〇 | 二二、一五五 | 三七、二四〇 | 三一、一八〇 | 五〇、二三〇 |
| 製造工業 | 五五二、九一〇 | 二四五、九五〇 | 九六、七七三 | 三八、五一五 | 八三、七四四 |
| 航運業 | 一五五、二〇〇 | 五九、三〇〇 | 二七、九五〇 | 一九、三〇〇 | 六、五八一 |

商工業會社增加率

農商務省商工局調査に依れば大正六年中各種商工業會社は急激に勃興し就中造船業、造船業、金屬工業、機械器具製作業、醸造業、鑛業、纖維工業、化學工業運輸交通業

等の如き資本額の増大著しく、殆ど例年の五倍乃至二十倍に上るものあり最近七箇年間に於ける新設會社を比較すれば左の如し。

| 明治四十四年 | 會社數 | 資本金額 |
|--------|-------|-------------|
| 大正元年 | 三、一一八 | 九四、三〇〇、三七五圓 |
| 大正二年 | 三、八八八 | 一一〇、九一九、八八二 |
| 大正三年 | 四、四七八 | 一〇四、六七二、五六〇 |
| 大正四年 | 四、四三七 | 八五、九八五、三一九 |
| 大正五年 | 四、〇〇三 | 六九、九六八、六一五 |
| 大正六年 | 四、〇二〇 | 一一五、五二二、九六五 |
| | 五、一五六 | 四二二、四五二、二八五 |

工業原料問題

如何に日本の工業が旭日の勢ひで振興し、又如何に工業技術の進歩を見つゝありと雖も、無から有を生ずるの奇術だけは發見されない。棉花を失つても紡績業を發展せしめると云ふ譯にも行かず、羊毛が無くなつても廉い洋服が着られると云ふ方法もな

し、鐵なしに軍艦が出来ること云ふ自信もなし而して食料なしに生きる事云ふの衛生法もないやうだ。然らば原料は工業の最大要件であり又絶対條件でなければならぬ。随つて政治家も實業家も、此の原料なる絶対條件に付ては相當に心配もし、研究もして、近頃俄に消化力を増した「工業」に對する「糧食」を與へるやうにしなければならぬ。而して又之を以て日本に樹立すべき國策の肉としなければならぬ。若し此の大問題を閉却して世界の經濟關係を樂觀的にのみ解して居たら、般鑑遠からず今日の獨逸に於ける工業界みたやうなものが現出せぬとも限らぬ。獨逸今日の工業狀態並に戦後に繼續すべき經濟事情に付或る經濟學者の調査したる處に依れば、大要下の如き慘狀を知ることが出来る。獨逸は毎年百萬噸の燐礦及百萬噸の硝石を海外から輸入することに依つて農業の重大なる要件を充たしてゐたが、今はそれが無い。獨逸は濠洲、南米方面から羊毛の大部分を仰いでゐたがそれも杜絶。亞麻は主として印度より、絹工業原料は主に日本及び支那より、棉花は米國、印度、埃及、支那等より、鉛礦は濠

洲より、タングステン礦は東洋諸邦より、其他重要工業原料の海外より仰ぎつゝありしものが今は皆塞がつて仕舞つた。獨逸工業中重要なる位地を占むる金屬工業に對しても銅の供給が第一に杜絶した。而して自給の量は總需要量の五分の一にも達して居ない。尙主要礦石を海外より輸入して獨逸内に精鍊業の盛んなるものもあるも是等精鍊所の熔鑛爐が殆ど皆冷えて仕舞つた。さて是等の悲觀すべき各種の現象は戰時中に限られるもので、戦後は直に復活し得べきものであらうかと云ふに斷じて左様に單調には考へられない。何となれば英國が既に獨逸工業の誇りの一であつた精鍊業を大々的に計畫して居る如く、獨逸へ輸出しつゝあつた原料の處分法を聯合側で自ら研究し自ら企業しつゝあるものが尠くないからである。

經濟學者の説は單に獨逸に對してのみ悲觀的材料を蒐めたものであるが、而して又獨逸の如き國情と日本の立場とは全然異にするものではあるが、兎も角も或る事情の爲に原料が杜絶すると云ふ場合だけは一樣に心配し豫想して居なければならぬ。日本

に對する原料杜絶の事情は獨逸の如き露骨にして慘酷なものでは斷じてないけれども、日本が原料國に對して何等の罪惡をも犯さず原料杜絶の痛棒を以て酬ひらるゝは却つて悔やしくも感ずる。それだけ日本の原料問題が却て面倒であるとも思はれる。そして又戦後に繼續する程度に付ても婉曲に複雑に進むだけ觀測が困難である。

資本合同説

工業界今日の盛況は國家としても國民としても寔に喜ぶべき現象であるに違ひない。去り乍ら此現象が特に「時局」と云ふ最大なる條件を持つて居る以上には、時局の解決した後に何んな現象を呈し來るであらうと云ふことに付ても考へずには居られない。大戰終結後に今日の狀態を久しく繼續し得べしと見て安心する者は比較的多く、戦後形勢一變して經濟界の反動的恐慌を誘致するに至るべしと見て心配する者は比較的尠いやうであるけれども、双方に相當の理由もあり得る以上、此の問題を無頓着に

見逃して置くことは出来まい。

之を樂觀する者の説に曰く、歐米先進國に於ては戦争の慘禍に依り工業資金も缺乏し、労働者は多數喪失し、生産機關が大部分破壊されて仕舞つたから之を復舊するは容易の業に非ず、又戦後に引續いて軍備補充計畫の方へ其の能力を奪はれるから、一般工業が平時に復して貿易界の勢力を挽回する迄には如何に善意に解して見ても十年乃至それ以上かかるであらう、其の間には日本工業の内容が著しく進歩し得べきが故に時局中日本工業家が獲得した利権を奪還される様なことは有り得ない。悲觀黨の説に曰く、歐米工業國が多大の損失を被つて居ることは事實であるが、戦争終結後は國際間の競争が經濟方面に傾注されることは火を賭るよりも瞭かである、随つて弾力性に富みて先進工業國の復活運動は豫想以上の猛烈なものとなるべく、日本の工業家は其の時こそ非常な威嚇に遭ふべしと云ふにある。而して是等悲觀黨若くは相當に警戒して將來の工業組織を改良するの必要を説く人々の中には恐慌時代に備ふる一策と

して資本合同論を唱ふるものが尠くない。説を爲して曰く、經濟市場に於ける勝利の條件は第一品質の向上、第二値段の低廉である。之を等閑にして所謂火事泥的に儲けようとするものがあるから「粗製濫造」の誘を受けたり「暴利」奸商等云ふ忌まはしき名も附けられるのである。然らば品も佳くし値も安くするためには如何なる態度に出て事業を經營すべきかと云ふに、その第一要件は大資本の工業組織によることである。大資本による大規模の計畫を立て、萬般の設備を完全にし、新時代に伴つた經營法により、原料供給の方法も技術も労働も凡て遺憾なきを期し、従業者の待遇も十分にし、能率も理想的に増進せしめ得て、品質を改良し價額を低廉ならしめ戦後海外より殺到すべき貿易品に對抗する場合も彼等の窺ふべき餘地を存せぬ様内容を充實して置かねばならぬ。然るに最近勃興しつつある我が工業界は過渡期とは謂ひながら拙速主義の小規模な計畫計り多く、黨中黨を爲して國內同業間に於て相争鬪する様な不利をも敢てし、對外的には巨砲に對抗するに小銃を以てする有様だから、戦後經濟界の大

戦が開始される時は片つ端から蕪倒されぬとも限らない云々。其説の可否は姑く措くが、尠くも斯麼心配と希望とは有力なる工業家の間にも學者の中にも大分ある。

投資家の氣迷

中央に於ける大きい投資家は、最近の配當で三割五割の味を占め又その利益歩合は暫らく繼續し得べきものと推測して居た矢前、新會社の目論見書が負けずに三割五割乃至十割請合、二十割見込充分と云つたやうな能書を並べ出したので、親しく調査もせず、時節柄先づその位はあるだらうと早合點でグン／＼引受けた。然るに資本家と云ふものは存外神經質なもので、景況の何となく引き立つて居る間は三割五割乃至十割二十割の呼び聲を盲目的に確信して進んで行くが、不圖した張合で株界に冷たい風が吹くと十割二十割は愚か五割三割の収益計算も皆疑はしく爲つて来る。而して此の一寸した心理作用が甚だしく新會社の創立委員を煩悶させる。小投資家殊に地方に於ける投資家達は又新企業の能書に食傷して殆ど識別がつかぬ

やうに爲つて来る。化學工業と名の付くものだけでも百種以上あり、鑛山側の鼻息も負けずに荒く加ふるに開墾だ養殖だ船だ汽車だと數百種の珍奇な事業から「我社の誇りとする處」を見せられて食指間斷なく動き、利廻りの勘定やら株の切り替へ策やらで毎日算盤を置いて居ると慾念の作用が複雑に爲つて来ていよ／＼益々取捨去就に迷はざるを得なくなる。

こんな事情で大投資家が臆病になり小投資家が錯亂する傾向を示すやうになつた結果、近頃成立した會社若くは成立せんとして居る會社には公募見合せが大分ある。而して必ずしも發起人と賛成人が確實に權利を保有する積りでもなく、日和を見てポツポツ吐き出し、若くは戸別訪問的運動で出来るだけ各方面へ「割讓」する方針のもある。

粗製濫造問題

最近の工業は急激な發展の過渡期に屬して居るから、過渡期の通弊たる粗製濫造の

聲は起り得べき時期ではあるが、然り逆之を當然の現象として看過することは斷じて許されない。日本工業の發達を單なる一時的繁榮と見て、其の利益を火事泥的に收むべきに非ず、戦時經營は直に戦後經營に相承せしむべく、信用は恒久的に堅めて行かねばならぬ。此の點に付ては勿論政府の監督指導乃至調査取締に俟つ處多きに居ることではあるが、利害の直接的なる當業者自身亦常に茲に留意して居らねばならぬことだ。先きに露國への輸出品が頗る不評判であつたことは外電屢々傳へたる處によりても瞭かであり、當路大臣の當業者に對する注意もあつた程であるが、其後又造船界に於ける粗製濫造の聲を聞くに至つたのは苦々しきことである。殊にそれが聯合國へ貸した汽船に大缺陷があつて殆ど使用に堪へぬ様なものあることを發見し指摘されたなどは日本の恥辱でもあり、總ては當業者の自殺的運命を誘致する素因ではないか。而も其の缺陷の主なる點はリベットの弛緩に基いて浸水甚だしきものであつたと傳ふるものがあるが、果して事實とすれば心外千萬と云はざるを得ない。リベットは日本の

造船界にも相當に供給の途が開けて居り、且つ其の品質に付ての嚴密なる検査を経たるものでなければ使用することが出来ない筈だ。若しリベットそのもの、故障であるとするれば、此の検査を畧したものと見ねばならず、又若し所定の検査を経たるものであるとするれば、之れより出づる故障は造船技術上の手脱きに胚胎するものと見ざるを得ない。

工場法の影響

悪案三十年、漸く大正五年九月を以て發布された工場法の成績は如何であらう。歐米諸國の何處の工場法よりも一番遅れた、そして一番幼稚な工場法が實施されてまだ間もない處であり、殊に或る重要な條項は大正五年末まで適用延期の恩典もあつた位だから、實際法の全部を施行したのは六年一月に始まつて居る。隨て其の反響とか成績とか云ふことを業々しく言ふは時機尙早の感なきを得ないけれども「有は無に優る」

と云はれた工場法で、無の上に出現したものであるだけに彼の様な粗末なものにも多少の反響はある。否、寧ろ彼れだけの事項を守るさへも大問題であるかの如く騒ぐものも尠くない。

有れども無きに似たる粗略な工場法に驚く日本の工業家は工場法以上の粗畧な仕事をやつて居たものに違ひない。扱、同法の適用を受くる工場は大小通じて全國一萬八千九百四十九、之に屬する職工數百一十一萬二千九百三十一人、東京府下のみでは工場二千六百二十、職工十四萬二千四百八十八人と云ふ勘定になるが、内第一流の工場に在つては多く法律命令に先だつてそれ以上の設備をして居るから、さして苦痛を感ずることもないが、二流三流以下に爲ると随分怪しいのがある。それだけ苦痛も甚だしい。通じては時間制度に於て格別の打撃もないやうだ、何となれば工場法但書の寛容さ加減が甚だしいものだから俄に狼狽するほどのことは毫もない。年齢問題も同様、但書の恩典で助かつて居る。或る工業家は益暫らく日本の工場制は「但書時代」だと

云つて居るが正しくその通りである。稍堪えたと思はれるのは扶助料強制と書式手續の面倒と云ふことらしい。

亂暴の工場になると指の二三本位落したのには負傷の部に入れて居なかつた。腕一本足一本落ちたと云ふ時初めて怪我の價値を認められたものだ。寧ろ少し位の負傷のない者は巾が利かない位の者であつたが法の適用後はそんな大膽な態度を許さない。負傷、疾病、死亡等に關する扶助の制定は最も嚴格になつて來た。職務のための病なら療養費の負擔と休職中の手當を免れることは出来ない、死亡に對する一時賜金も同様、それが爲めに病人や怪我人を澤山出すと會社が破産すると云ふ騒ぎにも爲る。手續の面倒とは監督官廳への報告書等であるが戦時に藉口して色々な違反を試むる者もあり、中には全く法の精神を知らずに違反するものもある。

労働争奪

大戦が我が事業界に及ぼした影響は異常なものであると同時に、當然之に伴つて甚だしく我が労働社會を動かして居る。鑛業、造船、製鐵等に屬する事業の擴張に多數の労働者を必要とするは勿論、化學工業其の他新しき計畫に屬する事業にも夫々相當の労働力を要求しつゝあるから、労働供給が大體に於て不足を告げて居ることは争はれない。新事業を抜きにして、既設工業會社の要求する労働力丈でも、既に不足を懸へつゝある場合、労働準備の皆無な新工場へ一時に多數の労働者を吸収しようとする有様だから、如何に募集運動を猛烈にやつても却々集め切れる筈がない、各地方の人を派して労働新兵を募るには何れも手を盡して居るが、豫期の半にも達し得られないので、早くも朝鮮方面まで手を延ばして居る向もある。

朝鮮労働者の移入はまだ僅少なものはあるけれども、追々募集運動が盛になるかも知れない。是れに二つの疑問がある。彼の懶惰に慣れた無智の労働者が文明的施設の大工場へ入つて仕事の間に合ふか何うかが第一の問題だ。次には勞銀の極く廉い朝

鮮人が續々這入つて来て、内地労働者の賃率を低下せしめるやうなことがありはせぬか。米國労働者は亞細亞から廉い労働者の侵入したことに據り非常な影響を受けた。兎も角も新募集方針だけでは矢張り及ばない、應募者は皆地方に在る譯だが、産業勃興の波動は單り都會地のみには止まらずして、地方も地方相當に動いて居るから、平年の如くに徒食する青年などは極めて尠ない。現に各地方官に於ても、管内労働力の減殺を懸念して労働者引止策を講じて居る程だから、工業家は彌以て労働饑饉を嘆せざるを得ないのである。其處で最後の手段は他の工場から奪取するの一法あるのみだが、同業は皆同感でお互に警戒して居るから、誘引策も思ふやうには行かない。併しながら行つても行かなくてもベストを盡つて見る外に思案の餘地はないと云ふので中には窃に他の工場へ間課的労働者を就職せしめて置き、幾人かを説得して順次退職させ、自分の工場へ引つ張り込むと云ふ陰險な誘惑を試むるものもあつた。官公立工場から抜かれたものも尠くないとのこと。其他種々なる爭奪戦は行はれて居るが、此

の間課の任に當つた労働者の収入は夥しいものがある。

勞力饑饉の實狀は如上の通りであるが、日本よりも一層極端な饑饉に陥つてゐる佛國あたりから日本へ募集にやつて來たので、労働者爭奪は愈世界的と爲つた。六年九月中旬頃であつたが、佛國巴里の莫大小及襯衣製造に關する各工場の持主たる人で桑港シテイ、オウ、パリ織物會社の代表者ムーア氏が横濱へ來た目的は即ち夫れであつた。ムーア氏はグランドホテルに投宿し、横濱商業會議所へ日本労働者募集手續等に付照會を爲し、次いで本式に某方面へ交渉に及んだのである。ムーア氏の使命は主として莫大小及襯衣類の製造に要する職工募集であるが、他にも何んな消息を齎して居たか知れない。之より先き、佛國では支那南方地方に大々的募集を試み、約二萬の労働者を拉し去つた事實もあり、旁東洋から各種の職工を需めんとするものゝ如く見ゆ。

日本の工業界が未曾有の活躍を呈すると同時に各種工場を通じて労働饑饉を懸へつ

ある場合殊に紡績織物界は多数の労働者を要する性質の工業である丈、それ丈大饑饉の難を痛切に感じて居る。

獨り紡績界に止まらず、鑛山、鐵工界、造船所等何れも同様に厄に遭つて居るので相互爭奪が可なり激烈に行はれ、殊に關東と關西の間に最も皮肉な誘拐戦がある。其處で例の朝鮮労働者の殺到と爲つた譯であるが、今、六年十月頃の調査に依ると、總數一萬五六千位は移入したらしい。主なる工場を擧ぐれば三井、三菱を初め東洋紡績、福島紡績、富士製糸、中國製鐵、神代炭坑、門司鐵道院仲仕、因島鐵工、大里硝子、龜山炭坑、大日本鑛業、播摩造船、尼崎岸本製釘所等で、尙朝鮮總督府へ募集認可申請中のものも尠くない。

朝鮮の人口は約一千五百萬でその中一千萬人以上は労働に従事する者であるから、數量の上から云へば大抵の不足は補ひ得る譯であるが、労働者の氣風、能率等の上から仔細に見ると生産業者に取つては餘り有利なものではない。而も一方總督府當局に

ては此の過渡期に於て朝鮮人を多數内地に移す結果、或は内地労働者の侮辱を受け、或は虛榮心の増長などあつて同化策の上困難を招くことなきかを懸念し、朝鮮労働者雇傭契約に對して頗る面倒な條件を附して居る。

兎も角施設工場に對する需給關係だけでも如上の通りであるから、頻りに創立される新設會社の各工場が完成する曉には労働者供給難が一入甚しきものあるに違ひない。

工業地衛生問題

概して云へば東京市内及郡部の工業地は殆んど衛生上有害地に屬してゐる、工場法第十三條には「行政官廳は命令の定むる所に依り工場及附屬建物並に設備が……衛生を害する虞ありと認むる時は豫防又は除害の爲め必要な事項を工場主に命じ必要と認むる時は其の全部又は一部の使用を停止することを得」とあるけれども、本所、深川及郡部濕地に散在せる工場の多くは少く雨が降れば工場の周圍が潮水の如く爲り

僅かの隙でもあれば建物の中へ浸入し、下水の氾濫と相俟つて臭鼻を衝くと云ふのが常態である。

雨降りの遠い季節でも湿氣と臭氣は免かれぬ。然らば鏡紡が墨堤と同じ高さに工場敷地を高めた如くに、各工場を悉く水難線以上に土を盛り上げたならばと云ふことになるが、這是事實行ひ難き處墨堤附近ならば兎も角も輪戸、砂村方面には殆ど不可能な相談である。故に若し工場法の精神を嚴酷に厲行する段になれば數千の工場を悉く山の手へ移轉させるより外に致し方がない。但、這是水難を豫想しての話であるが、平常に於ても工場附近下水の停滞は到底堪へ難き處で、呼吸を不愉快ならしむるのみならず、各種の微菌を酸酵するに最も適して居ると云ふ状態であるから傳染病の流行も必ず此方面に始まる。然らば如何にして工業地の衛生を改善すべきかと云ふに、各工業主の側に於ては既に其の地に於て爲し得る丈の設備は何れもして居るし、又一般附近の住民に對する衛生上の自覺と云ふことに付ても警察側から随分八釜敷督

勵して居るが不衛生の最大原因は彼ら下水道であるから此の點に最も力を注がねばならぬ。東京市に文明的下水道を作る爲めには粗末なものでも五六千萬圓立派にすれば一億圓以上の仕事に爲ると云ふ大問題であるから、速かに之を作れと云ふことは出来ぬ。來ない相談であるが、尠くもドブ泥溝の整理と手入位は今少し何とか爲りさうなものである。

工業教育一班

工業社會で第一流の權威者たる某博士は曾て斯んなことを云つた。「日本の工業は歐米のそれと比較することが出来ない。歐米では實地と學理を並進させて居るものである。工業従事員は皆精兵であるが日本では學理と實地の調節が取れて居ないから、謂はゞ烏合の衆だ」と。工業従事員とは工業主も工場主も技術員も職工も通じての意味もあり、亦主として職工を指す場合もあるやうだが、兎も角烏合の衆では甚だ困る。又

第一流の工業家某は工業補習教育の奨励に對して『補習教育を受けさせると労働者が生意氣に爲つて来て、労働を忌み、口や筆で飯を食ふことを考へるやうに爲るから却て工業家の爲に仇と爲る』と云つた。以上は孰れも二三年前の感想であるから今日の工業界に其儘適用する積りではあるまいが今も尙某博士の如き批評を試むる人が尠くはない。又某工業家の如き杞憂を持つてゐるものもあるやうだ。

此の批評と此杞憂が存在する限り、日本の工業は順調に進歩することが出来ない。扱然らば最近の工業界を最も公平に觀察して、何の邊まで自覺してゐるか云ふならば、是も此程度に達したと云ふ標準は固より示し難いが今、掻い摘んで其の一斑を窺つて見やう。高等工業學校の問題は主として政府の方寸に係るものであるから斯に喫緊することを要しないが、唯工業家側では高工出身者の頭数が少くて困つてゐると云ふ事實はある。一番不逼的に時代が要求してゐるのは中級の工業學校及下級補習教育の方であるが、此は工業家の自覺に俟つ處最も多いので、當業者側で無頓着にして居

れば、何時になつても工業教育は進まない。大正四年であつたが、北海道に一番缺けて居るものは技術であるからと云ふので、札幌に甲種工業學校設立を道會が建議し、當局亦之を可として愈建設の議に上るや、在道鐵業家連から建設費一切を寄附すると云ふ申出があり、忽ち話は纏まつた。東京でも市立工業學校が無いので、諸工場主から六年秋甲種工業學校設立の請願書を提出した。以前は教育ある職工の増えるのを警戒して居た工業家が進んで此舉に出づるは面白い。川崎造船所の如きは職工に學資を給して補習學校へ通學させてゐる。而して首尾よく卒業して職工には相當に増給することに爲つてゐる。神戸の實業學校には奨學基金法があり、同時に故川崎正藏氏より一萬九千圓、故澤野定七氏より三千圓、故兼松房次郎氏より六千圓等何れも其遺言に依りて寄附した事實もあり、旁補習教育が頗る盛んに爲つた。長野縣製糸家連も女工の養成に腐心して居る。縣下を通じて約八萬の女工が要り、内一割づつ退職すること年々八千人の補充を講せねばならぬ譯であるが無教育の烏合の衆では工業能率が低くて

困ると云ふで一般に教育の必要を感じて居ると。東京府立職工學校には適材部なるものを設けた。府下各工場からの希望に應じ、職工中の秀才を抜擢して技能を精練せしむるものである。又近頃の新現象として、補習學校通學中の生徒で三十歳以上がザラに在り、四十歳以上のものさへも尠くないことである。五六百人以上の職工を使ふ工場には往々にして工場内に教育設備をして居る處もあるが多くは幼年工の補充教育で義務的のものである。積極的に技術の向上を目的とするものは極めて尠いのである。又一會社から數名づつ海外へ技術練習生を送つて居る處もあるが、それも頗る尠い。大會社には又研究所とか試験所とか云ふものがあつて年々莫大の經費を投じて居るけれども、此は製品の改良で教育機關ではない。同時に官公立試験所へ巨額の寄附を爲す者もあるが何故か一般工業教育の爲めに成金連から寄附金の續出しないのは遺憾千萬である。

第二編 新事業類別

一、製鐵界及鐵工業

製鐵界趨勢

相對峙しつゝある聯合、同盟兩軍の背後にある鐵の勢力並に此間に於ける米國の地位如何と云ふに戰前の統計に基いて總産額を見れば、米國が年額三千萬噸、獨逸二千萬噸、英國一千二百萬噸、佛國四百萬噸、露國も四百萬噸、埃匈國二百萬噸、白耳義二百萬噸即ち米國は世界に冠絶して居り、之を除いた他の兩軍を對比すれば恰も匹敵せる鐵の勢力を持つてゐることが分る。鐵は戰爭に對して最も重大な勢力を有して居るものであるから兩軍の鐵が相半ばして居れば大戰の長延くのも當然と思はれるが米國てふ無比の鐵國が一方に荷擔した以上、此の意味に於て勝敗の決は定まつて居る

と云ふべきか。更に之を百年來の能率増進の程度を見るならば、千八百七七年に米國は二萬四千噸、獨逸は三萬五千噸、英國二十五萬噸、佛國二十二萬五千噸、露國八萬四千噸、埃國五萬噸で、千九百七年には米國二十六萬噸、獨逸一千三百萬噸、英國一千萬噸、佛國三百萬噸、露國二百八十萬噸、埃國百八十萬噸、即ち百年前には英、佛が卓絶して米、獨は最下位にあつたものだが、最近には全く顛倒して米、獨が遙かに優越してゐる。

然らば日本の製鐵界は如何なる状態にあるかと云ふに、勿論百年前の工業は問題に爲らないが、最近の創業から産出する鐵としては銑鐵四十萬噸以上、鋼材五十萬噸以上の産額必ずしも少量とは云はれない。寧ろ進歩の過程から云へば極めて急進的であるかも知れない。時局以來製鐵業は俄然勃興して、大小無數の新設工場も出來、既設官營製鐵所及輪西、釜石兩製鐵所も大擴張を爲し、需要界の激増に應せんとして居るが尙自給の域には達し得られない。需要は年々増加する一方であるから供給も之に

伴つて充分豊富ならざるを得ない譯であるが、他の生産業とは違つて製鐵業の設備は大規模なるを要し、据付機械も大仕掛のもので多く輸入品に俟つと云ふ性質のものであるから、事業の新畫は容易であつても愈々之を具體的のものゝ爲す迄は相當の歳月を要する。随つて製鐵業勃興の聲を聞いてから、それを産額統計の上に認むるまで却々待ち遠しいものである。現に時局に入つて間もなく計畫された製鐵業から大正六年度迄に製出された産額は殆ど云ふに足らぬものであり、七年度に於ても尙僅少の増加に過ぎざるべく、八年以降始めて豫定の生産を見込まると云ふ次第である。

因みに新規計畫に屬する鋼材製造所中大正八年度産額想定噸數として傳へられて居る處は左の如くである。尤も事業界の推移に伴れて此の想定は如何様に變轉することあるやも測り難しと知るべし。

製 鋼 所

大正八年産額想定噸數

○三菱神戸造船所(鑄鋼品)

三〇、〇〇〇以上

○山本氏等鑄鋼會社(同)

二〇、〇〇〇

製鐵界及鐵工業

- 大阪製鐵株式會社(鋼材) 二〇、〇〇〇
- 岸本製鐵所(鋼塊) 三五、〇〇〇
- 伊藤鋼鐵研究所(同) 一〇、〇〇〇
- 日東製鋼株式會社(同) 一〇、〇〇〇
- 東京鋼材株式會社(鋼材) 一六、〇〇〇
- 浦賀船渠株式會社(同) 一五、〇〇〇
- 安川氏九州製鋼所(同) 不 明
- 淺野製鋼所(同) 五〇、〇〇〇
- 東海鋼業株式會社(同) 三〇、〇〇〇
- 滿鐵鞍山站製鐵所(同) 一五、〇〇〇
- 株式會社日本電氣製鋼所(同) 七〇、〇〇〇
- 王子電氣製鐵所(同) 不 明
- 藤田組廣田製鐵所(合金鐵) 一〇、〇〇〇
- 藤田組廣田製鐵所(合金鋼) 二〇、〇〇〇
- 土橋電氣製鋼所(高速度鋼) 一〇〇〇以上

- 日本特種鋼合資會社(鋼塊) 二〇、〇〇〇
- 大阪製鋼會社(鋼材) 不 明
- 日本鑄鋼所(鑄鋼品) 不 明
- 高田商會電陽社 不 明
- 日本鋼鐵株式會社(鋼材) 五〇〇
- 富士製鋼株式會社(特種鋼) 三五、〇〇〇
- 安田製鋼所(鋼材) 八〇、〇〇〇
- 東洋製鐵株式會社(同) 七五、〇〇〇

日 支 製 鐵 提 携 (工學博士今泉嘉一氏述)

製鐵設立好機 先づ日本の立場から言へば今日我日本は米國鐵輸出禁止の結果最終の鐵供給者を失つた譯では是が爲に内地の需要に對して甚しく鐵の缺乏を感じるに至つた。恰も鐵饑饉の有様に遭遇して朝野とも是が爲に非常に痛心して居る次第である。是は誠に困つた問題であるが併し日本製鐵事業の利益から言ふと今日は寧ろ將來の爲

に其發展を劃策すべき好機會である。

製鐵業二問題 處が茲に日本の將來に向つて二つの重大なる問題がある。其第一は鐵鑛の缺乏を如何にするや。第二には製鐵用石炭の缺乏を如何にするかと言ふのである。此二大問題を解決しない限りは日本の將來の製鐵事業は殆ど完全に發達する見込が立たない。其結果來るべき恐慌と云ふものは決して今日の恐慌の如き一時的の性質のものでなくて恐るべき程度のものであらうと思ふ。

鐵鑛分布狀態 今日本の事を論ずる前に廣く世界の事を申すと今日迄世界に知れ亘つて居る處の鐵鑛の分布の有様は英國に十三億噸、獨逸に三十六億噸、佛國に三十三億噸、瑞典に十二億噸、諾威に四億噸、埃匈國に三億噸、露國に九億噸、西班牙に七億噸、其他諸國に三億噸あつて歐羅巴の合計が百二十億噸である。夫れから米國では合衆國が四十三億噸、其他の諸國を合して五十六億噸、又亞米利加南北兩大陸に九十九億噸、亞細亞は全體で三億噸、濠洲は一億噸、阿弗利加が一億噸で全世界の合計で

二百二十四億噸になるのである。此數量は地質學者が略安全に近い鑛量として測定したものであつて、此他に尙疑問鑛量が千二百三十四億噸計りある。是等を合すると千四百五十八億噸に達し是等の鑛石中より六百四十三億噸の鐵を得ることが出来る。鐵鑛壽命百年 然るに今日では全世界に於て毎年八千萬噸宛の鐵を造つて消費して行くのであるから此勢ひを以て今後消費したならば今後約八百年は繼續し得るが全世界に於ける消費量と云ふものは決して一定の處に止まつては居ない。毎年増加して行くのである。其増加の割合は百年前に於て全世界の鐵消費量が一箇年八十萬噸であつたのが、百年後の今日では百倍になり八千萬噸に達して居る。然うして見ると百年に就て消費力と云ふものが百倍になつて居る有様であるから今後百年二百年も續いて行くと云ふ事になれば却々八百年を待たないで其以前に消費し盡す譯である。即ち今より四十三年後の來るべき千九百六十年には世界の鐵の消費量が一箇年に六億噸になつて而して其時は既に安全鑛量と云ふものは皆使はれて終つて更に千九百九十年に

なると一箇年の消費量が二十五億噸になつて其疑問 鐵量までも皆使つて終ふのである。然うすれば今日世界に知れ亘つて居るだけの鐵鑛と云ふものは今世紀の間に皆使つて終ふと云ふ勘定になるのである。

將來の緩和劑 若し果して然うなれば是れば世界人類の共通の大問題であつて、是に對して人智を絞つて應急策を講せなければならぬのである。誠に大問題であるが併し夫れに對しては他に種々な關係がある故に大に是を緩和する必要がある。斯くの如く事情が切迫して居る譯であるが今一例を擧げて申せば第一、今日迄知れ亘つて居る鐵量が前記の數字でも分る通り歐羅巴や米國に非常に多くて其他の亞細亞とか濠洲とかには言ふに足らない少量しか無いのであるが是は強ち歐羅巴に多くて其他の國に少いと云ふ譯ではない。まだ十分に地質の調査が届かない爲で歐羅巴は非常に地質調査が克く届いて居る。米國は先づ二分の一位届いて居る。其他の國々に至つては亞細亞とか濠洲とかにあつては其面積の百分の一乃至百分の二位しか調査が出来て居ない

故に地球の面積の中で四分の一だけが地質調査が出来て居つて四分の三と云ふものは未だ調査未了である。であるから今後地質調査の進むに従つて段々と鐵鑛を發見して來ることにならうと思ふ。

鐵鑛偶然發見 第二には既に鐵鑛の調査の完了した處と稱しても尙偶然に鐵鑛の新に發見される事が決して稀でない。例へば五十年前に獨逸のバイエルン州（バイリヤ州）に於て發見した褐鐵鑛の大鑛床の如きは全く偶然の發見であつて是等は精しく探鑛して見た處が十七億噸の鐵量を有つて居ることが解つた。夫れから北米のメサビ地方の鐵鑛は是は千八百九十年の發見であつて今日では一箇年に三千萬噸の鐵鑛を産出して居る。又英國のクリーブランドの鐵鑛は千八百四十五年の發見に懸つて其鐵量が三十億噸程あるのである。尙瑞典のキルナワラは千八百九十九年の發見で其鐵量は八億噸と稱せられて居る、而して今年々二百萬噸以上を採掘して居る。

日本に於る實例 更にまた我國の範圍に就いて見ると、朝鮮の鐵鑛の如きは今日一

年間二十萬噸の鐵鑛を出して居る、夫れが何うかと云ふと約十年ばかり前に發見されたのだと云つても宜いのである。また釜石の鐵山の如きも明治十五六年頃に我政府は鑛石は既に掘り盡したと云つて事業を中止したのが今日では少くとも三萬噸の鑛量ありと稱せられて居る。此外滿洲唐兒溝、鞍山店の鐵鑛の如きも皆最近の偶然發見と稱して居る。斯う言ふ風に新しいものがドン／＼出來て來る。尙貧鐵鑛或は不純鐵鑛と云ふものが段々學術の進歩に従つて今まで使へなかつたものが使へるやうになつて來同時に古鐵が循環して來る。

古鐵の循環 即ち一遍鐵が或る仕事を爲して機械其他に使はれた更後に夫れが古鐵となつて再び市場に現れて而して製鐵の原料になつて來る。斯う言ふものが尠くない。例へば獨逸の如き米國の如き、今日却々多量の古鐵が出て來て夫れが新しい鐵の原料になつて來る。獨逸の如きは今日年々五百萬噸にも達する古鐵が出て居る。我日本でさへも今や毎年十萬噸以上の古鐵が市場に現れて居るのである。次に鐵の節約と

云ふことであるが右の如く鐵が段々容易に得られないものになると鐵を儉約して他の物を以て是を間に合はせやうと云ふ。例へば鐵筋コンクリートと云ふが如きものを大いに使ふ事になるであらう。斯の如く鐵の壽命を延べると云ふことになつたならば世界の鐵の壽命と云ふものは著しく延ばす事が出来るのである。

鐵消費數量 抑も近年の鐵の消費量と云ふものは幾らに成つたら可いかと云ふと先づ文明國人の其國勢を維持して往々に必要なる鐵の量と云ふものは大概一定の度がある。今日迄の狀況に據ると先づ英國は一人に付一箇年二百五十基瓦の鐵を消費して居る。獨逸も亦二百五十基瓦に達し米國は夫れよりも少し多いのであるが米國は今申す通り國が大きくて鐵道を敷設したり何んかする分が多いのの一つは其製鐵原料の鐵石と石炭が豊富であるから自然多量に使ふと云ふ有様であるが大體文明國人が一箇年一人前の消費量と云ふものは略一定の度があらうと思ふ。決して過去の百年が恰度百倍になつたと云つて今後其勢ひを以て進む譯のものではなからうと思ふ。

我壽命尙長し、即ち過去の百年間は非常な文明の進歩した期間であつて此間に於てはジェームスワットの蒸汽機關の發明であるとか、ジョージスチヴンソンの鐵道の發明であるとか、ヴェニスマーヤ或はシーメンスマルチン等の製鋼法の發明とか或は電氣の大發明とか其他種々の發明に依り鐵を造ると云ふ仕事も總てに大仕掛に行ふ事が出来るやうになつたので、また使ふ方も鐵道とか機械等に非常に多量の鐵を使ふ事が殖ゑて來た譯であるが、其以前の百年と云ふものを段々遡つて考へて見ると毎年の進歩と云ふものは左様現れて居ないので僅三割とか四割とか或は三倍とか五倍であつた。然るに急に過去の百年に於て百倍になつたからと云つて是を以て後來を言ふ譯には不可ない。世界の鐵鑛の壽命と云ふものは此計算より以上に延びる事が出来るであらう。決して百年か二百年で無くならうとは思はれない。

日本鐵鑛狀態 是は先づ世界一般の事であり且隨分先の問題であるから今暫く是を論ずる事を止めて我々が爰に言ひたいと云ふのは先づ日本の有様である。日本は何

うであるかと云ふと、我日本の鐵鑛は今日まで知れ渡つて居るのは日本内地に於て約六千萬噸朝鮮に五千萬噸合計一億一千万噸あるが、この一億一千万噸に對し今日日本が必要とする處の鐵の量は百五十萬噸であるから是を全部日本で造ると云ふには三百萬噸の鑛石が要る。然うすると此の一億噸の鑛石は今後三十七年で消費されて終ふ。而して日本は鐵の使用方が非常に進歩する國であつて是が十年毎に二倍或は二倍半になつて來る。即ち大正六年において百五十萬噸と云ふ一箇年の消費量が、大正十六年になれば三百萬噸乃至四百萬噸に達するのである。然う云ふ割合を以て殖ゑて往くとしたならば今日まで知れて居る處の鐵鑛量では二十年餘で無くなつて終ふのである。日本石炭運命 石炭の方は何うであるかと云ふと、是れは鐵鑛から鉄鐵一噸を造るには二噸の石炭を要する。夫れから鋼材一噸を造るのには更に石炭二噸を加へて四噸を要するのである。今日日本が先づ百五十萬噸の鉄鐵を造るとして其中百萬噸を鋼材に加工するとせば石炭の消費量は鑛石から百五十萬噸の鉄鐵を造るのに三百萬噸の石炭

を費し其中百萬噸だけを鋼材に向けるとして二百萬噸合計五百萬噸の炭を要するのである。處で日本内地の石炭の埋藏量は八十億萬噸と稱せられて居る。目下年々工業なり其の他種々の方面に要する石炭が一箇年に二千三百萬噸宛に上り其上に更に製鐵用として五百萬噸宛の石炭を増して採掘して行くこと云ふ事になると夫れだけでも既に三十箇年は持たないのである。況や各種工業用の石炭の量と云ふものは毎年殖えて行くのである。また製鐵に使ふ石炭も前述した通り製鐵事業が益々進む爲に段々と殖えて行くのであるから夫れ等の事を計算すると日本の石炭の壽命と云ふものも亦二十年前後に終るであらう。

我製鐵業難關 斯う云ふ有様であつては是は誠に重大なる問題で、目下世間一般に唱へて居る處の「日本の鐵で以て自ら給し自ら足る所謂自給自足」と斯う言ふ壽命の短い自給自足と云ふ事は誠に心細い次第である。殊に茲に注意しなければならぬのは鑛石から銑鐵を造る處の石炭であるが是れは普通の石炭では不可ない。骸炭用石炭を

使はなければならぬ。此の骸炭用の石炭は日本には誠に少いのであるから此困難が一層大きくなつて來るのである。

斯業救済方法 然う言ふ風に壽命の短い製鐵事業では心細い。が是を救ふの策としてはないではない。即ち第一には尙十分に調査して鐵鑛の存在を發見する事で、是を調べたならば未だ日本の範圍内に於て必ずや今日以上多量のものがあると思はれる。第二には今日まで鐵鑛と見做して居らなかつた處の鑛石例へば硫化鐵鑛の如きを大に使用すること云ふ事になれば是れ亦多大の鑛量を増す事が出来る。第三には運搬の道路を開鑿して山の中の鐵鑛を容易く運搬する事の出来るやうにしたならば今日の日本全國に於ける無数の鐵工場と云ふものが競つて材料の發見に努め其中には大きなものも段々發見されるやうになるであらう。夫れから鐵道の運賃等を輕減して鐵鑛の搬出を助けたり或は小軌道輕便軌道又は空中鐵索と云ふ風なものを保護獎勵して山間僻地にある處の鐵鑛の採掘を助けると云ふことにしたら一層鐵鑛の新發見と云ふ事が出来る

て来るだらう。第四には石炭の如きは一方に於て深坑採掘を益々旺んにするやうにして一方に於て石炭の濫用を防ぎ種々學術を應用して石炭の經濟節約と云ふことを努めると云ふ事にしたら好からう。而して尙一層石炭の發見に努め同時に骸炭用炭の如きは十分是を保護し今迄の如く普通石炭同様には是を濫用すると云ふ事を防ぎ製鐵用石炭は他の方面には使はないと云ふやうに保護獎勵を加へなければならぬ。

水力電氣利用 今一つ重大なる要件は水力電氣と云ふものを大に應用しなければならぬ。此の水力電氣を旺んに製鐵に應用する事にしたならば日本の石炭消費と云ふことが著しく減することになる。日本には今迄の調査に據ると水力電氣を起し得べき水力は約四百萬馬力有が尙十分に調査したならば或は五百萬馬力に達する事が出来ること云ふ事である。今若し此の四百萬馬力の半分だけを製鐵に使用する事が出来たらば一箇年に六百萬噸の鐵と云ふものを造る事が出来る。而して勿論其場合に石炭を多少は使用するけれど其量は普通骸炭銑鐵を造る場合に比して三分の一で済むのである。

であるから歐羅巴全體で水力の使へるものが四千萬馬力であると云ふのに日本一ヶ國で斯かる多量の水力を有つて居ると云ふことは日本の天恵である。是れだけの天恵を有する日本に於て今後大に水力電氣製鐵事業と云ふものを旺んにして行くのも大切な事であらうと思ふ。

關稅保護必要 尙第一政策として關稅を以て外國品の壓迫を防いで十分に内地の製鐵事業を保護獎勵をする事と云ふ事で今の歐米各國の今日製鐵國と云はれる國が今日の盛大を來したのは皆此の關稅政策に依つたものである。故に何うしても是は關稅政策と云ふものを以て日本の製鐵事業を保護しなければならぬ。夫れに就ては長い意見を有つて居りますけれども夫れは今此所では到底述べ盡せない。此關稅政策と云ふ物に就ては製鐵事業は何うしても是に依らなければならぬと云ふ事は世界の製鐵歴史と云ふものが是を證明して居るのであつて、今は保護政策が宜いか自由政策が宜いかと云ふ議論を戦はして居る場合でない。世界の實例に徴して確に有効なものであると云ふ

事を云ふだけの事實がある。

原料を海外に求めよ、要するに斯う云ふ風な内に向つての處置に依つて救済する道も多々あるだらうけれども、益々發展して行く處の日本の將來に對する製鐵事業としては他に大に採らなければならぬ道がある。即ち第一には大に海外の原料を使ふこと云ふ事即ち亞細亞の東部或は南洋諸島に散在して居る處の製鐵原料即ち鐵鑛や石炭山と云ふものが却々尠からぬ數量のものであつて是等は夫れを所有して居る國自身に於て製鐵事業を營まうとする場合には今日の日本以上の困難が伴つて居るのであるから今以て何れも開拓利用の法が行はれて居ないのである。其狀況たるや恰も日本の需要を待つて居る姿である。日本が是等の物質を大に利用しなければならぬ立場にあるのである。恰も歐羅巴に於ける西班牙及瑞典の如く其國に鐵鑛が十分あつても夫れは皆附近の製鐵國たる獨逸とか或は英國更に少し離れては米國に供給をするだけに止まつて居るのである。斯う言ふ風な立場に在る日本は何うしても是を完全に使用して行く

のは相互の爲である。

支那開發の急務、然う云ふ目的を以て進んで行く爲め政策としては大に海外の原料を使用する事を奨励する事になければならぬ。例へば海外から製鐵原料を運ぶ場合に其運賃に對して相當の保護を與ふるか或は政府自ら海外の製鐵原料を調査して是を我國の事業に充てしむるには如何したら宜しいか各國の工業法規とか或は國際關係或は運賃關係等を十分に調査して内地人の便利を圖る事になければならぬ。其處で其東洋方面に於ける諸外國の中で今差當り最も有力なる原料供給地と云ふべきは支那であらうと思ふ。

日支提携問題、其支那と云ふ國は今日未だ地質調査が完全に調つて居ぬけれども今日歐米人或は日本人の調査した處に依ると國相當の鐵量をもつて居るやうである。寧ろ其量たるや國が大きいだけに世界で最も優勢なる天惠國と云はれて居るのである。然るに支那自身は是を開拓する事が出来ない、夫れだけの天惠を有つて居ながら今日

四億萬の支那人は窮乏に泣いて居ると云ふ譯である。夫れで是れを大に利用すると云ふことは支那人の利益にもなる事であらう。茲に於てか私は支那と日本と此の製鐵事業と云ふものに對して十分に提携をなし支那人は其天與の富源を提供し日本人は其資本技術並に經營の勞を提供して茲に製鐵事業と云ふものを旺に營む事が出来たならば兩者の爲に大なる幸福であらうと思ふ。

提携の眞面目、一體支那で何か仕事をしやうと云ふ事になると直ち世間の人は利權獲得とか何とか是を政治問題に解釋する傾きがあるが此製鐵提携の如きは純然たる一の商賣上の仕事であつて敢て他の國の容喙すべき處でない。勿論何れの國の人が支那で事業を起すも差支ないが、歐米人が支那で製鐵事業をなすと云ふ事は單に支那で金儲けをしやうと云ふに過ぎないのである。併し日本人は是に反して國家の存立に必要ありと云はれる位の大切なる製鐵事業の獨立をなす爲に必要なる手段である。單に一片の金儲事業と云ふのではない。且支那が財政甚だ振はぬので政治其他百般の事業

に勢力行届かず又其國の文明と云ふものも依然として進む事が出来ないのである。其結果種々な出來事の爲に迷惑を蒙るのは何人であるかと云ふと地理上歴史上また人種上商賣上最も深き關係を有して居る處の我日本が一番迷惑をするのである。日本は支那を開拓して支那の爲に文明に導くと云ふ事は是は日本の天職であるのである。また日本が其國の獨立の爲に必要な手段として大に支那人と提携をして往くと云ふことは日本の權利でもある。夫れで詰り此の支那との製鐵提携と云ふ事は日本の當然なる權利といふ意味なのである。

支那の爲に必要、或ひは支那人は然う云ふと自分の國は多量の製鐵原料を有して居る特別な天惠國であると考へて寧ろ是を後世に保存して行くと云ふ風な考へを有つて或は鎖國的手段を採らんと限らないのである。今日でも既に外國人に對して鐵鑛の採掘取締りをして居る向もあると云ふことであるが、是は大なる間違ひである。支那自らが是等の富源を開拓して十分に使つて往く事の出来るのは恐らく容易な事ではあ

るまいと思ふ。ありとすれば今後何十年或は何百年の後であらうと思ふ。然うすると支那は到底夫れまで此の天恵を豫想通り保ち得るか何うかは疑問である。世界の大勢が支那人自ら開拓し得る迄夫れを待つて居るか、恐らくは支那が然う云ふ鎖國主義を採つて行つたならば是等の天恵物は支那人自ら開拓し得る前に既に歐米人の壟斷する處となつて終ひはしないかと思ふ。支那の爲に圖るも一日も早く日本と提携して夫れ等の富源を開拓して往くと云ふ事が必要なる手段であるであらうと思ふ。

日支親善の實 一體支那と云ふ國は随分大きな國で其大きな國に内地に於て散在して居る鐵鑛や石炭は是を一括りに纏めて相聯絡を取つて此製鐵事業の爲にするに云ふ事は今後鐵道敷設とか其他の點に於てまだ却々の大事業を要するので、縦し日本が是と提携したからと云つて急に是等の物を悉く使つて往くと云ふことは出来ないのである。併し幸に今日まで知れ亘つて居る處の大きなものは或は揚子江の沿岸であるとか或は福建であるとか或は廣東であるとか或は山東直隸省とか主に海岸の便利な

地に多いのであるからして日本として是を利用すると云ふことは最も容易である。それでまた今日日本及支那の政治家が著りに日支親善と云ふことを唱へて居るが、其日支親善の策として何う云ふことを皆考へて居るのか明瞭でないけれども、私の考へには此の製鐵提携の如き方法を以て夫れに關係して居る處の日本人及支那人が事業上盛んに利益を上げて往くことが出来たならば即ち協同利益の仕事をして行つたならば此位の日支親善の爲に良い方法はなからうと思ふ。

戦後經營一端 今日世界の大戰に際して歐羅巴或は米國其他各交戰國が旺んに戦後の經營をなして居り殊に獨逸等は戦後大發展の爲に非常なる商賣上の計畫をして居ると云ふ事は明かなる事實である。故に是に對して我東洋にても大に備へる處がなくはならぬのである。然るに日本も支那も東洋に於て各獨立的に完全なる製鐵事業を經營する事が出来ないで互に不便を感じて手を束ねて徒らに成行に任せて行つたならば是は兩國の爲に甚しき不覺と云はなければならぬ。故に今日は兩國の爲に日支

製鐵提携と云ふことは大に考究すべき最善の機會であらうと思ふ。(大毎)

和鐵の發明

藥學博士平山松治氏の發明に係る「和鐵」はそも何んなものかと云ふに、一言にして云へば土から鐵を製出する方法である。普通の鐵鑛を原料とせずして鐵分を含める黄赤土から製鐵を試みるの謂ひである。博士の説明する處に依れば(一)品質は堅緻強靱にして普通鐵よりも稍々輕き純良鋼鐵及銑鐵を得。(二)原料包藏量は帝國內に於て殆ど無盡藏に在る。(三)製造方法は酸化鐵質黄赤土に化學物藥品を混和し、電氣爐にて溶解す。(四)製造費は銑鐵一噸に付二十圓内外。(五)製造設備は器械簡單にして外國品を要せず。等の特徴を有し、火山脈に當れる邦土には到る處酸化鐵質の黄赤土あつて、良質のものは純酸化鐵で九十三パーセントの含鐵分がある。而して既に發見したる鑛區面積だけでも十億噸以上の原料があり、實驗上九十三パーセント含有原料

より六十餘パーセントの鐵を造り得たるが故に、平均五十パーセントと見るも、十億噸の原料に對し五億噸の鐵を得べく、一ケ年二百五十萬噸を製鐵すと假定するも尙二百年間は原料の不足を感せぬと云ふ。且つ製鐵費が極めて低廉なる故、優に世界の市場に雄飛することが出来ること。

戦後製鐵業の運命

自給の必要に促されて俄然勃興した製鐵事業は戦後何う云ふ運命を味はうであらうかの問題に付斯界の代表的學者たる某博士の語る處を擧げ摘んで申せば這んな事に爲る。戦後の觀察法は二様あつて列國の軍備補給其他工業復舊のため鐵の需要激増する結果、他國へ輸出し得る數量は案外尠くなる。それ故日本へ殺到して來る鐵材の供給力は高の知れたもので、爲に日本製の鐵業者を泣かせる様なことはないと思ふ。一つ。恰も反對に歐米工業の復活は敏速なもので、生産力の激進すると同時に、海外

より金貨を吸収する必要上薄利多賣でドシ／＼やつて来るから、日本の様な小規模の製鐵業は一氣に叩き潰されて仕舞ふかも知れないと云ふ悲觀論。兩説を暗喩させれば水掛論に終る外はないが、結局この中間を取るのが一番首肯に當るだらう。歐羅巴はさておき米國は却々心配になる。戰前三千萬噸しか生産しなかつた米國の鐵は時局に入つて四千萬噸になり、一千萬噸の生産増加を示してゐる譯であるが、その需要が自國よりも寧ろ他の交戰國向の方が多いと云ふのだから、戰爭が終熄して交戰國への輸出が減じて來ると、その餘つた分を日本へ振り向けて來ないとも限らない。果して斯様な事實が起るとなれば米鐵の小部分を以て戰ひを挑まれても我が製鐵界は一ト潰しになると云ふ心配、それを心配すれば際限のない話であるが、一體米國の製鐵事業てふものは從來極めて不規則な數字を示して居るもので、年産額に於て五百萬噸乃至一千萬噸の増減が屢々繰返されて居ると云ふ有様である。工業界の浪が大きいだけ他に及ぼす影響も突飛であり、不定である。

所謂ダンピング的商略で、縦横無盡に小さな市場を荒しに來ることを豫想すれば、日本に日本の製鐵業は風前の灯である譯だから、之に對しては當業者の方でも政府の方でも相當に考へておかねばならず、又考へれば此の強襲をも防遏し得るの策もあるに違ひないのである。先づ資本の分散して居るやつを纏めて防戰の準備を大きく構へることも必要であらう。各方面の工業を擴大して鐵材の消化力を豊富ならしめることも必要であらう。更に最後の一策としては保護政策を取るより外あるまい。即ち鐵の輸入税をウンと高くすることである。之に對しては無論利害の及ぶ處が大きいだけ八釜しい議論が勃發するには相違ないが、非常な場合に非常手段を用ゐるは生産業の發達のために已むを得ない處で現に英國の如き自由貿易の本家でさへも製鐵業の危機に際しては十割乃至二十割の輸入税を課したこともあり、或種の鐵材に對しては全然輸入禁止を斷行した程である。而して之を斷行した結果は異常な勢ひで製鐵業が進歩した云々。

製鐵業獎勵法要旨

大正六年九月一日より實施された製鐵業獎勵法の要旨に付農商務省參事官山内顯氏の説明せる處を摘録すれば左の如し。

- 一、製鐵所用地に對する土地收用法の適用
 - 二、營業稅所得稅及地方稅の免除
 - 三、製鐵業用器具機械其の他の材料に對する輸入稅免除
- の三項中(一)土地收用法の適用に付て先づ語る。抑々製鐵業の發達を促進せんと欲すれば、經營の基礎堅固なる上に立てる大規模の事業を獎勵せねばならぬ。大規模の事業は比較的廉價なる多量の原料を取扱ひ、操業上用水の必要も多く、製品の搬出關係等よりして他の工業に比し用地の限定せられ、面積も多き等の事情があるから、敷地の所得を自由の契約に委すると、不當價格の要求にも遭ひ、或は感情問題などから適

當の用地を得るに困難な場合を生じ、事業發展上の支障を爲すものもある。それ故大製鐵所用地に對しては土地收用法を適用するの途を開いたものである。土地收用法の適用を受くべき製鐵業の條件及適用の効果は大體下の如きものと爲る。一製鐵所の製鐵能力又は製鐵能力年三萬五千噸なること(法第一條第一項に)付て云ふならば、其の所謂大製鐵所なるもの、生産能力事業範圍に相當制限を置くの必要がある。當初政府案に於ては製鐵事業を基礎とするものに限り土地收用法の適用を認め、製鐵事業には及ばなかつたけれども、議會の修正により製鐵業の場合をも加ふること、爲つた。兩者の間自ら程度の差はあるも、製鐵事業のみに對しても收用法の適用あるは獎勵上効果尠くないであらう。三萬五千噸以上の製鐵能力又は製鐵能力とは、製鐵又は製鋼の何か一方のみにて三萬五千噸以上の意味で、兩者の合算を認むるのではない。歐米製鐵國の實況を見るに、小能力を製鐵所は鐵價低落の際操業上の困難甚だしく大正三年米國の鐵產額に著しき減退を見たる如きも又其の原因に依るもので、鐵自

給策上大能力の製鐵所は極めて必要な條件でなければならぬ。大製鐵所たるの標準噸數に付ては餘りに小額であるとの反對論もあるけれど、斯業の幼稚なる日本の國情に照しては寧ろ此の位が適當の方策である。又その標準能力は同一人の經營に屬するものと雖、二個所以上の分立せる製鐵所の能力の合計を見るべきものではない。「製鐵所に於て行ふ左の事業の爲必要なこと」(法第一條第二項 令第一條、規則第一條、銑鐵、鋼鐵、壓延鋼材、鑄鍛鋼製品の素材鑛滓綿鑛滓煉瓦其他施行規則第一條に列擧したる副生物の製造事業に付て云ふならば、茲に土地收用法を適用して特殊の保護を與ふる以上、その特典を受け得る場合に付て他の同業との間に公平の關係を考へねばならぬ。此の趣旨に基き施行令第一條及施行規則第一條は通常製鐵所に於て行はるべき事業の範圍を標準として、如上の製造事業に關し必要ある場合に土地收用法の適用あるものを制限したのである。

土地收用法適用の効果如何と云ふならば、製鐵事業は一の産業に外ならざれども、

軍器の獨立、國防の充實及基礎工業の發達上特に奨勵を必要とする關係に於ては、公益事業と同様の特典を與ふるの必要ある事情に由るもので、大製鐵所の設立上至大の利便たるを失はない。尙鑛業法には鑛業權行使上必要なる土地に對しては別に強制使用の特典を與へて居る。是れ鑛山の所在既に確定する以上、鑛物の採掘及その處埋上必要な土地又自ら限定せられ、強制使用の途なきに於ては、爲めに鑛區開發に障害あること甚だしきが故で、鐵鑛山の採掘及その製鍊事業は何等製鐵能力の制限なく、他人の土地を強制して使用することを得るのである。

(二)營業稅所得稅及地方稅等の免除に付て一言す。大製鐵所は大資本を要するものであるが、其の利率も歐米に比して高く、諸機械材料の價格も高く、鐵鑛石炭等諸原料亦比較的高價で、歐米諸國の製品と内地で競争する場合、經營上困難多き事情がある。且つ事業の性質上開業の當初から相當の利益を擧げ難きものであるから、開業初めに營業者の負擔を軽減し、固定資金の消却を容易ならしむる爲め、一定期間内國稅

を免除するは必要な處置である。現行營業税法、所得税法に於ても製鐵業は既に開業の年及翌年より三年間免除せられ居るが、奨励法は只大製鐵所の發達奨励の爲めに現行法の認むる期間のみでは短きに過ぐるを思ひ、且つ地方税の免除をも必要としたものである。更に又營業法に依る公課の免除以上に公課輕減の利益を與へんとするものである。(免除期間十年)

(三)器具機械等の輸入税免除。大製鐵所の事業の成立發達を資けんが爲め、海外より輸入する器具機械諸材料の輸入税を免除し。その價額の輕減に依て固定資本の節約を爲さしめ、製鐵經濟の安固を圖らんとするものである。即ち三萬五千噸以上の製鐵所の新設、擴張事業三萬五千噸以上の能力増加、法律施行後三年内に三萬五千噸以上の能力を有せんとする事業の企畫に對し、其の所用品の輸入税を免除するものである。(免除期間十年)

以上奨励法に依る保護の效果は、大略毎年資本額に對して二分五厘以上に當る見込

で、製鐵業の創業初期に於ける收益の不充分なるを救済するの趣旨に外ならぬのである。尙詳細のことは法令に付き研究すべし。

東京 鋼材

東京鋼材は資本一百萬圓で東京府下本工場の外大阪、朝鮮、京城等に出張所を設け、獨得のスプリング並に一般鋼材の製作に従事して居るが、日露戰役當時から前身スプリング製作所主東清氏の獨力創業したもので、苦心十餘年技術の進歩は著しきものがあり、今は官設製鐵所の製品と全然同様の扱ひを受けて居るのみか、普通品の比較に依れば米、獨よりの輸入品を凌駕して居ると云ふ評判もある。工場設備の一斑を見るに製鋼爐十噸二基、瓦斯發生爐三基を初めとして壓延工場の三重式中型ロール三連、小型四連、之が廻轉に要する實馬力六百、廻轉數三百二十七の三相交流誘導電動機二臺、ヒレット切斷機一臺、六十馬力電動機一臺、再熱爐三基、冷却床二基、五噸

起重機二臺、給水装置一式、其他之に附随したる諸設備の外、研究所、試験所の設けもある。中に就て同社が最も力を傾注し、且つ同社の誇りとするものは研究と試験である。鋼材と云へば頗る粗大な製品で科學的注意の格別必要なものゝ如く、素人筋からは考へられて居るが、事實は正反對で、無数の製造工程に於ける各段落毎に極めて嚴密な分析試験を要し、顯微鏡やエツキス光線等を應用する精緻な試験さへも經なければならぬものである。而して是等工程に適用される試験の結果が直に製品の價値となり、又直に會社の利害を決定することゝなる。東京製鋼の製品が政府筋の信頼を得、又輸入品と覇を争ひつゝあると云ふも主として此試験所が有する處の誇でなければならぬ。殊に最近に於ては米國テール博士の久しく唱導し來れる化學的管理法なるものゝ應用に成功した結果工場能率が戦前より十七割強も増進し、延いて職工の收得も著しく増加したと云ふ事實もある。

製造能率の激増に依りて収入を増した同社職工は、之より先き時局以來二割の増給

並にプレミアム制度新設の結果に因る増收等と合せて戦前に比すれば十二三割の賃銀増加と爲つて居る。尙夏季は飲料水代用として牛乳を職工に與へ、或時は鶏卵三個宛飲ませなどして衛生に意を注ぎ居るのみか、精勤職工に對しては其の功を家族に分つべきものと爲し、益暮には反物一反宛その家庭に寄贈するなど用意頗る到つたものだ。政府直接事業を除けば殆んど獨占的地位に在る東京鋼材は、如何に能率増進に努力し、従業員優遇法を講ずることも、最近勃興せる工業界の新機運に應じて其の限りなき需要を充たさんには尙未だ今日の設備丈では及ばない、扱こそ六年秋季の株主總會に於ても一躍三百萬圓に増資の件も異議なく可決された譯で、製鋼の前途は多々益々有望である。

沼田古鐵

洋服が暴騰した結果、古着屋が偶然にして奇利を博した如く、鐵工界に於ても鐵材

拂底の際、古鐵材鑄直しを専門の如くして巨利を博したものである。福岡縣直方町に本店を有し東京（日本橋四日市）大阪（立賣堀）に支店を有する沼田商店の如きは其の代表的成功者であらう。商機に敏なる沼田樵藏氏の刻苦經營に來れる古鐵本位の鐵工業は此の「除外例」を奇貨として一躍千萬圓の成金と爲つた。直方には鐵工場、若松には鐵鋼所、同じく沼田造船所等、皆個人の手で經營されて居るが、事業の中心は古機械の賣買並に製作で、殊に鑄山用機械の製作に力を注いで居る。造船も二三千噸位のもの年々五六隻づつ仕上げる。若し中古機械類の在庫品を算へたら、恐らく類例のない處で、庫中常に二百五十萬乃至三百萬圓位の貯藏がある。

古鐵を材料として製作する機械は生産費の廉いだけそれだけ安價に賣れるので、鐵餽の今日に於ては恰も凶作の年に芋が賣れるやうなものだ。現に大正六年中愈鐵拂底の時期と爲つた結果は東京支店の賣上高丈けでも四百九十萬圓餘に上つて居る。鐵の材料は如何に乏しくとも、廢物に歸した鐵材には困らないから、工業界の活動す

る限り此經營法は望みがある。然らば沼田氏の如きは所謂戰時成金として單なる僥倖者の列に數ふべきものであらうかと云ふに斷じて左様でない。仔細は彼が福岡縣直方町に在つて「古鐵買ひ」の小商人から營々茲に三十年、曩日十圓の資本から二三圓の口錢を得て満足したものが遂に百萬圓を單位とするの巨商と爲つた、その閱歴が之を説明してゐる。彼が成功は僥倖に非ずして努力の結晶である。館函船渠に居た一職工が二百萬圓の成金と爲つたさて、その幸運を羨むものが多けれども、彼も單純な僥倖兒ではなかつた、僅かの資金を得て日戰戰爭後から沈没船又は坐礁破船を買占め、嘲笑漫罵の中に在つて獨り粒々苦心の末凡てのボロ船を用に立つだけのものにした。勞徒に多くして利の甚だ疑はしきボロ船掃除屋も、船腹拂底時代に入りて遂に勝利の榮冠を得た。二百萬圓は即ち苦汗の滴りである。成金々々と騒ぐが十中七八は矢張り「努力」と云ふ資本の利子である。

東京製鉄

造船業のバロメートルたるリベット及ボールドに就て研究して見るならば、時局以來其の需要の激増せることは驚くべきものがある。リベット及ボールドは所謂「鉄」のことで、船體外廓の鐵板貼り付けに要する材料である。着物ならば縫目の糸に當る者で其の用材としては最も少量であるべき筈であるが、造船業そのものゝ規模が大きいだけに此の「縫目」の材料は却々大變なものである。今、三千噸級の船を一隻造るとすれば之に要するリベット百噸、ボールド二十五噸と云ふ莫大なものと爲る。即ち逆に測定すれば百噸のリベットを注文し來れば三千噸の船が出来ると云ふことが知れる。鐵橋や建築用のリベット及ボールドは小工場の内職的生産品で間に合ふが、造船用、殊に外國航路の船に要するものになると、品質の精粗に就き嚴密な検査がある。鐵専門の工場で新式の機械に依り製作したものでないと納まらない。検査は世界に於ける造船界のオーソリチーたるロイド會社の技術者が一應必ず見る。次いで日本海軍局が再検査を爲し、之に合格した鐵材並に製品でなければ造船所へ廻さない

のである。

元内務省技師であつた武田凡三氏が抑もリベット及ボールドの専門工場を建設したのは明治二十四年の頃であつたが、造船界の進展に伴つて個人經營より合資を爲り、漸次その規模を擴張して關東に於ける唯一の製鐵業者と爲つて居た。然るに時局の影響から俄然勃興した造船業の爲め、リベット及ボールドの注文は數十倍の激増を爲つて、從來の生産力では遙かに及ばぬことゝ爲つた。

戦前關東に於ける造船臺の設備は浦賀船渠會社に二臺を有するのみであつたが、開戦以來浦賀は六臺と爲り、新たに淺野造船所が六臺、石川島造船所が三臺、横濱船渠會社が二臺と爲り、是等造船臺に建造中の船體鐵板に要するリベット及ボールドを悉く供給せねばならぬ場合と爲つたので、生産組織から改良して掛らねばならぬと、武田氏經營の製鐵事業は茲に東京製鐵株式會社と變じ、二十萬圓全額拂込で六年夏季より大規模の製造を開始して居る。

新工場の仕事はまだ二百名未満の職工で其の緒に就いた計りであるが、需要の増加率が甚だしいので生産能力を何處迄も擴大し、追つて百萬圓増資の第二期計畫を起して戦後の要求に應ずるであらうと。同會社の現況に就て見れば製鉄用の鐵材は多く得意先の造船所から割讓されるので、材料拂底の厄は免がれて居る。若し造船所よりの供給が杜絶することあるも軟鐵棒材は内地製鐵所の産出だけでも十分に間に合ふべく旁禁輸問題などは傍觀して居られると云ふ譯だ。労働者も其の主要な部分の職工は武田氏時代より引繼の人員だけで足りて居るから新設會社にも似ず、勞力の缺乏難を懸うることもない。

一、金屬鑛業

最近鑛業概況 (農商務省六年末發)

時局當初に於ては一時不況に陥りたる鑛業界も漸を追ふて活躍を見大正五、六年に

至り空前の盛況を見るに至れり固より其の間各種鑛物に就ては消長なき能はざりしも本邦鑛産物全體として觀れば實に異常の増産を示した

左に大正二年以前の鑛産價額を掲げん

| | |
|-----------|--------------|
| 大正二年 | 一六〇、五三四、〇〇〇圓 |
| 大正三年 | 一六八、四一四、〇〇〇圓 |
| 大正四年 | 二〇二、八五七、〇〇〇圓 |
| 大正五年 | 三二五、〇〇〇、〇〇〇圓 |
| 大正六年 (推定) | 四五〇、〇〇〇、〇〇〇圓 |

即ち大正六年の鑛産價額は四億五千萬圓に上り大正五年に比し四割餘の増産を示し時局前の大正二年に對照すれば實に二倍半以上の増産を見るに至れり

斯の如きは固より鑛産物市價の激増與つて力ある所なりと雖も其の産額に於ても亦金石油等に於て些少の減退を見たる外は何れも數量上の産出増進著しきものあるなり

更に主要鑛産物産出數量に付大正五、六年を對照するに (大正六年は推定)

金は大正五年二千百貫を超えたるも六年は千九百五十貫程度に止るべし之れ従来朝鮮方面より移入したる金鑛製錬に因る産金額が朝鮮に於ける製錬開始に因り減少したるを青化加里の騰貴を始め生産費の激増にも拘らず金市價の定著せるより自然産金額に影響を見たる事情あり。

銀は市價昂騰の影響を受け且産銀の増進と共に産額を増し大正五年の四萬八千餘貫に對し五萬九千貫即ち一萬一千貫の増産を示すものと推定せらる

銅は各鑛山の生産規模の擴張に因り産額増大を見たるにも拘らず歐洲船舶の支障及露國の壞類に伴ひ荷捌け面白からず英米國の市價の制限と相俟つて銅鑛業の般盛期は頂上を越えたるやの感なき能はず然れども大正六年の産額は一億八千七百餘斤を超ゆべく大正五年の一億六千七百餘萬斤に比し尙二千萬斤の増産たるを失はざるべし。

鐵は時局以來著しく産額を増加したるも大正六年中の産額は尙我需要額の一半をも充たすに足らざるべく今後大いに増産を劃せざるべからざる必要あり大正六年の産出

見込額は銑鐵四十五萬噸、鋼材五十五、六萬噸にして大正五年に比すれば銑鐵に於て十五萬噸、鋼材に於て十七、八萬噸の増産に上るべし

石炭は時局以來一般産業界の好調にも拘らず不況に沈淪し來れる特異の鑛物にして大正五年夏季以來漸く在來の貯炭の拂底及需要の激増に伴ひ市價の昂騰を見爾來比較的急激に市價増進したりと雖も其の大部分が海運輸送を要する關係上運賃諸掛りに出費を要すること多く炭業者の利益は未だ他工鑛業の如きものあるに至らざるが如し然れども長く不況を告げ來れる炭業界が六年に入りて漸く好況を見石炭の産出増加せるは鑛業の爲大に欣ぶべし大正六年の石炭産額は二千五百八十萬餘噸と推定せられ大正五年に比すれば約三百萬噸の増産見込なり需要の増加亦著しきものあるべしと雖も石炭の輸入の増加及輸出の減少と相俟つて本邦出炭の需給關係は大體平衡を失はざるものご思料す。

石油は諸工業交通機關の發達上は勿論軍事上の必要品にして其の増産は大に緊要と

する所なるも油田の状況面白からず本年産額は二百六十萬石を越ゆる少許に止まるべく結局大正五年に比し二三萬石の減額を見るが如し然りと雖も石油製品市價の昂騰は石油業者の資力を増大したるを以て今後農商務省に於ける油田調査の事業と相俵つて新油井の開坑、探坑等大に進捗すべく將來の増産は之を期待し得べし

硫黄は時局以來勃興したる鑛産の一なるも近時市價著しく低下し同鑛業の活躍期は既に過去に屬せるやの感あり大正六年の産額は十一萬噸餘に上るべく大正五年に比し四、五千噸の増産に止るべきか。

要するに大正六年に於ける鑛業界は全體として未曾有の盛況を呈したるのと云ふべく鑛業者の収益の増加は鑛業投資の増加鑛業諸設備の改善となり將來に於ける斯業發展の基礎自ら強固なるを見るべきを以て時局後に於ける我鑛業の前途に對しては他産業に比し更に大に樂觀し得べきを信す。

精鍊業の新現象

特等成金久原の名と共に日本の銅熱は頗る非常なものと爲り、所謂鑛山師の食指を動かして探検やら鑛區買占やらに空前の意氣込を示すやうに爲つたが、山師の山カン流は時局の刺戟と教訓に依り全く眞劍に爲つて來たから、技術的調査も受渡の態度も以前の如き輕薄なものではない。從來山の方面には没交渉であつた一般實業家も眞面目に之を研究する様に爲つてゐる。現に試掘出願の激増は此の消息を物語つて餘りある處である。同時に鑛産額は非常な能率で増加し殊に銅の如きは、大正三年の一億一千七百萬斤が四年度には一億二千五百萬斤となり更に五年度には一億六千七百萬斤に激増し近く二億萬斤を突破せんとするの勢ひを示してゐる。輸出額に於ては大正五年に於て一億四百萬斤其價額七千萬圓に達し前年に比し二千三百萬圓を増加してゐる。之を噸に換算すれば戰前産額約六萬噸の物が最近七萬噸となり近き將來には十萬噸に達すべき見込である。銅の原料は無論世界第二位の銅産國であるから悉く國內で産出さるゝものであるが、尤も最近支那錢を輸入して小規模の製法により是れから銅と亞鉛

を採取する額も尠くない、日本の銅は従来粗銅のまゝ海外に輸出されたものであるが最近精錬事業の進歩した結果は精銅として輸出するもの多く更に加工して銅線の輸出も尠くない。之に伴つて眞鍮工業も著しく發達してゐる。精銅及加工品としての輸出を増すと同時に當然之に準じて輸出價額が非常に高まつたのである。

銅の精錬法には日本固有の法式たる眞吹法と云ふものも現に一便法として行はれて居るが、大規模の精錬所に至つては米國式のベセマー法に依るものが多い。粉鑛の處理には多くポット品結法を利用し來つたが、最近には米國で普通に用ゐる反射爐を應用するものもある。又相前後して電氣精銅法も盛んに行はれるやうに爲つて居るが、之は銅鑛中に含有する金銀を分收して銅質を最も純粹なものとして爲し得ると同時に金銀の副産鑛から得る利益も尠くない。寧ろ金銀鑛を殊更に銅鑛へ配劑して金銀を集中する便法さへ盛んに行はれて居る。電氣精銅所の重なるものは小坂、日立、日光、大阪、佐賀關、尾小屋、大里等であるが、殊に近來の面白き現象は此の精錬事業と探鑛事業

とが偶然にして分業的態度を取るに至つたことである。日立精錬所は先づ自家鑛石を處理する外、買鑛精錬に於て大成功を博した。それが實教訓と爲つて他の精錬所でも其の製造能力の容す限り他山の鑛石を買收し、精錬と云ふ一工程に於て多大の利益を得つゝある。中には自家探鑛業なるものなくして、専ら精錬工業のみを經營する大精錬場が出来るやうになつた。瀬戸内海附近に近頃續出した精錬所は多く買鑛専門であり、佐賀關、鎮南浦等亦同様の事業に屬する。随つて鑛業家側の方でも自家銅山に一切精錬の大設備を爲すの必要もなく、自由に何處へでも原鑛の儘賣却することが出来る。云ふので、運轉資金の關係上多くの便宜と利益を得て居る。即ち如何なる小資本で如何なる小規模の探鑛事業を起すも鑛石處分に就ての心配は毫もないと云ふの實訓を得られ、事實又小鑛業家が雨後の筈の如く最近現はれて居る。

鑛山熱と鑛業機械

鑛物市價の騰貴に伴ひ、鑛業出願の件数は著しく増加した。鑛業の出願数は直に鑛業界の盛衰を下する唯一の標準であるのみならず、一般經濟界の消長をも裏書きするものである。今、戦前と開戦後との比較統計を見るに、大正元年に於る試掘出願四千八百五十件、大正五年同一萬四千九百十九件、元年探掘出願百八十五件、五年同二百二十六件、元年砂鑛出願四百五十件、五年同三百七十三件、元年出願合計五千四百八十五件、五年合計一萬五千五百十八件と云ふ驚くべき激増である。

出願鑛物の種類は石炭、滿俺、銅等が主なもので、鑛物當局者側の事務繁激に堪へざるより技術者職員共未曾有の増員を爲した程である。而して出願の内容實質から見ても従來の所謂山師連の投機的出願を爲せるものとは全然趣きを異にし、技術上の周到なる調査を遂げ、其の確定的價値を認めたる上の出願並に企業が多く爲つて居る。當然の結果として又鑛山機械の需要が未曾有の激増を爲つた。鑛山機械には掘鑿用、原鑛破碎用、熔鑛爐等種々あるが、何れも規模の比較的大なるものであるだけ、

鐵材を多量に要し、價格も頗る高い。中には平時の二倍三倍以上に當つて居るものもある程だが、尙且、注文は夥しきものがあつて、機械工場では見す／＼辭つて居る有様だ。

大塚榮吉氏の經營に係る大塚工場の如きは純然たる鑛山機械専門の製作場で、三百名近くの職工を使用しつゝ、その製造能力を盡して活動するも尙激増せる今日の需要に應じ得ず、最近分工場を建設して更に事業を擴大して居るがそれでも新規の注文は多く辭つて居る。同工場に於ける十數種の特許鑛山機械に對しては世既に定評ある處なるが、技術的研究は今も續けて居る。探掘、碎鑛等の作業も今日では日に月に新しき技術、新しき機械を要するので、機械製作者は常に研究と發明に腐心して居る。随つて新規發明に係る他の製作品を一見すれば直に之を模倣して殆んど原作品と選ぶ處なきものを製出する程、鋭敏にして精緻な頭を持つて居る。現に最近迄輸入された獨逸品其他特殊の發明品は當業者が競うて其の秘密を看破するに努め、日ならずして之

と同様の効用あるものを案出して居る。大塚工場あたりで出来る鑛山機械も随つて世界の鑛業界に誇り得べき最新のものとして、聲價を恣にして居るから、製造能力さへ増加することを得ば販路は殆ど無限と云つても可いのであるが、矢張り鑛材の暴騰と職工の拂底と云ふ二大障害の爲めに意の如く擴張が出来ない。因に鑛材の前途は今日の處未だ豫測することは困難であるが、暴騰は既に頂點に達し、これから漸次低下に傾くべきかの推測も爲し得るのである。(この稿大正六年十一月末)

成金王久原鑛業

元久原鑛業所は大正元年中株式組織に変更して飛躍の準備を爲したが、爾來數年時局の反映として稀代の成功を博し、各地要所の金屬鑛區を専有すると同時に驚くべき産額を出し、同五年には資本金を三千萬圓に増加して海外發展の大計劃を立つるに至つた。

久原鑛業の事業は單り内地に於けるのみならず朝鮮、臺灣、支那、滿洲から西比利亞、南洋、濠洲方面迄其の辣手を展ばし、英、米、佛、露等の樞地に出張所を設けて製品の處置法も極めて組織的に出來て居る。

同社經營に屬する主要鑛山及製鍊所を擧ぐるならば日立、峰の澤、東山、竹野、大瀬、高浦、河津、豊羽、吉野、小山、新居、龜田、老平、甲山、良尾、統營、成興、瑞鶴等の諸鑛山、佐賀製鍊所、家島製鍊所、鎮南浦精鍊所、日立製作所、佃島製作所等、其他計畫中のもの數多あり。

而して是等重要鑛山の總面積は何の位あるかと云ふに、大正六年前半期末に於ける調査に依ると(一)金屬鑛區數四百七十六、その面積二億五千六百餘萬坪(二)石油鑛區數百十四、その面積一億一千四百餘萬坪(三)砂金鑛區數六、流域十四、その面積四萬餘萬坪、流域五百九十餘町(四)雜種鑛區數二十三、その面積千三百餘萬坪等で、其產出金屬額は之を我國總額に對して(大正五年度調)(一)金二千三百二貫目餘中同社産額

一千七百七十九貫餘(二)銀四萬八千十貫目餘中同社産額一萬五千五百二十五貫餘(三)銅一億五千四百四十七萬餘斤中同社産額三千九百四萬餘斤、即ち主要金屬品の三割乃至五割を産出し、尙事業擴張計畫も頻りに行つて居るから何處迄發展し行くか分らない。而も戦局に入つてから銀相場の未曾有なる暴騰あり、次いで歐米の金輸出禁止問題あり、銅は戦争との關係最も深き需用品であるだけに夫々世界的に有力なる販路を有し供給多々益々辨すると同時に利得も亦減法である。但し經營主久原房之助氏の苦闘史を顧みれば必ずしも偶然なる成金者ではないことも分るが、人物評は問題外であるから略する。

亞鉛電解鑛業

亞鉛の需要は陸海軍を始めとして近來夥しきものあるも、従來は大部分輸入に俟つて居た。それが主に獨逸品であつたから、時局以來の困難は非常なもので恰も反對

に需要増加の趨勢が一層進んで來たばかりでなく、聯合側なる露國、英國などから注文も續々出て來ると云ふ狀況である。隨て價格も驚くべき暴騰を示したが、之と同時に亞鉛製造業も頓に進歩した。

資本金二百五十萬圓で最近創設された亞鉛電解鑛業株式會社は元亞鉛電氣製鑛會社を買收して規模を擴大したのであるもが、同社製造法は世界的發展と云はれた亞鉛濕電解法の分權を得て、更に改良を重ねたものであるから品質も可なり優秀のものを産出する。一ヶ月製造能力は約二百噸。

古河銅山近況

豆腐屋の伴として京都在の僻村に生ひ立つた故古河市兵衛氏の遺業、彼の古河銅山の事業は今如何、東京本社の外大阪、門司、上海等に各支店を置き、若松、博多、京城、漢口、香港、大連、倫敦等に各出張所を設け、更に最近には海外取引上の敏

活を期する爲め紐育、彼得具羅士、莫斯科、浦鹽斯德、哈爾賓、孟買、カルカッタ等の要地には夫々特派出張員を置き、又は代理店を設置して世界的飛躍の戦闘準備を爲せる様に盛觀を極めて居る。

明治十年頃買収した足尾銅山も當時は鑛産額頗る貧弱なもので、寧ろ經營の苦心察するに堪へたるものであつたが、苦闘數年にして遂に東洋一の大銅山たるの價値を表はすに至り、更に足尾以外に發見したる古河鑛業部所屬の主要鑛山は久根銅山、阿仁銅山、不老倉銅山、永松銅山、水澤銅山、大鳥銅山、川井上銅山、院内銀山、太良鉛山、龜城金山等其他炭坑として主なるものは潮頭炭坑、第二目尾炭坑、下田炭坑、新目尾炭坑、好間炭坑等で、附帶事業としての日光電氣精銅所の大設備あり、又尼ヶ崎鑛銅工場、古河水島精鍊所、横濱電線、細尾水電、其他直接古河合名會社の管理に屬するものだけでも事業の範圍可なりに廣く、之に同社の分身たるもの若くは其の後援に係る各種生産業の總勘定をするならば夥しきものと爲るであらう。鑛産は金、銀、

銅、鉛等であるが中にも銅は主要事業であるだけに産額最も多く年製銅高殆ど五千萬斤に達して居る。時局以來各方面共業務の擴張を計つて居るから生産能率は彌が上に昂進することであらう。

大阪亞鉛鑛業の實力

大戰勃發以來金屬製品殊に軍器製造上に缺くべからざる亞鉛が、その需要の激増すると反比例して輸入は漸次困難と爲つた。獨逸品供給の杜絶は無論のこと、白耳義、同精鍊業が破壊された結果殆ど我が用途を充たすの方法が無くなり、暴騰其の極に達した、恰も此の機に乗じて彼の尼ヶ崎なる大阪鑛業試験所の後身なる大阪亞鉛鑛業株式會社は、先づ神島工場の大擴張を行ひ、一舉して八百萬圓の利益を占め、十割の配當さへ能くし得るの盛途に到達した。

亞鉛鑛業はその原料を得るに左して困難を感ずるものではないが、精鍊の技術では

相當に苦心を要する。然るに同社の電氣精鍊法なるものは獨特の新法で會社の唯一なる誇りと爲つて居る處であるから、此の最も至難とされて居る點に先づ最も安心して經營することが出来ること云ふ譯である。

大正三年九月大阪北區安治川上通に設けた電氣精鍊工場は同年十一月七日青島陥落の記念日より作業を開始したもので、一ヶ月約八噸の生産能力を有するに過ぎぬ。随つて同工場の事業位では到底時局の要求に應じ得べくもないので、大正五年十一月には更に大阪西區面島町に大規模の電氣精鍊場を新設し、いよゝ其の能率を増進せしむるの計を立つた。

住友家製銅業

關西財界の巨鎮住友家の事業は銀行、倉庫、鑛山、肥料等各方面に亘つて何れも内容の充實せるものであるが、特に時局以來異彩を放てるものは鑛業殊に銅山經營並に

製銅業である。

住友別子鑛業所は愛媛縣新居濱町にあつて、別子銅山と西の川銅山の探掘並に銅精鍊其他附屬せる事業を經營して居る。中にも別子銅山は徳川時代の初期の頃より住友家の管理に屬するもので、その鑛脈延長は五千尺に達し、厚さは二十尺乃至二十五尺に及び、主要鑛石は含銅硫化鐵鑛であるが、最近銅價奔騰と同時に探掘事業を擴張して全馬力を傾け、住友家寶庫の眞價を遺憾なく發揮して居る。

住友伸銅所は曩に日本製銅株式會社の工場全部を買收し、住友別子銅山産鑛を原料として銅、眞鍮の板、棒、線等を製造しつゝあつたものであるが、其後更に大阪製銅株式會社の工場をも買收して之を中の島工場と稱し、亞鉛板、棒白銅、アルミニウム板及線等をも製出するやうになつた。住友鑛銅所は我國に於ける鑛銅業の先驅者たりし合資會社鑛銅所の業務を全部繼承したものである。又同家銅電線製造所は大阪西區貴島に在つて、裸金屬線、絶緣線、被覆線、被鉛並に鍍裝に關する凡ての作業を營ん

で居るが、是等各部の製銅機關は何れも時局の要求に應ずべく全生産能力を擧げて努力して居るから、各種製品産額も夥しく増加し、今や久原、古河、藤田組等と相並んで我國銅界の覇權を握ると同時に、着々世界的地位をも占めつゝあるのである。

而して同家の本營たる大阪東區北濱なる總本店には男爵住友右衛門氏總監の下に總理事としての鈴木馬左也氏、理事中田錦吉、湯川寛吉、久保無二雄の諸氏より支配人山下芳太郎、小倉正恒氏等に至る敏腕家揃ひで、東京、大阪、吳等を始め支那各地及布哇等の各支店を督勵しつゝ、花々しく戦つて居る。

藤田組 鑛業

明治財界の重臣であつた故男爵藤田傳三郎氏創設に係る藤田組の事業は鑛業、農業及林業等もあるも中心は矢張り鑛業である。而して彼の小坂鑛山はその金穴である。

小坂鑛山は秋田縣下にある元官營鑛山であつたが、産額も僅少なりしを、燭眼なる

藤田氏は早くも其の埋没せる鑛量を看破して明治十七年之を拂下げ設備萬端大規模のものとなして全く面目を一新したが、間もなく採鑛作業を閉鎖して銅鑛採掘に全力を傾倒するに至つたのは更に燭眼であつた。近年又五千馬力の水力電氣をも自營し延長十七哩の鑛業用輕鐵をも敷設して事業擴大し、一日優に一千噸以上の鑛石を自ら處理し得るの精鍊業をも經營して居る。

別に又岩手縣下大荒澤銅山、秋田縣下松岡、田子内鑛山其他數個の鑛山より産出する金銀銅等の産出は莫大なるものである。

現男爵藤田平太郎氏は慶應義塾理科出身で、後英國に遊學し、アルオフマン鑛山に鑛業の實地見學を爲し、歸朝後其の蘊蓄を傾けて父翁と共に畫策經營大いに努め、明治四十五年家督相續は益々其の棟腕を揮ひ來つて業務愈々伸展し、自ら社長となり、令弟徳太郎氏を副社長とし、次弟彦三郎氏を常務理事とし、骨肉鼎立して時局以來殊に異常の成績を擧げて居る。

寶永銅山

寶永銅山とはそも何んなものであらう？處は青森縣三戸郡上郷村大字關地内で、西南は秋田縣に接し、西北は彼の有名な不老倉鑛山(古河家寶庫)及四角鑛山(藤田組)に連なり、更に六里を隔て、小坂鑛山がある。地勢から云へば確かに成金國の一部に占據して居る譯であるが、曩に村井吉兵衛さんが之を經營して一たび持て餘したことがある。多年の經營に四五十萬圓も投資した揚句、遂に手を焼いて放り出さんとした、それを拾ひ上げたのが最近創立された寶永銅山株式會社である。寶の山をば見棄てるものもあり、拾ふものもある。棄つる者の不明か、拾ふ者の聰明かの疑問に答へ得る人はないが、東洋一の成金山と爲つた久原の銅鋼の如きは、一説によれば前持主が只の六萬圓で放り出したものであると云ふ珍聞もある。拾つて再び手を焼くか、但しは夢のやうな成金山に一轉して來るかは半ば天運に在り、半ばは調査の程度にも據ると

茲に會社發起人等は専門技術者を派して周到な研究を試むる一方、經濟事情からも當年の景況の今日のそれとを比較考量した結果二つの根據を發見した。第一前經營者時代には地質調査未了のため未だ大鑛脈に到達せず、探掘鑛區内だけでも無慮五億貫餘の銅鑛あることに氣が付かなかつた。第二には前經營時代の全盛期に於ける銅相場と今日のそれとは雲泥も管ならざるものがあることだ。銅相場激變が即ち銅成金を生んだ唯一の原因と爲つて居る。大正三年と五年とを比較しても約二倍と爲り、五年と六年とで又二倍に爲つた。戦前低落時代は更に安い。其當時と今日の經營では算盤の立て方が第一に違ふ譯だから、同じく手を焼くにしてからが焼き方も違ふと云ふ勘定に爲る。然らば新調査の結果は如何程の具體的材料を齎したかと云ふに(一)坑道の總延長五千八百六十尺以上あること(二)探掘し得べき箇所三十五あること(三)鑛脈は三四寸より三尺五寸に達し、正味鉞幅は三寸より一尺六七寸の間にあり、平均鉞幅八九寸あること(四)品質は最低六パーセントより最高廿三パーセントに及び普通平均八より

九に至るもの最も多量なること(五)道路完備の結果今日は山上事務所迄人力車を横付けにし得べく、運搬費も激減し得ること等、新設會社にては是等の根據を得て大いに確信する處あるもの、如く、從來の姑息な經營法を一新して俄に資本金を百萬圓と一、大飛躍を試むべし準備したものであると。

三、石炭及石油

北支の石炭及鐵

大正六年夏季中北支那に於ける鑛山事業を視察し來れる工學博士井出健六氏の談る處(朝日)左の如し。(便宜上鐵も併記す)

坊子炭坑 は青島より百五十哩離れた所にある。獨逸人が二三百萬圓の資金を投じて大規模の採鑛設備を行つた處、其の後坑内の模様が最初豫期したやうに良くなくして、地層の發動が甚だしく且つ出水の量、爆發瓦斯の噴出等が多く、採鑛には種々の

困難を伴ふ爲め殆ど放棄されてあつた時に我國の手に入つたのである。目下坑内には水が溜つて居る故、予は坑外の設備を新たに山東鐵道管理部が鑛區内に二箇所だけ或る他人に各々一日出炭二百噸を限度として斤先掘(請負掘)を以て採炭させる場所とを見た。獨逸人の着手した箇所は豫期されたほど有望でないとするも、何分廣い鑛區内の事なれば或る部分には可なり厚い炭層があるやうである。さう云ふ部分に相當の設備をすれば山東鐵道沿線に於ける需要炭位は此處から供給するに十分であらうと思ふ。それで予は坊子の鑛區に付ては今少し採鑛に付ては今少し採鑛して見るべき必要があると思ふ。

淄川炭坑 は我國の占領前迄は獨逸人が最も力を入れて經營して居たものであるが我占領頃までには未だ設備は完成せず、一日千五百噸宛出炭して居た。我國が占領してから約一年間は復舊に苦心し殊に坑内の大部分に停滯せる水の排除に努力し幸ひに完全に復舊するを得たので、爾來今日まで約二年間採炭をして居る。昨今では占領前

と同様一日五百噸を出炭する。此處には三本の堅坑があり二本は既に完成し第三の堅坑は半成の儘我手に歸したのであるが、若し多少の資本を投じ此の第三の堅坑を完成したならば更に多くの出炭を見ることが出来る。淄川炭は炭層が比較的薄き爲めに採掘が困難であるけれども、炭質が割合に良いから、多少採掘費を高く要しても、相當の収益を齎しつつ、經營する事が出来ると思ふ。目下着手せる處は廣き鑛區内の一小部分であるから尙ほ此鑛區よりは將來多くの石炭を産すべきも、何分當時は陸軍の管轄であつたから多額の資本を投ずるは不可能の様であつた。故に之は寧ろ鑛山事業を専門とする會社などに採炭を一任した方が遙に有効に稼行される事と思ふ。淄川の石炭は過半山東鐵道及其沿線に使用されるが尙輸出するの餘裕があるから我内地の石炭不足の折柄、一層出炭を増大にして、内地へ輸送する方法を講ずることが必要ではあるまいか。

博山炭坑 淄川炭坑より約二十哩の處に博山炭坑がある。此れは從來支那人が經營

して居た炭田であつて小區域の鑛區が多數にある。極姑息的に經營されて居るので、今でも掘り易き場所のみ最少の費用を以て採炭して居る。従つて採炭費は比較的安い夏時は一日の採掘額五六百噸であるが冬期は坑内の水が減じ他方には需要が増加する關係上一日一千噸位を出炭するやうである。博山の區域は淄川炭坑に連續した炭層及び之と斷層を以て區分せられて居る小炭田の二種ありて、其の炭層及炭質は淄川に比して劣らぬ良質を具へて居る。支那人式の姑息的方法は多く採炭せずして廢する憂ひがあるから、成可く大計畫で秩序正しく採掘したならば有望であると思ふ。

金嶺鎮鐵山 金嶺鎮の鐵山は獨逸の占有時代に多大の鑛量を計上して製鐵所の計畫を爲して居た所であるが、其の後の調査に依ると獨逸人の擧げて居る程の鑛量は到底無いやうである。金嶺鎮の如き鑛床に對しては正確なる鑛量を計算することは殆んど不可能である云はねばならぬが、何人が經營するとしても尙一層進みて採掘することが急務である。目下山東鐵道管理部に於て極めて僅の費用を得て一二箇所採掘を試

みつゝあるが、一日も速く採掘を進めて鑛量を確め、其の量に應じて相當の事業を起す事を必要とする。獨逸人の思つた居た程多くの鑛量は無いとしても附近に炭鑛もあつて便利であるから、先づ確定鑛量に相應する設備を以て製鐵業を創め漸次採掘の歩を進め將來鑛量の増加が明かになつた所で更に大規模に擴張し得る様にしたならば宜しからんと思ふ。兎に角金嶺鎮の採掘は成る可く急速にしたものご考へる。

開蘭炭坑 天津と山海關の中間に在る炭鑛である。之は初め支那の李鴻章が開平炭坑として採掘に着手した處であり後支那の騷動の際英國人の名義に變へ爾來専ら英國人白耳義人の資本を以て經營せらるゝことになり英國人は事務に衝り白耳義人が其の技術方面を擔當して居たのである。此の炭田區域は頗る宏大で然かも可成り良質の厚き炭層を有して居る。比較的經營の容易な炭坑であるから其後支那人が之を回收しやうとしたけれども價格の點に於て纏まらなかつた。それで支那人は其の接隣した地に蘭州炭坑を開き白國の資本を以て經營を始めた。一時は開平と蘭州の兩者が競争して

雙方共經營が困難があつたが數年前より蘭州炭坑は開平と合同して今日では開蘭鑛務總局といふ名義を以て之を經營して居る。表面上は英國人と支那人と對等に利權を有することに於て居るが實權は既に英國人の手に占められて居る。目下五箇所より出炭せるがその中一箇所は一日一千噸以内の産出に過ぎず他の四箇所は何れも一日二千噸以上を産出する事左程困難でなく、多き時は五坑より一日一萬餘噸を出して居る。昨今は一日八千噸を出炭して居るが石炭の賣行が十分にあれば一萬噸以上を出炭するは易々たるものである。炭量は豊富であり採炭費は低廉、且運輸の便が具つて居る爲め。此の石炭は北支那に於て最も勢力を有して居る。北京、天津、京奉沿線は勿論秦皇島より船に積載し輸出するから支那沿岸日本内地にも容易に供給せられる。目下の處では東洋第一の大炭坑である。

撫順炭坑 滿鐵の經營せる滿州第一の炭山は撫順炭坑である目下千金寨、大山、東郷、楊柏堡、老虎臺、萬達屋及古城子の七箇所の坑より出炭して居る。前の六坑は專

ら坑内採掘に依り古城子のみは露天採掘法に依つて居る。此の外龍鳳坑が鑛區の東端に起坑されつゝある。撫順に於ては一日八千噸宛を出炭して居たが目下は一日二千噸位を出す大鑛山が變災後未だ復舊に至らぬのと東郷坑が舊坑整理の爲め出炭に全力を注ぐ能はぬのことで全體で一日六千噸位しか出して居らぬ。今や石炭の需要は益々多きを加へつゝある時だから、努力したならば多少は出炭を増加せられるであらうが、現狀を以てしては多大の出炭増加は期待されぬ。此の炭坑にては採炭方法として數年來水力を以て土砂を充填する方法を採用し作業が大に秩序的に行はれて居る。又古城子に於て目下行ひつゝある露天採掘法は、澤山のステイム、シヨベルや廣軌機關車を用ひて可なり大仕掛けであるが、猶ほ一層區域を擴張したならば出炭を増加することが出来るかと思ふ。撫順炭坑に於ては其の石炭が副産物工業に適する處よりモンド瓦斯の設備を爲し日々多量の硫酸肥料を回収すると同時に其發生瓦斯を燃やして電力を起し既に四千キロワットを發電して居るが、近く其の規模を三倍にすべく今や大半

竣成するに至つた。電力の餘裕を以て化學工業に利用せるは寔に良い方法であると思ふ。撫順鑛區の東隣に塔連炭鑛と云ふ一炭鑛が起業されつゝあるが、其の區域は廣くないけれども其の炭は西部に於ける撫順炭よりも骸炭になり易い質を具へて居る特長がある。此撫順炭田東邊の石炭と本溪湖炭とは共に滿洲に於て製鐵用として重要なものであらう。

本溪湖炭坑 大倉組と支那政府の合辦を以て經營せる本溪湖炭坑は目下一日千五百噸程度の出炭をなすつゝあり、此の石炭は骸炭を作るに適する炭質である故に製鐵用として必要のものである。現在の出炭の大部分は同會社の經營せる製鐵事業に使用せらるゝも鑛區廣きを以て採炭しやうとせば可なり多く出炭せらるゝやうである。同會社の經營せる廟兒講の鐵山は現在一日約三百噸の良質の鐵鑛を出し、之を本溪湖に送つて製鐵して居る。本溪湖にては熔鑛爐一座を以て一日百噸の鉄鐵を産出して居るが近々此の爐を二座に増加し、其の産額も倍加しやうとして居る。